

送電線鉄塔建替工事に伴う

鬼虎川遺跡第46次発掘調査報告書



2001.12

財団法人東大阪市文化財協会

例 言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が1999年度に実施した送電線鉄塔建替工事に伴う鬼虎川遺跡第46次発掘調査報告書である。
2. 本事業は関西電力株式会社・大阪南支店(支店長 宮原武壽氏)より委託を受け、財団法人東大阪市文化財協会が実施した。
3. 現地調査は1999年1月12日～同2月17日まで、整理作業は調査終了直後から2001年12月31日にかけて断続的にこなった。
4. 現地調査および整理作業は財団法人東大阪市文化財協会・別所秀高が担当した。
5. 本書の執筆は、第6章を辻本裕也・伊藤良永氏(パリノ・サーヴェイ株式会社) 第7章を株式会社文化財調査コンサルタント(担当:渡辺正巳氏) それ以外を別所が担当した。
6. 本書で用いた水準高は東京湾平均潮位(T.P.)を、平面座標は昭和27年に国土調査施行令で定められた平面直角座標第IV系を基準にした。
7. 調査・整理に参加した補助員は以下である(五十音順)。
石割珠貴 伊東達貴 杉本憲治 山本健一郎
8. 本事業では関西電力株式会社の御協力を賜ったほか、現地では関電興業株式会社諸氏に御尽力いただいた。調査中に現地に来訪いただいた大阪市立大学医学部第二解剖学教室の安部みき子氏、財団法人大阪府文化財調査研究センターの秋山浩三・後藤信義・若林邦彦氏からは有益な御教示を得た。また、パリノ・サーヴェイ株式会社の辻本裕也・伊藤良永氏には珪藻分析についての玉稿を賜った。これらの方々に記して感謝いたします。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 鬼虎川遺跡周辺史と既調査成果, 生駒山西麓の地形	2
第3章 堆積層と堆積環境変化過程	4
第4章 遺構	11
第I遺構面	11
第II遺構面	13
第III遺構面	17
第IV遺構面	21
第V遺構面	23
第VI遺構面	26
第5章 出土遺物	29
5.1.1 DC1出土土器	29
5.1.2 II-0面遺構出土土器	30
5.1.3 DC2・DC2黒色泥層出土土器	34
5.1.4 II'面遺構出土土器	43
5.1.5 DC4遺構出土土器	44
5.1.6 IV面遺構および5層出土土器	50
5.1.7 DC5および8層出土土器	50
5.1.8 CN1および13層出土土器、その他縄文土器	52
5.2 土製品	53
5.3.1 打製石器	57
5.3.2 磨製石器	60
5.4 木製品	62
5.5 動物遺体	62
第6章 鬼虎川遺跡46次調査地点の珪藻化石	65
第7章 鬼虎川遺跡46次調査に伴う花粉分析	72
第8章 弥生時代中期末の銅鐸形土製品について	79
第9章 墳丘墓出土1号人骨について	81
第10章 まとめ	82
文 献	83
報告書抄録	84

第1章 はじめに

鬼虎川遺跡は東大阪市の東部、西石切町・水走・弥生町・宝町にかけて広がる遺跡である(図1.1)。1963年に外環状線沿いの水道管敷設の工事現場で偶然発見されて(藤井・都出1967)以来、これまでに47次にわたる調査が行われた。とくに遺跡地の北辺では高い密度で調査されてきた。遺跡地は生駒山西麓域に広がる扇状地の扇状地間低地および恩智川の後背地にあたり、極めて排水の悪い一帯になっている。このため江戸時代には周辺に多数の井路が開削され、掘り上げた土を盛りその上で水田が営まれたいわゆる「掘上田」が展開された。この掘上田にともなう井路は楕円形あるいは直線形状をなし、遺跡北側をかすめる国道308号線の拡幅工事や近鉄東大阪線施設工事が着工される1970年代までは、それらの名残をとどめていた(図1.2)。

今回の調査地点の南側で近鉄額田駅から大阪外環状線(国道170号線)に通じる道は、額田谷や北側の「弁天の滝」を流下する河川が形成したかつての天井川であり、この川は昭和初期に旧国道170号線の西側で現在の新川を通して恩智川へ排水するように付け替えられた。弁天の滝から正興寺山の南側を通り、近鉄東大阪線新生駒トンネル出入口付近で西南西に向き変え新川に注ぐ河川は「鬼虎川」と呼ばれ、遺跡名の起源となった。

今回、関西電力株式会社大阪南支店によって遺跡地内の弥生町2丁目1505-2で既設送電線鉄塔の建替工事が計画された(図1.3)。建替予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地内に位置するため、東大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ弥生時代の土器が多数出土した。このため東大阪市教育委員会と関西電力株式会社大阪南支店は事前協議をおこない、送電線鉄塔の基礎部分(108.32m²)について発掘調査を実施することで合意した。財団法人東大阪市文化財協会は関西電力株式会社大阪南支店からの委託を受け、今回の調査に至った。

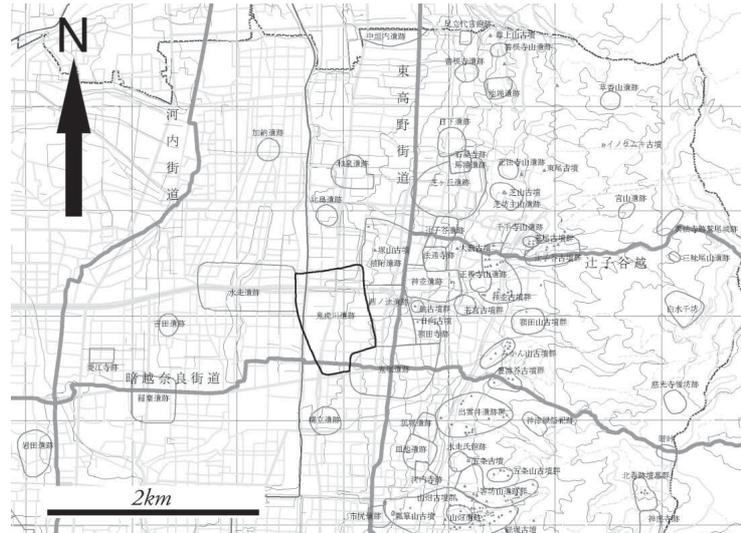


図1.1 鬼虎川遺跡の位置と東大阪市東北部に分布する諸遺跡



図1.2 調査地遠景。中央の鉄塔の下。北方の国道308号線から調査地を臨む。手前側には掘上田の名残りがみられる。

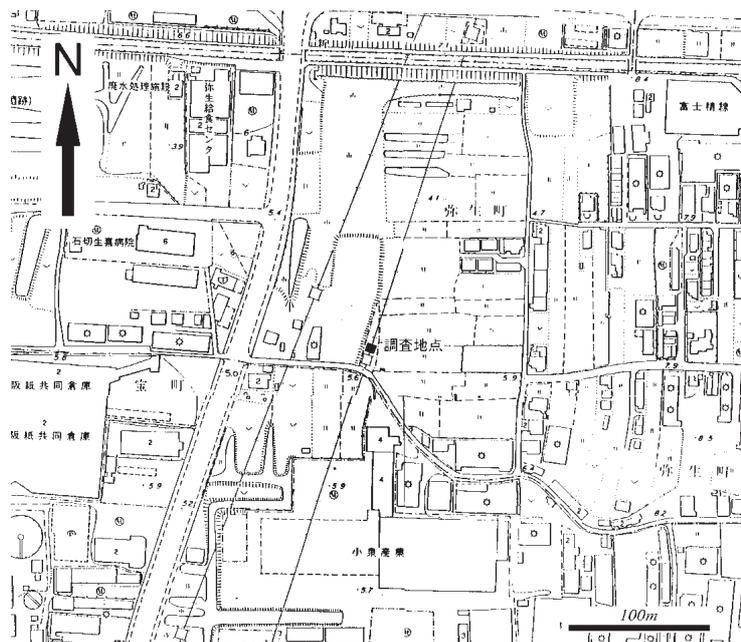


図1.3 鬼虎川遺跡第46次発掘調査地点

第2章 鬼虎川遺跡周辺史と既調査成果，生駒山西麓の地形

鬼虎川遺跡は生駒山西麓の扇状地扇端から低地部にかけて拡がり(図2.1) 現地表面の標高は4～10mである。鬼虎川遺跡東側の生駒山地は最高峰の生駒山を中心に斑れい岩が分布し、その周りを花崗岩が取り巻いていることが知られている(例えば日本の地質「近畿地方」編集委員会編1987, 生駒山地領家帯研究グループ1986など)。「生駒西麓産」と呼ばれる角閃石を多量に含む胎土をもつ土器は、この生駒山斑れい岩に含まれる角閃石が起源である。生駒山地の西縁には南北方向に発達する生駒断層があり(前田1966) その西側には階状扇状地が発達し、さらにその西側で低地が広がる。下川ほか(1997)によれば、生駒断層は東大阪市善根寺のトレンチ調査では約1.4万年前以降に1回の断層活動があったこと、四条畷市清滝のトレンチ調査では2000～1200年前の間に最新の断層活動が確認されている。

寒川・宮地(2001)は辻子谷谷口付近に点在する古期扇状地面の形成年代を8～13万年前とした。また、その西側に発達する扇状地面の形成年代を2～3万年前としているが、空中写真の判読と考古遺跡で得られた考古遺物年代からさらに細分することができ(図2.1) 低所から高所に向かって完新統最上部扇状地面(HU)、完新統中・上部扇状地面(HM)、更新統最上部扇状地面(PU)、完新統下部扇状地面(HL)、更新統下部扇状地面(PL)の順に配されている。このうち鬼虎川遺跡は扇央付近から低地部にかけて舌状に張り出したHU面とPU面、低地面にかけて拡がっている。今回の調査地点が載っているHU面は、調査成果から判断して縄文時代中期ごろから形成され始め、表層は平安時代の堆積物からなる。

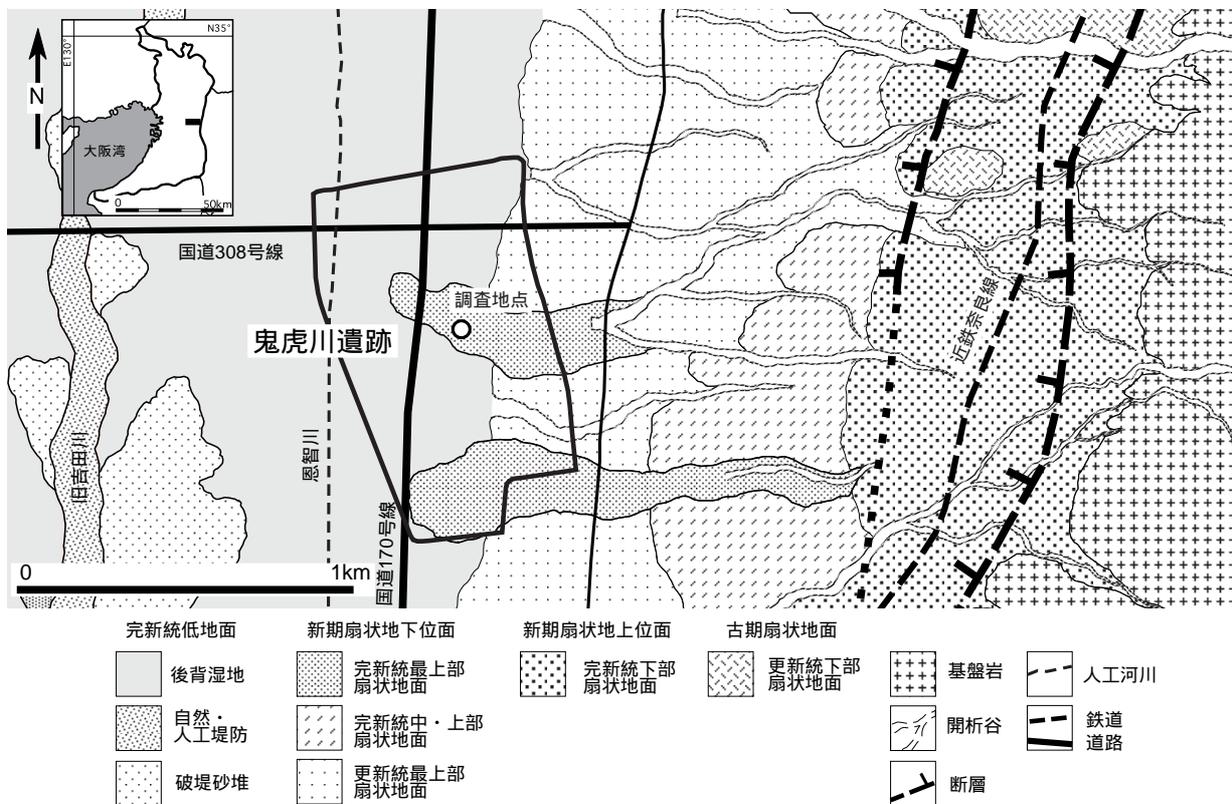


図2.1 鬼虎川遺跡周辺の地形分類(別所2001aを改変)

いっぽう、本調査地点の北方約600mのところでは実施された第25, 29・30, 32, 33次調査では縄文海進最盛期頃に形成された海食崖(海岸線)が検出された(東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会1988, 財団法人東大阪市文化財協会1994, 1996)。この崖はおおむね現在の標高6m下、更新統最上部扇状地面と低地面の境界付近に埋没しており、6mの等高線に沿ってみられる現在の段差は海食崖の名残と考えられる。

これまでの鬼虎川遺跡やその周辺遺跡の調査では、縄文時代晩期末から弥生時代前期(2600~2300年前)にかけて現在の大阪外環状線より西側の鬼虎川遺跡から水走遺跡の範囲に貝塚が点在していること、弥生時代中期(2300~1950年前)にはその南東側に居住域があり、墓域が大阪外環状線の東側に点在していたこと、中期末には墓域はより東側に拡大し西ノ辻遺跡や植附遺跡の範囲にまでおよぶこと、さらに弥生時代後期には居住域が近鉄東大阪線新石切駅付近の西ノ辻・植附・神並遺跡の範囲に移されたことが明らかになった。このような低所から高所への生活域の移動は、当時河内平野に広がっていた「河内湖」(梶山・市原1972)の湖水面の相対的な上昇(地学団体研究会大阪支部編著1999)と密接にかかわっていると考えられる。

弥生時代後期以降、鬼虎川遺跡や水走遺跡の範囲は河内湖湖底あるいは後背湿地の環境に変化したが、山地から供給される土砂によって徐々に埋積され、古墳時代後期頃(5世紀)には再び陸化した。鬼虎川遺跡第26次(大阪府教育委員会・東大阪市文化財協会1995)や第33次調査地点(東大阪市文化財協会1996)では、5世紀中頃の竪穴住居跡や須恵器・土師器などが検出された。同時期の集落は東側の西ノ辻・植附・神並遺跡でも展開されたようで、製鉄址や滑石製品の工房跡、水利遺構、畑の耕作地跡などが見つかり、周辺一帯は在地の集団よりも高度な技術体系をもった百済系の渡来人の集落であったと考えられる。

平安時代末(12世紀)から室町時代前半(14世紀)にかけては、国道308号線沿いで井戸や配石遺構、遺跡範囲北縁部で井路や畑の耕作地跡などが検出されている。第26次調査では井戸から「蘇民将来」と書かれた護符が出土した(大阪府教育委員会・東大阪市文化財協会1995)。隣接する植附遺跡や西ノ辻遺跡でも「蘇民将来」と記された護符や人形(ひとがた)が検出されていることから、周辺は呪いを司る集団と密接にかかわっていたことがうかがえる。

6世紀から11世紀および15世紀から17世紀にかけても、鬼虎川遺跡周辺は地下水位の上昇にともなって湿地が広がり、顕著な人間活動は途絶える。しかしながら、より高所に位置する西ノ辻・神並・植附あるいは鬼塚遺跡では比較的継続して集落が営まれる。このことから低所に位置する鬼虎川遺跡の範囲は、縄文時代晩期以降、人間と水(とくに地下水)とのせめぎ合いの場であったと言える。現在では鬼虎川遺跡の範囲は鉄道や国道、有料道路、ビル、工場などの建築物が立ち並ぶが、今日でもわずかに開発から取り残された田地ではひとたび大雨が降ると部分的に冠水し、水がはけない状態が数日か続いている。

第3章 堆積層と堆積環境変化過程

鬼虎川遺跡第46次調査地点では図3.1に示した地点で堆積層を観察し、粒径組成や堆積構造、構成物、堆積後の続成作用の有無などを基準に以下の堆積相を認定した。この観察結果にもとづいて本調査地点における堆積環境の変化過程を推測する。Locs.1,2の堆積柱状図を図3.2に、東壁、西壁、北壁および中央の堆積層断面を図3.7、各遺構面と堆積層の関係を表した図を図3.6に示す。また、Locs.1,2から採取した試料の放射性炭素年代は表3.1のとおりある。

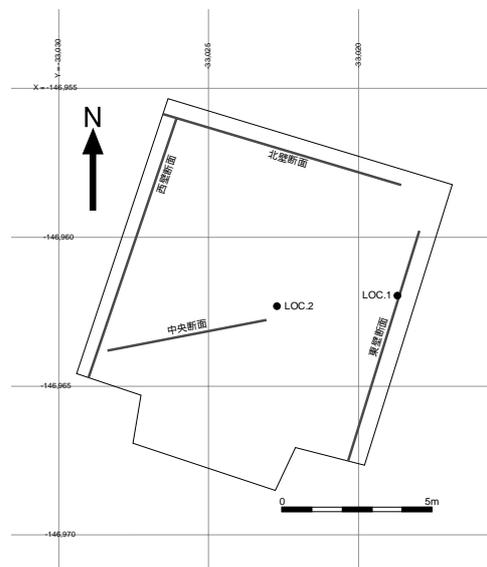


図3.1 Locs.1, 2の位置と堆積層観察地点

[堆積相 A]

トラフ型斜交層理をなす。Loc.1の3m付近の堆積相Acsは中礫～細礫を多く含む極細粒砂～細粒砂、Loc.2の0.2～0.5mの堆積相Afsは粗粒砂～極細粒砂からなる。平面で確認しているが、堆積相Acsは人工的に開削された溝を充填したもので、場所によっては側方あるいは下方へ大きく洗掘していることが認められた（第4章参照）。

[堆積相 B]

無層理で塊状をなし、比較的細かい碎屑物からなる。Loc.1の2.7～2.9mやLoc.2の-0.1m以下の堆積相Bmは粘土質シルト～シルトからなり、前者は灰色、後者は灰白色～白色を呈する。Loc.1の2.1～2.2mやLoc.2の0.8～0.9mおよび0.6～0.7mの堆積相Bfsはやや泥がちな中粒砂～シルトないしは細粒砂～シルトからなり、灰色～緑灰色を呈する。Loc.1の2.0～2.1mやLoc.2の0.8～0.9mおよび0.6～0.7m、-0.1～0mの堆積相dBmは粘土質シルト～シルトからなり、いわゆる暗色帯を形成している。Loc.2の0.6～0.8mの堆積相BfsとdBmの累重は級化成層をなす。

[堆積相 C]

人為的な攪拌がみられる、あるいは閉塞された小さな遺構内で人為的な影響を受けつつ堆積した。Loc.1の2.2～2.55mは墳丘墓の盛土部分で、下半にはさまざまな大きさの偽礫がみられた。最上部の2.5～2.55mの堆積相dCには土壌化が認められ暗色帯を形成している。Loc.1の2.55～2.7mの堆積相dCはEP3の埋土で、墳丘盛土の上部を浸食している。細礫混じり極細粒砂～シルトからなり、土壌化が著しい。

[堆積相 D]

細粒砂～シルトないしは粗粒砂～細粒砂の基質支持構造をなす。Loc.1の1.7～2.0mおよびLoc.2の1.5m以上の堆積相Dfsは細礫～粗粒砂混じり細粒砂～シルトからなり、しばしば堆積相Dcsや粗粒砂～

表3.1 放射性炭素年代測定結果

Lab.code	試料番号	種別	年代値 yr BP	誤差 +	y r -	較正暦年代 *
PAL-681	¹⁴ C # 1	木	2020	70	60	1987, 1979, 1870, 1960, 1950 cal BP
PAL-682	¹⁴ C # 2	土	2920	120	110	3075 cal BP
PAL-683	¹⁴ C # 3	土	4430	110	110	5033, 5013, 4982 cal BP

* CALIB4.3(Stueiver *et al.* 1998)を用いて暦年較正を行った年代値。第6,7章では較正前の年代値を使用している。

中粒砂の葉層を挟みつつも級化成層をなす。Loc.2の0.9～1.0mの堆積相Dfsは粗粒砂混じり細粒砂～シルトからなる。Loc.1の1.7m以下やLoc.2の1.3～1.5mおよび1.0～1.1mの堆積相Dcsは細礫混じりの粗粒砂～細粒砂からなる。Loc.2の1.3～1.5mの堆積相Dcsは堆積相Ecsに漸移的に移行している。Loc.2の1.1～1.2mおよび0.5～0.6mの堆積相dDfsは細礫～粗粒砂混じり細粒砂～シルトからなり、暗色帯を形成している。Loc.2の1.1～1.3mの堆積相dDfsとdBmの累重、0.4～0.6mの堆積相AfsとdDfsの累重は級化成層をなす。

[堆積相E]

水平層理をなす。Loc.2の1.4～1.5mの堆積相Ecsはやや泥混じり粗粒砂～細粒砂からなり、Loc.2の1.4～1.5mの堆積相Efsは極細粒砂～シルトと中粒砂～細粒砂の葉層が互層をなしている。Loc.2の1.4～1.5mの堆積相Efsの下面には荷重痕がみられる。

[堆積相F]

無層理で塊状をなし水面下で沈積した植物遺体細片を多く含む。本相より上位の堆積相Efs,Afsにかけて上方粗粒化サクセションをなす。

以上の堆積相の累重様式から以下の堆積環境変化過程を推測できる。

- ・約5000年前以前(0m以下)

湿地の堆積環境を示しているが、この層準では海水泥質干潟指標種である *Nitzschia granulata* が多産し、汽水生種珪藻が全体の約60%を占めることから(第6章参照)干潟後背の湿地の堆積環境が推測される。

- ・約5000年前～2400年前(0～2.2m付近)

流路および自然堤防にほど近い後背湿地の堆積環境が推測される。ただし、0.6m、0.8m、1.2m、2.1m付近には土壌形成が認められることから後背湿地の環境下で水位の昇降が間欠的に繰り返され、低水時には周辺が陸化していたことがわかる。Loc.2の0～0.1mは閉塞された静穏で好氣的な後背湿地の堆積環境を示す。また、この上位にかけての累重は上方粗粒化サクセションをなすことから洪水氾濫によって後背湿地に土砂が供給されたと考えられる。さらに1.0m、1.3m、Loc.1の1.6m付近から上位にかけて基質支持構造をなす砂質泥層がみられるが、これらの上部は比較的淘汰のよい細粒砂

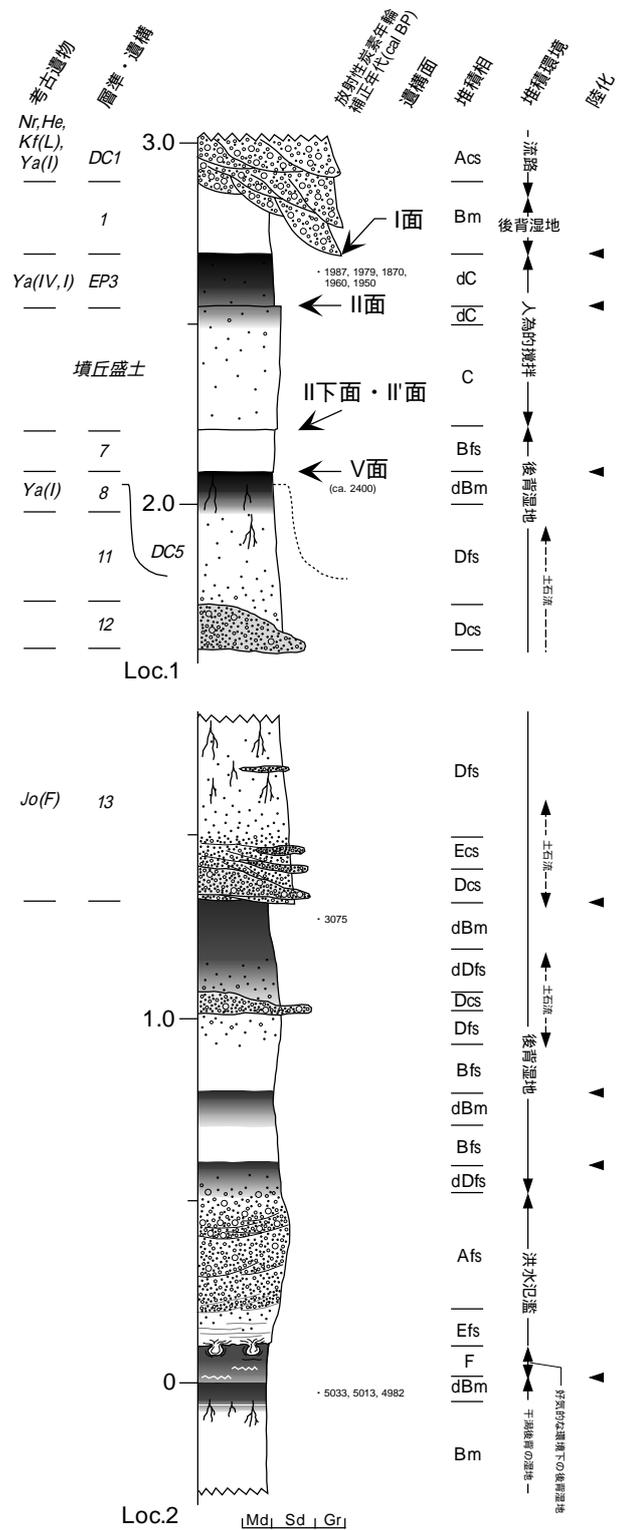


図3.2 Locs.1, 2の堆積柱状図

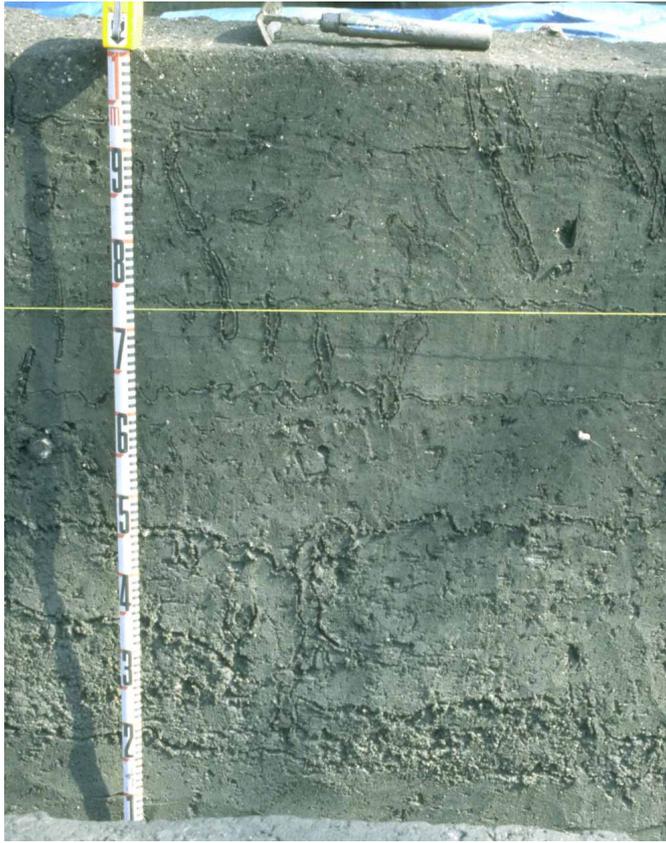


図 3.3 東壁断面，Loc1 .

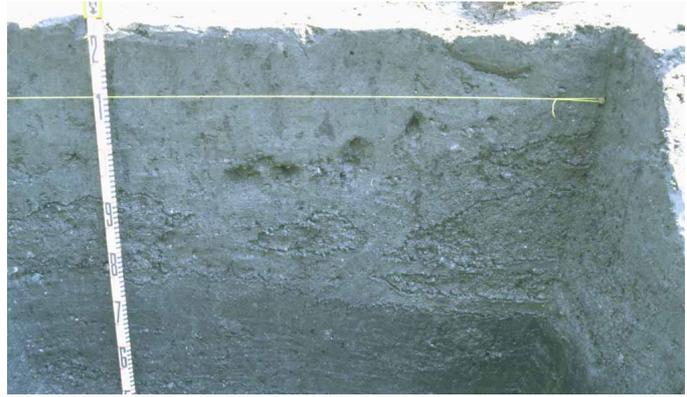


図 3.4 Loc.2 断面上半



図 3.5 Loc.2 断面下半

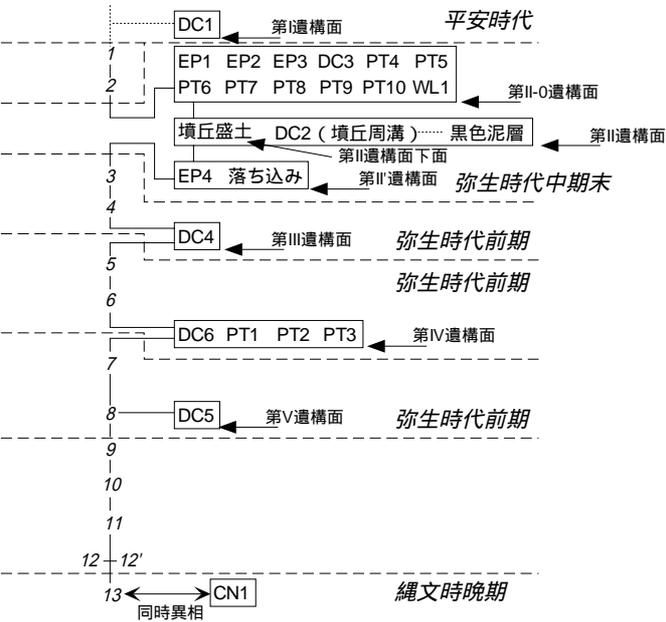


図 3.6 各遺構面と堆積層の関係

～シルトからなっており、後背湿地に土石流性の粗粒な堆積物が流入した後、懸濁している浮遊物質が徐々に沈積したものと考えられる。

このような洪水氾濫によって供給された土砂や土石流性の堆積物の積み重なりが、図2.1にみられた扇央付近から低地部にかけて舌状に張り出す微高地を構成している。

- ・約 2000 年前 (2.2 ~ 2.7m 付近)

2.2 ~ 2.55m は墳丘墓の盛土部分で、3 ~ 7 層を母材にして攪拌・盛土された。

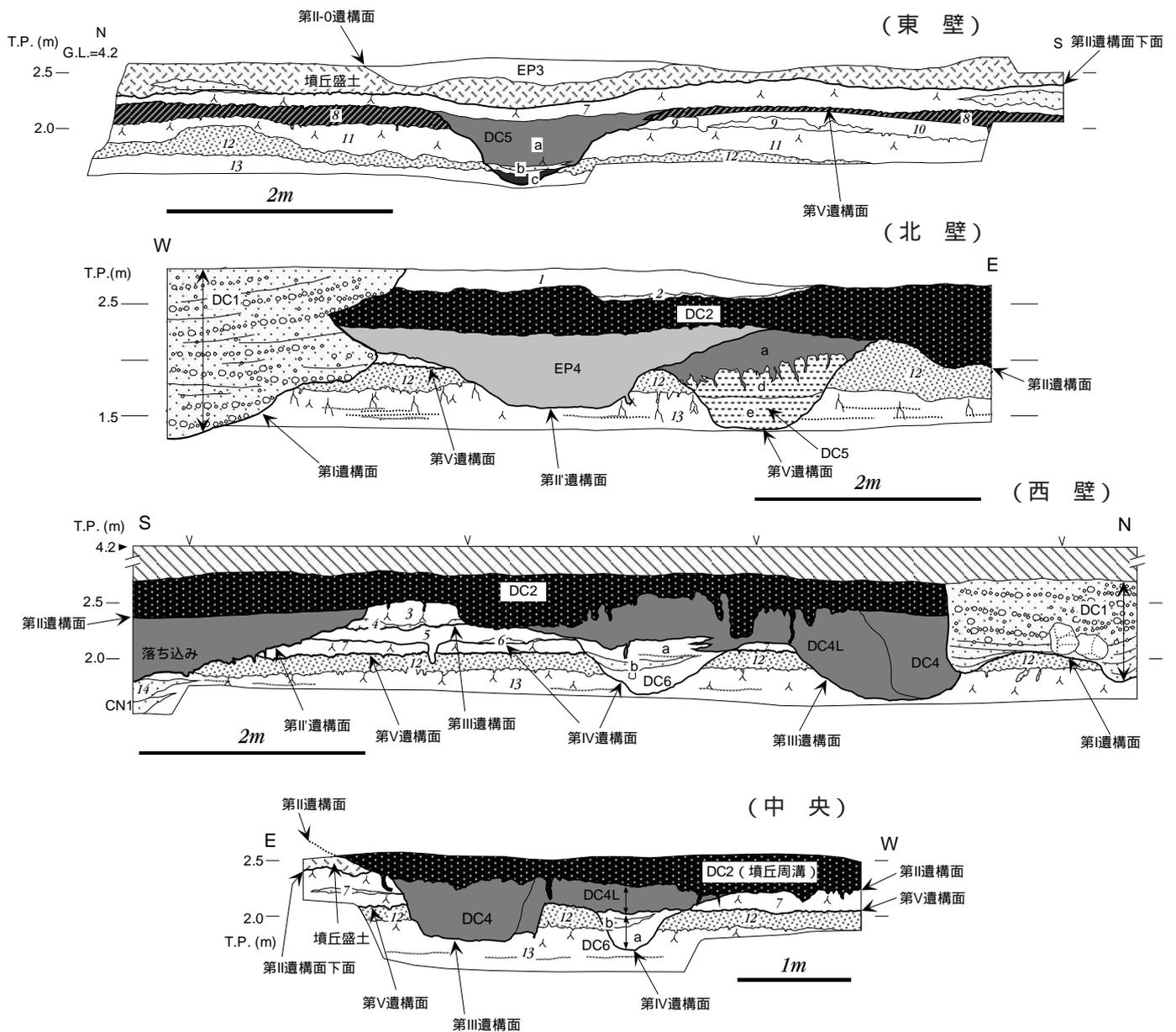
2.55 ~ 2.7m は墳丘墓の頂部を掘削してきた土坑の埋土で、基質がしばしば細礫～砂を支持しており、本土坑の埋積過程で間接的に人間が影響を与えていたと考えられる。

- ・弥生時代後期～平安時代 (2.7 ~ 2.9m 付近)

後背湿地の堆積環境が推測される。再び周辺の水位が上昇し、墳丘は完全に水面下に没した。

- ・平安時代 (2.9m 以上)

人工的に開削した溝に上流側から土砂が流入し、一時的に流路ができた。



- | | |
|---|---|
| <p>1 7.5Y6/1 灰色，塊状構造（無層理），細礫混じり極細粒砂～粘土，まれに中粒砂～細粒砂の葉層が挟まる．イネの根跡に沿って酸化鉄が沈着．</p> <p>2 2.5GY5/1 オリーブ灰色，水平層理，シルトと極細粒砂の葉層の互層．</p> <p>3 7.5GY4/1 暗緑灰色，塊状構造（無層理），細礫混じり細粒砂～シルト．</p> <p>4 5Y6/1 灰色，基質支持，細礫～中粒砂．</p> <p>5 5G5/1 緑灰色，塊状構造（無層理），細粒砂～シルト．</p> <p>6 5Y6/1 灰色，基質支持（もしくは水平層理），極粗粒砂～細粒砂．</p> <p>7 7.5GY4/1 緑灰色～5GY5/1 オリーブ灰色，塊状構造（無層理），中粒砂～シルト．</p> <p>8 5Y2/1 黒色，塊状構造（無層理），極細粒砂～シルト，まれに細礫混じる．</p> <p>9 10GY2/1 緑黒色，塊状構造（無層理），細礫混じり極細粒砂～シルト．</p> <p>10 7.5GY2/1 緑黒色，基質支持，細礫混じり細粒砂～シルト．</p> <p>11 10GY5/1 緑灰色，塊状構造（無層理），細粒砂～シルト．</p> <p>12 N3/0 暗灰色，基質支持，わずかに泥混じり細礫～中粒砂．</p> <p>13 2.5GY5/1 オリーブ灰色，塊状構造（無層理），細粒砂～シルト．</p> <p>DC1 5Y7/1 明灰色，トラフ型斜交層理，中礫～中粒砂，古墳時代～奈良時代の遺物産出．</p> <p>EP3 N2/0 黒色，塊状構造（無層理），細礫混じり極細粒砂～シルト，弥生時代中期遺物多産．</p> <p>DC2 7.5Y2/1 黒色，塊状構造（無層理），中礫～細礫混じり極細粒砂～シルト，墳丘墓周溝埋土，弥生時代中期遺物多産．</p> | <p>EP4 2.5Y2/1 黒色，塊状構造（無層理），中礫～細礫混じり極細粒砂～シルト，弥生時代中期遺物多産．</p> <p>落ち込み 7.5Y2/1 黒色，塊状構造（無層理），中礫～細礫混じり極細粒砂～シルト，弥生時代中期遺物多産．</p> <p>DC4 10GY3/1 暗緑灰色，塊状構造（無層理），細礫混じり極細粒砂～シルト，弥生時代前期遺物・動物化石多産．</p> <p>DC4L 10G3/1 暗緑灰色，塊状構造（無層理），細礫混じり極細粒砂～シルト，弥生時代前期遺物産出．</p> <p>DC6a 7.5GY5/1 緑灰色，塊状構造（無層理），細礫～極粗粒砂混じり極細粒砂～シルト，弥生時代前期遺物産出．</p> <p>DC6b 5Y7/3 浅灰色，塊状構造（無層理），中粒砂～極細粒砂</p> <p>DC5a 7.5Y5/1 灰色（北壁付近のDC2直下では黒色），塊状構造（無層理），細礫混じり極細粒砂～シルト．</p> <p>DC5b 5GY5/1 オリーブ灰色，水平層理，細粒砂～極細粒砂．</p> <p>DC5c 5GY2/1 オリーブ黒色，塊状構造（無層理），細礫混じり極細粒砂～シルト，弥生時代前期遺物産出．</p> <p>DC5d 10Y4/1 灰色，塊状構造（無層理），わずかに泥混じり中粒砂～細粒砂，弥生時代前期遺物産出．</p> <p>DC5d 7.5Y5/1 灰色，塊状構造（無層理），トラフ型斜交層理～水平層理，わずかに泥混じり中粒砂～細粒砂，弥生時代前期遺物産出．</p> <p>CN1 5Y7/1 灰白色，トラフ型斜交層理～水平層理，中礫～中粒砂，縄文時代後期～晩期遺物産出．</p> |
|---|---|

図 3.7 東壁，北壁，西壁および中央の堆積層断面図．



图 3.8 北壁断面



图 3.9 北壁断面西端部



图 3.10 北壁断面東端部

图 3.11 東壁断面



图 3.12 東壁断面南端部

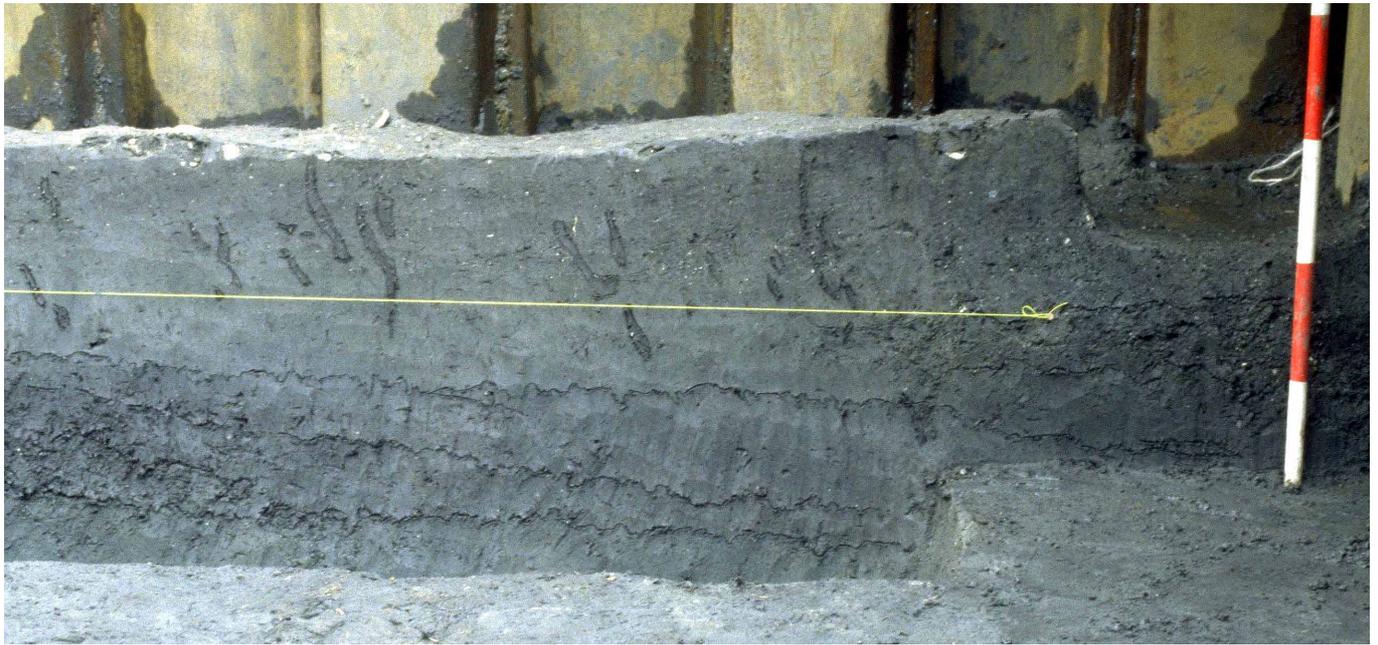


图 3.13 東壁断面北端部





图 3.14 西壁断面南半部



图 3.15 西壁断面北半部



图 3.16 中央断面

第4章 遺構

第I遺構面

調査区西よりで南北方向の溝DC1を検出したが、機械掘削深度の都合でこの遺構に対応する加工面より下位で検出している(図4.1~4)。

DC1は人口溝で幅1.8m、深さ27cmを上回る。溝を充填しているのはトラフ型斜交層理をなす砂礫で(図4.5) DC1の北端では著しく洗掘された痕跡がみられた。洗掘箇所の下底と検出面との比高差は約75cmで、充填している堆積物を除去するともとの溝の肩に相当する中洲状の高まりが残っていた。

この溝は周辺の地下水を低所へ排水するためのものと考えられるが、下流側の局所的な基準面が下がったことにより上流側の堆積物が急激にDC1に流入しはじめ、部分的に洗掘された。下流側の局所的な基準面低下は、下流側で閉塞された水域を人工的に開析したことで生じたのではないかと想像される。

DC1の充填堆積層からは縄文時代後期~平安時代の土器が出土しているが、もっとも新しい型式の土器から判断してDC1は平安時代に併行すると考えられる。

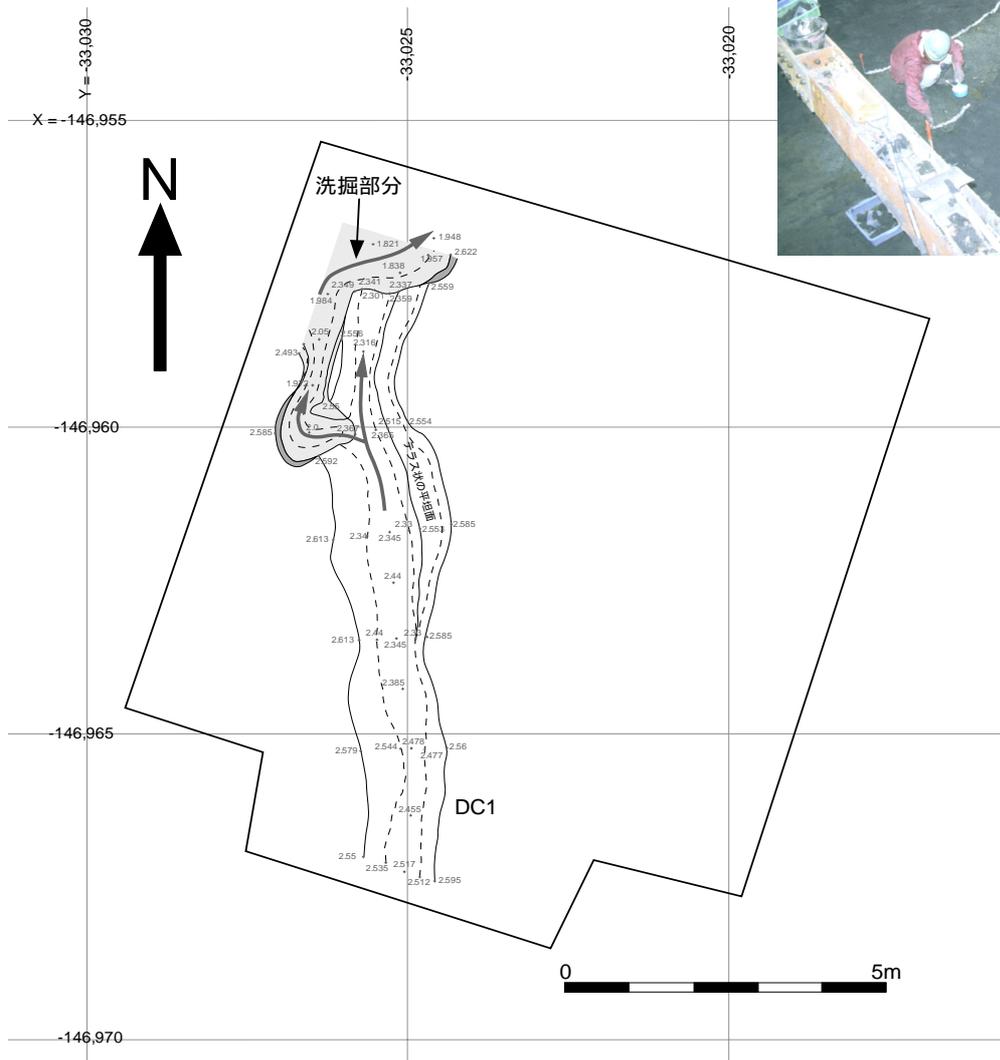


図4.2 DC1 検出作業

図4.1 第I遺構面遺構分布図



図4.3 DC1．北側（手前）が洗掘されていることがわかる．北より撮影．



図4.4 DC1．北より撮影．



図4.5 DC1断面．粗い堆積物で充填されている．

第II遺構面

弥生時代中期畿内第IV様式に併行する遺構群からなり、上位より墳丘上部に形成されたII-0面、墳丘墓とその周溝を検出したII面、墳丘盛土の下面にあたるII下面、墳丘墓築造以前に形成されたII'面に細分される(図4.6)。II下面とII'面は同一面と考えられる。

II-0面はピット・土坑群、溝、井戸からなる。

EP1は1.7×1.2m、深さ45cmの隅丸方形土坑で、調査区北東で検出した(図4.8)。

EP2は直径75cm以上、深さ20cm以上の土坑で、調査区北東で検出した(図4.7,8)。

EP3は長さ4.3m以上、深さ30cmの細長い土坑で、調査区中央東で検出した(図4.7,8)。

DC3は幅30cm、深さ10cmの溝で、調査区北東で検出し、EP1に切られている(図4.7,8)。

PT4は44×35cm、深さ23cmの楕円形ピットで、墳丘上で検出した。

PT5は直径13cm、深さ7cmの円形ピットで、墳丘上で検出した。

PT6は直径18cm、深さ15cmの円形ピットで、墳丘上で検出した。

PT7は直径7cm、深さ7cmの円形ピットで、墳丘上で検出した。

PT8は直径30cm、深さ11cmの円形ピットで、墳丘上で検出した。

PT9は直径12cm、深さ9cmの円形ピットで、墳丘上で検出した。

PT10は直径13cm、深さ10cmの円形ピットで、墳丘上で検出した。

WL1は80×91cmの楕円形井戸で、墳丘部と周溝の境界付近のDC2下底で検出できた(図4.9)。井戸底と墳丘頂部との比高差は1.6mで、井戸底は湧水があると思われる泥質砂層に達している。

II-0面検出遺構のうちピット群の多くは、墳丘盛土の掘削過程で検出したもので本来は墳丘盛土上面より上位で加工面をもつと考えられる。また、II-0面検出遺構は墳丘上で検出されたが、同時期の遺構は周溝の上にも存在していたと考えられる。これは周溝の埋土が黒色を帯びた砂質泥層からなり、おなじく黒色を呈するII-0面検出遺構の埋土と分別できず、見落とした可能性が高い。

II面は墳丘とその周溝(DC2)からな

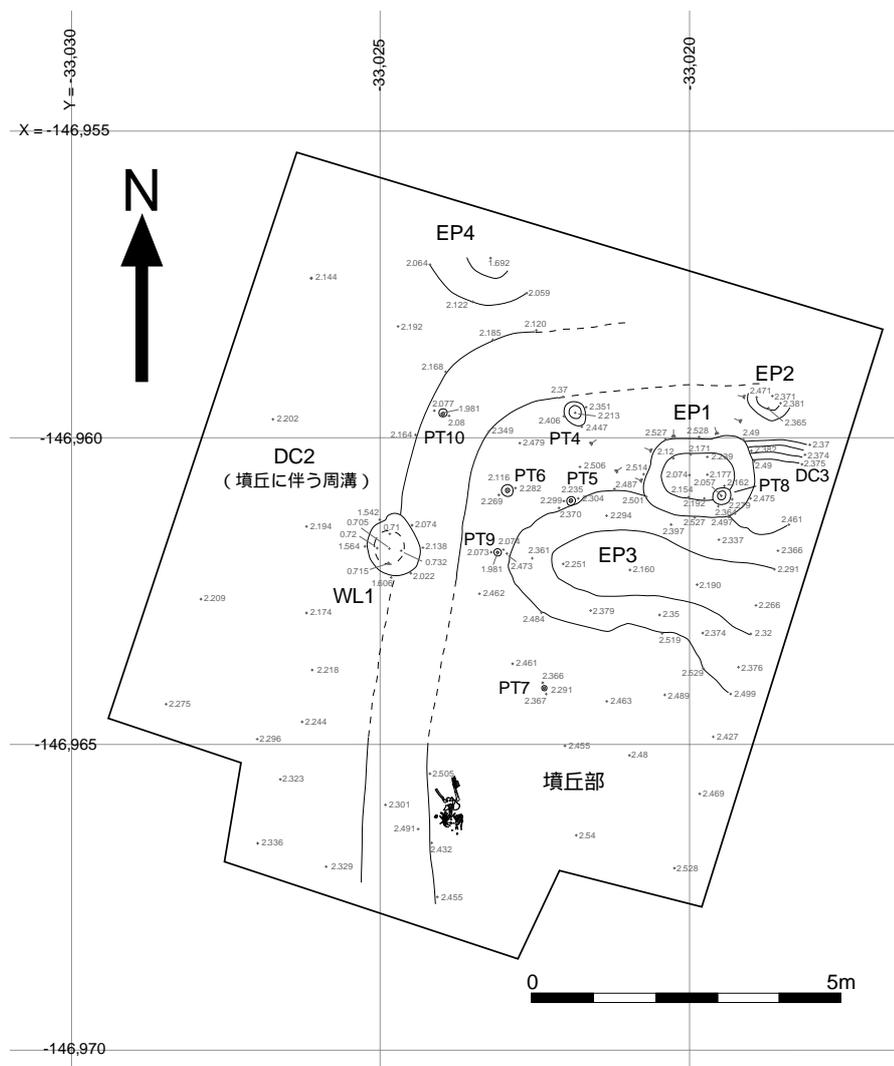


図4.6 第II-0, II, II' 遺構面遺構分布図

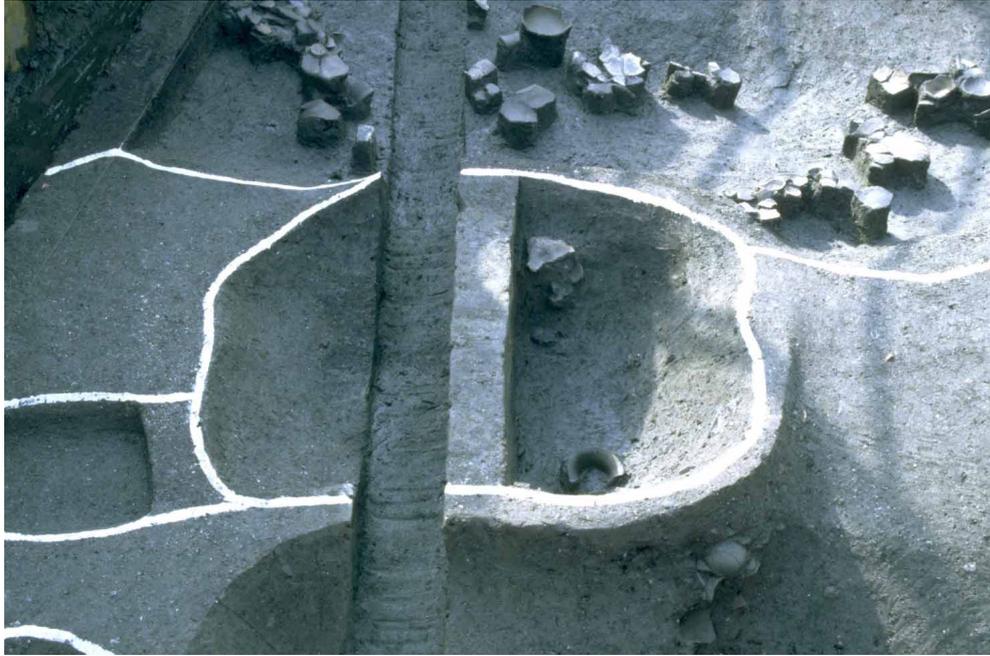


図 4.7 EP1

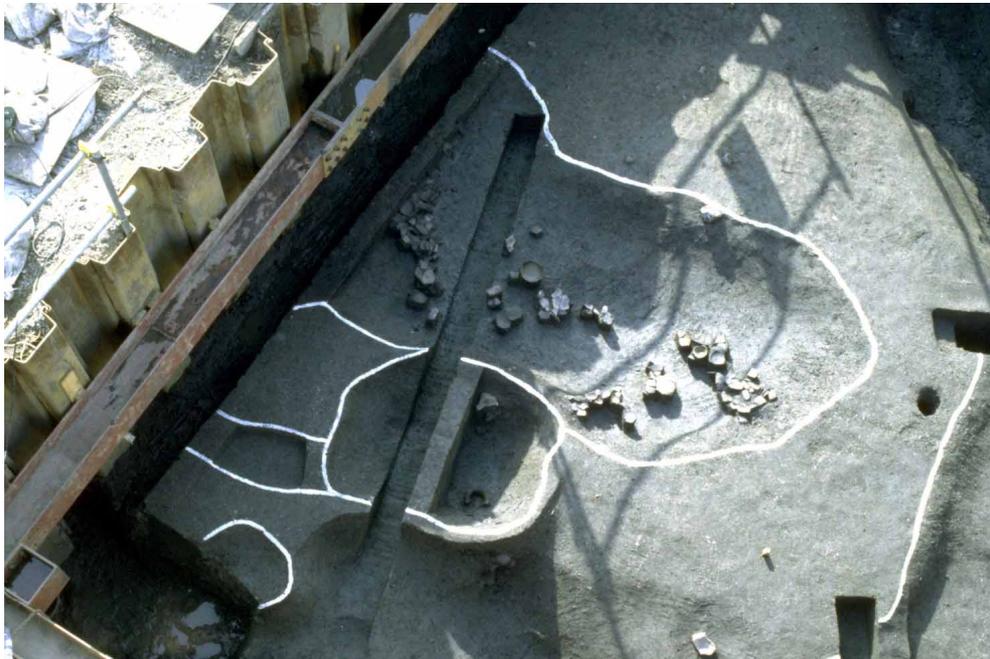


図 4.8 EP1, 2, 3, DC2 遺物出土状況



図 4.9 WL1 完掘状況

る(図4.10,11)。

墳丘は10×6.6m以上、盛土の厚さ20cm以上で、平面の規模は比較的大きい。調査区の中央から東で検出した。

DC2は幅5m以上、DC2下底と墳丘頂部との比高差は30cm以上である。調査区の西側から北側にかけてのびる。

墳丘の西端、調査区中央南端付近からは女性人骨を1体検出した(図4.12～14,17)。9章で詳述するが、人骨の検出状況から判断してもとは木棺に納められていたと考えられる。現地では木棺の埋納坑を検出することができなかった。

墳丘の斜面から周溝にかけてのところで供献土器を含む土器群を多数検出した(図4.10,11,15～17)。DC2には完形の土器が多くみられるが、下位の層準や遺構(とくにDC4)を削平して造られているため、弥生時代前期の土器も多数含まれていた。

II'面には土坑がみられた。

EP4は幅1.7m以上、深さ30cm以上の土坑で、調査区の北端で検出した。

落ち込みは幅2m以上、深さ50cm以上で、調査区の西端で検出した。平面形状は把握していない。

II面の遺構群にはDC2にみられたように、弥生時代前期の土器をともなうことがあるが、すべて下位の層準や遺構からリワークしたもので、もっとも新しい型式の遺物から判断して弥生時代中期畿内第IV



図4.10 墳丘と他の遺構 .1号人骨は墳丘西端(中央上)で検出した .北より撮影 .

図4.11 DC2供献土器出土状況 .墳丘を斜めに横切るのがDC4 .手前の溝がDC5 .北より撮影 .





図 4.13 墳丘西端検出 1号人骨



図 4.14 墳丘西端検出 1号人骨



図 4.15 周溝北西部出土供献土器



図 4.16 北側周溝供献土器



図 4.17 1号人骨と供献土器

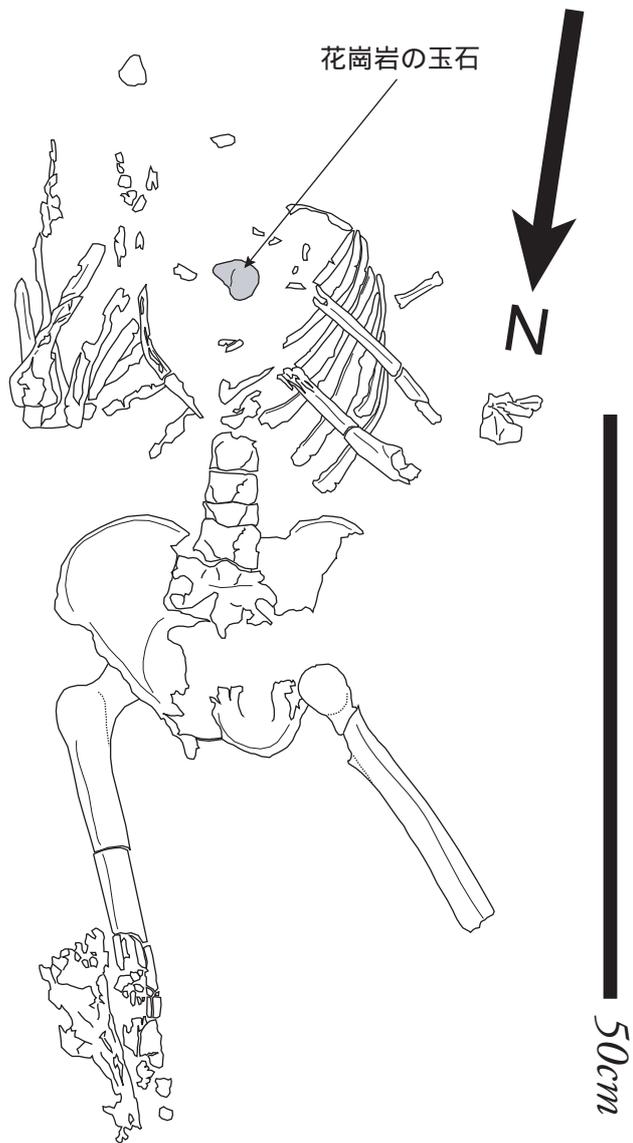


図 4.12 人骨検出状況実測図

様式期に併行する。

第 III 遺構面

調査区のやや西よりで DC4 を検出した (図 4.18 ~ 20)。

DC4 は幅 2.3m、深さ 1.1m の溝で、南南東 北北東方向にのびる。やや細礫や砂が混じる細粒砂 ~ シルトで充填されている (図 4.21)。DC4 には掘り直しが認められ (図 3.7, 4.22)、下位を DC4L、上位を DC4 として遺物を取り上げた。

DC4 の充填堆積層からは土器の破片 (図 4.23 ~ 27) や動物遺体 (図 4.28 ~ 34) が多数出土し、排水流路としてのほかに、ゴミ捨て場として使われていたと考えられる。出土した土器は弥生時代前期のもので占められ、DC4 は同時期に併行する。

幾度かの掘り直しがあり、弥生時代前期の土器片や動物遺体が多数出土する溝は、鬼虎川遺跡第 40 次調査地点 No.2 地区の溝 7 でもみられた (若松・井上 1999)。

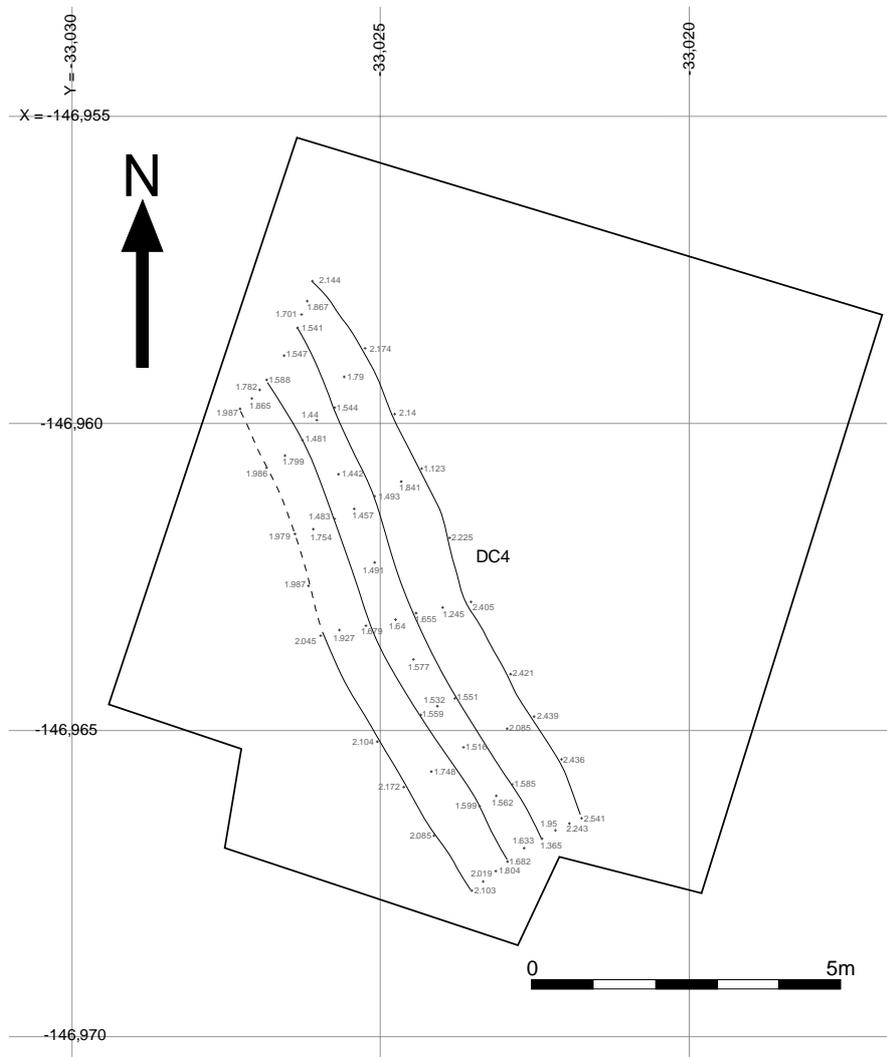


図 4.18 第 III 遺構面遺構分布図

図 4.19 DC4 . 北より撮影 .



図 4.20 DC4 完掘状況 . 南東より撮影 .



図 4.21 DC4 および DC4L (右) と DC6 (左) の断面 (西壁)

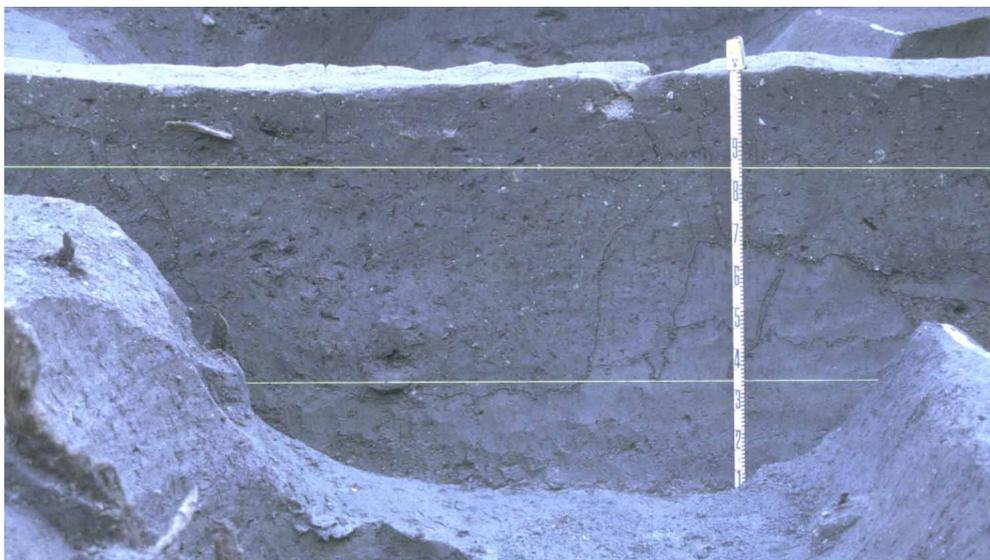


図 4.22 DC4 および DC4L 断面 (中央)



図 4.23 DC4 掘削状況



図 4.24 DC4 遺物出土状況．中央付近にみられる土器片の密集しているところはWL1にあたる．



図 4.25 DC4 遺物出土状況(1)

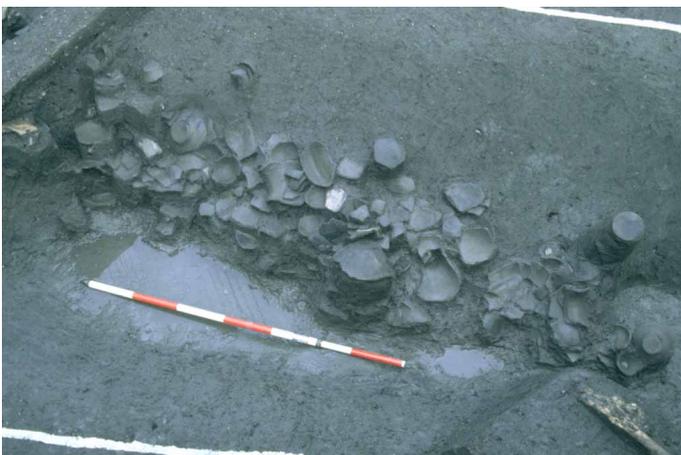


図 4.26 DC4 遺物出土状況(2)



図 4.27 DC4 遺物出土状況(3)



図 4.28 DC4 イノシシ下顎骨検出状況



図 4.31 DC4 穿孔をもつイノシシ
下顎骨検出状況



図 4.29 DC4 シカ大腿骨検出状況



図 4.32 DC4 シカ中足骨検出状況



図 4.30 DC4 加工痕のある鹿角検出状況



図 4.33 DC4 セタジミ検出状況



図 4.34 DC4 動物遺体検出状況

第 IV 遺構面

調査区のやや西よりで DC6 を検出した (図 4.35 ~ 38)。

DC6 は幅 1.1m、深さ 70cm の溝で、南南東 北北東方向にのびる。溝の西側谷壁にはテラス状の平坦面が 2 段確認した。泥が混じる中粒砂 ~ 極細粒砂で充填されている (図 4.39)。DC6 の充填堆積層からはわずかに土器が出土した (図 4.40)。

PT1 は直径 19cm、深さ 8cm の円形ピットである。

PT2 は 35 × 30cm、深さ 28cm の楕円形ピットである。

PT3 は直径 10cm、深さ 8cm の円形ピットである。

PT1 ~ PT3 は DC6 に沿って分布する。

PT1 ~ PT3 からの出土遺物はないが、DC6 からは弥生時代前期土器が出土しており、III 面は同時期に併行する。

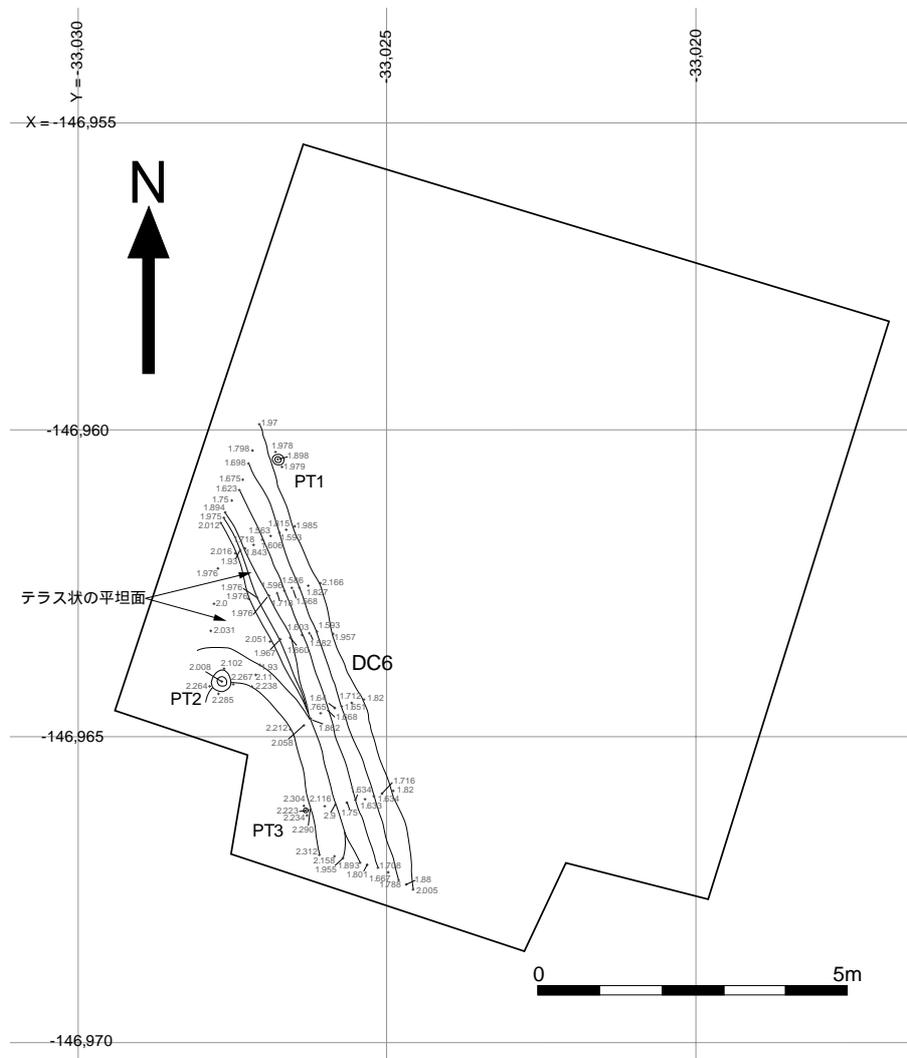


図 4.35 第 IV 遺構面遺構分布図



図 4.36 DC6 掘削状況

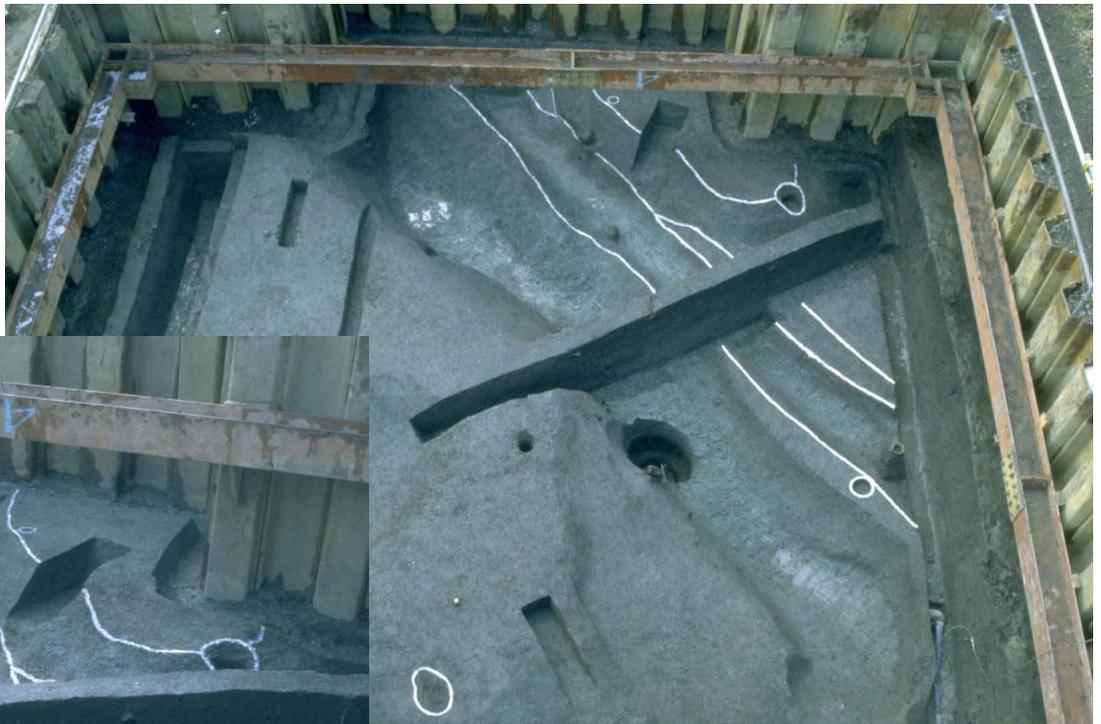


図 4.37 第IV面全影・北より撮影。



図 4.38 DC6 および PIT1,2,3 . 北より撮影 .

図 4.39 DC6 断面（中央）



図 4.40 DC6 テラス部の土器出土状況



第 V 遺構面

調査区のやや東よりで DC5 を検出した（図 4.41 ~ 43）。

DC5 は幅約 1m、深さ 37cm の溝で、南南東 北北東方向にのびる。充填堆積物は溝の谷壁に露出した堆積層の粒径に支配されており、泥層が分布する東壁付近では細礫～砂混じり泥で（図 4.44）、砂礫層が分布する北壁付近では泥混じり砂で（図 4.45）充填されている。トラフ型斜交層理～水平層理が観察でき、一時的に溝内で流水があったと推測される。

DC5 の充填堆積層からは弥生時代前期の土器片が出土したことから、DC5 は同時期に併行する。

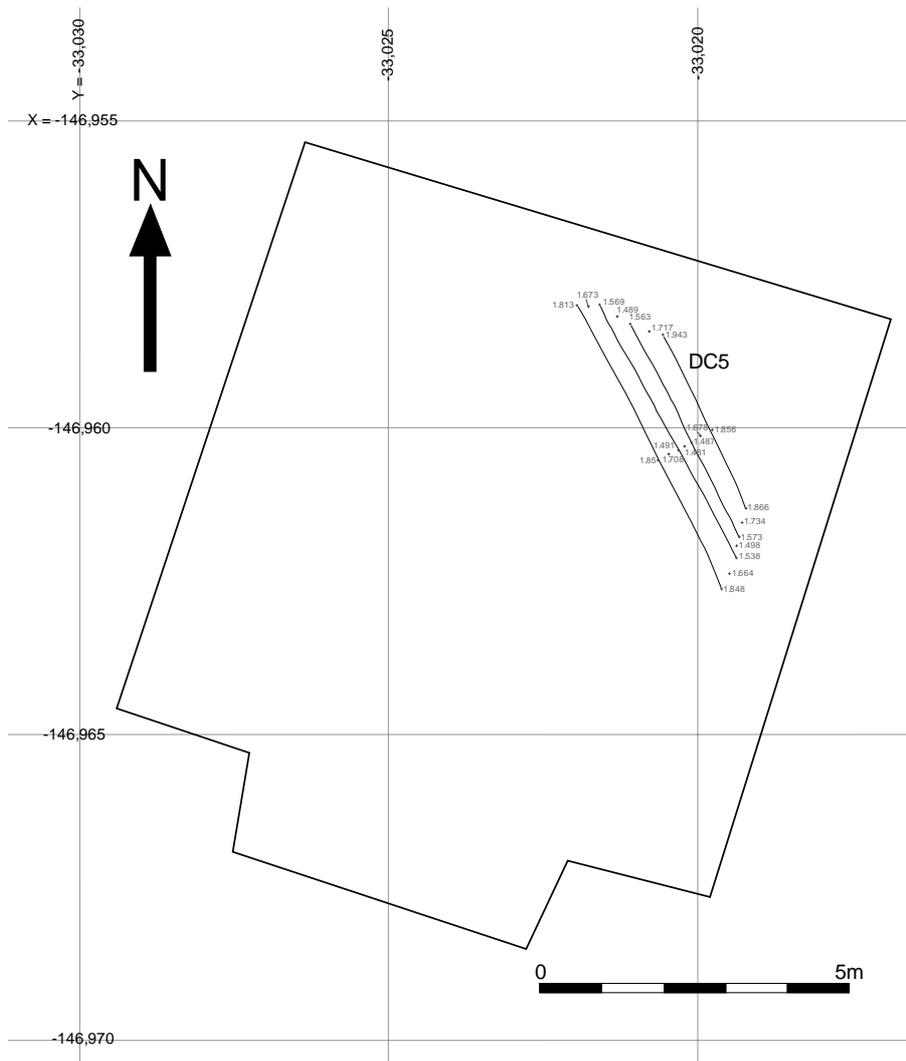


図 4.41 第 V 遺構面遺構分布図



図 4.42 DC5 遺物出土状況．北より撮影．

图4.43 DC5完掘状况 北西より撮影 .



图 4.44 DC5 断面（東壁）



图 4.45 DC5 断面（北壁）



第VI遺構面

調査区の南端でよりで西北西 東南東方向にのびるCN1を検出した(図4.46,47)。

CN1は幅2.4m以上、深さ30cm以上の流路跡で、流路充填堆積層と13層は同時異相をなす。縄文時代晩期の土器片が出土しており、もっとも新しい型式の土器から判断して縄文時代晩期長原式期に充填し終わったと考えられる。また、13層中からは木の根の化石を検出した(図4.48)。

以上の遺構面のうち弥生時代の遺構面であるII~V面は、40cm以下の層厚間に介在している。このため、溝や土坑の掘削にともなって古い時期の遺物が、新しい時期の堆積層中に混じっていることがしばしば認められた。これらの遺構面で検出した遺構のうち、DC2,4とDC5の一部、WL1の出土遺物については出土位置を対照できるように、ある程度のまとまりで番号を付して遺物を取り上げた(図4.49~51)。

ところで、III~V面で検出したDC4,6,5の平面的な分布は互いに平行であり、鬼虎川遺跡第40次調査地点で検出された溝もおおむね南南東 北北東方向にのびる傾向がある。これらの溝は一見同時期に共存していたようにみえるが、DC4,6,5については層序学的には時間間隙をもちそれぞれ独立した加工面を有することから、共存した可能性はない。このことはDC4,6,5から出土した遺物群の間に相対的な新旧関係を付与でき、未だ立証されていないと考えられる弥生時代前期の土器型式の時系列変化に対して、新たな資料を提供することになり得るのではないかと。

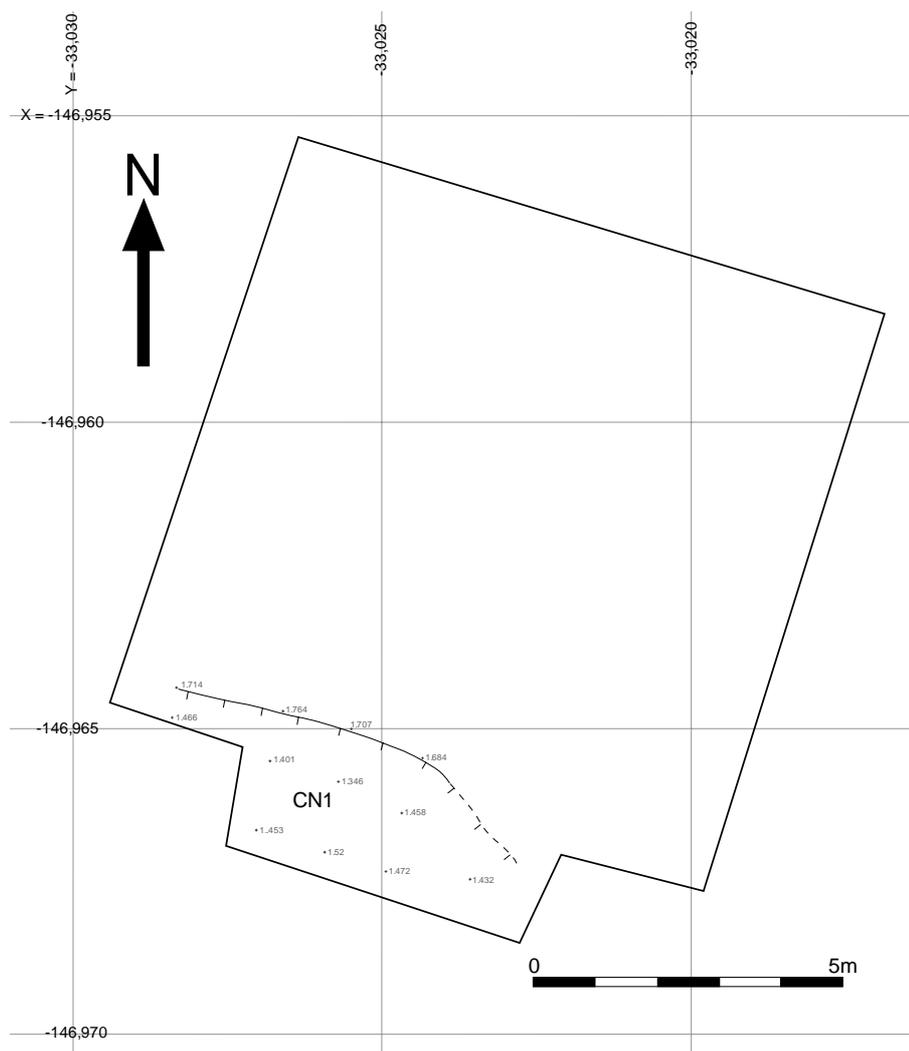


図4.46 第VI遺構面遺構分布図



図 4.47 第V面およびVI面全景．手前がDC5，上がCN1．



図 4.48 13層中で検出した木の根の化石．



图 4.49 土器出土地点 (DC2,4,5)

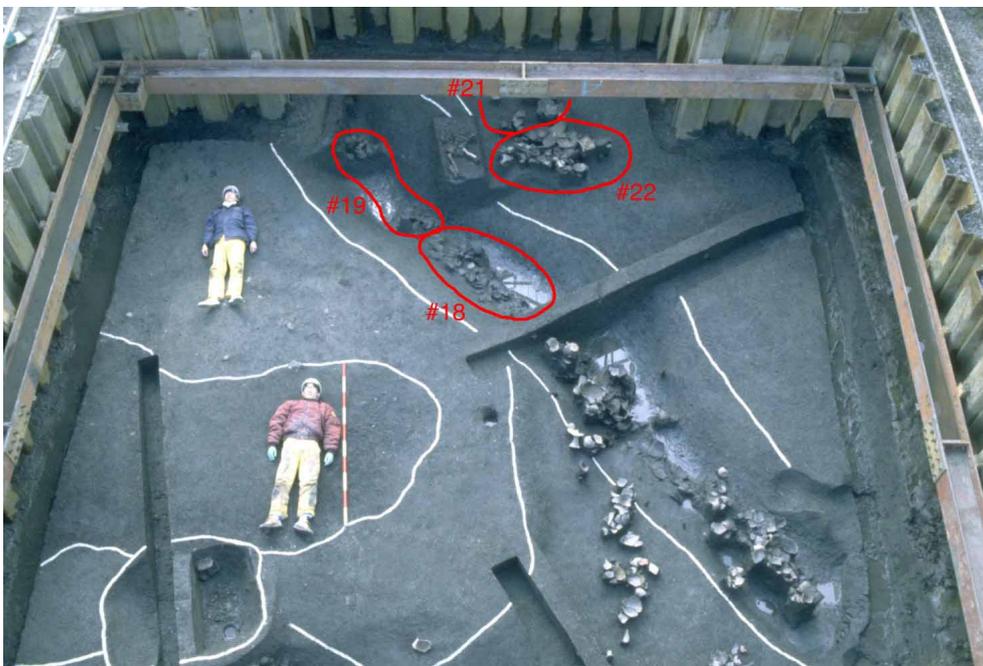


图 4.50 土器出土地点 (DC2,4)

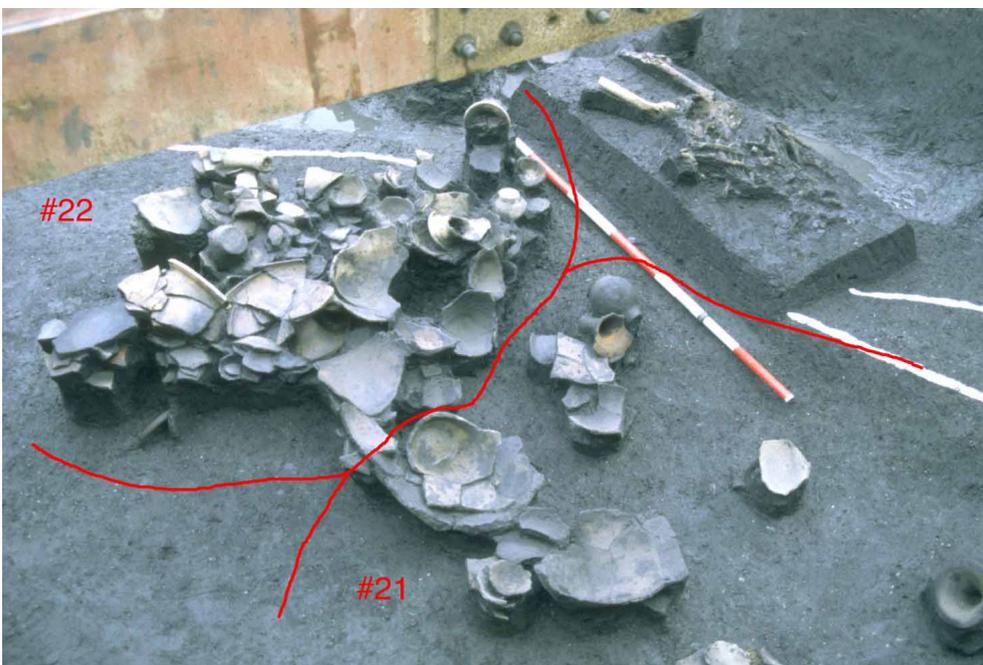


图 4.51 土器出土地点 (DC2)

第5章 出土遺物

第1節 土器

5.1.1 DC1 出土土器

弥生土器、古墳時代後期の土師器、須恵器、奈良時代の須恵器、瓦、平安時代の緑釉陶器などがみられる（図5.1.1, 表5.1.1）。

弥生土器には前期のものと、中期のものがありDC2および4から混入したものである。古墳時代以降の土器についてはもともとの層準がわからない。奈良時代の瓦（129,130）や古墳時代後期の須恵器（131）羽釜（127）平安時代の緑釉陶器（215）は表面の摩耗が著しい。緑釉陶器（215）がDC1出土土器の中でもっとも新しく、その年代からDC1の時期を決定した。



図5.1.1 DC1 出土土器

表5.1.1 DC1 出土土器一覧

ID	系 統	器 種	出土層準・遺構	時 期	含角 閃石	燻入 器	器高(cm)	口径(cm)	備 考
122	弥生	甕	DC1	弥生時代前期			11 *		下位の遺構からの混入
123	弥生	壺	DC1	弥生時代前期			9 *		下位の遺構からの混入
124	弥生	壺	DC1	弥生時代前期			8.5 *		下位の遺構からの混入
125	弥生	甕	DC1	弥生時代中期			7.1 *	13.4 *	下位の遺構からの混入
126	弥生	甕	DC1	弥生時代中期			6.5 *		下位の遺構からの混入
127	土師器	羽釜	DC1	古墳時代後期			3.6 *		
128	須恵器	杯身	DC1	奈良～平安時代			3.5 *		
129	瓦	平瓦	DC1	奈良時代					
130	瓦	丸瓦	DC1	不明					
131	須恵器	甕	DC1	古墳時代後期			5.5 *		
132	須恵器	壺	DC1	古墳時代後期			3 *		
133	須恵器	杯身	DC1	奈良時代			2.3 *		
134	須恵器	杯身	DC1	奈良時代			1 *		
215	緑釉陶器	皿?	DC1東壁	平安時代			2 *		

5.1.2 II-0 面遺構出土土器

EP1 出土土器には弥生時代前期の甕、壺などの破片がみられる（図 5.1.2, 表 5.1.2）。EP1 はその加工面がII-0面にあると考えられ、本来は弥生時代中期畿内第IV様式期に属するもので、これらの土器はDC5から混入したものである。

EP3 出土土器には弥生時代前期および中期の壺、甕、水差、縄文時代晩期の深鉢などがみられる（図 5.1.3 ~ 10, 表 5.1.2）。縄文時代晩期の深鉢は下位の層準から、前期の土器はDC5から混入したものである。中期の土器の中で完形に近いもの（228, 236, 274, 303）は墳丘墓に供献されていた土器が混じったと考えられる。228, 274, 303は弥生時代中期畿内第IV様式期に、287は弥生時代中期畿内第III様式期に属する。他の中期の土器はおおむね弥生時代中期畿内第III～IV様式の範疇に収まるものと考えられる。胎土に生駒山はんれい岩起源の角閃石を含むものが多いが、供献土器の可能性を指摘した228や274、その他に279や284は在地特有の胎土ではなく搬入品である。とくに壺228は器形から判断して、吉備地方のものである可能性がある。



図 5.1.2 EP1 出土土器



図 5.1.3 EP3 出土土器(1)



図 5.1.4 EP3 出土土器(2)



図 5.1.5 EP3 出土土器(3)



图 5.1.6 EP3 出土土器(4)



图 5.1.7 EP3 出土土器(5)



图 5.1.9 EP3 出土土器(7)

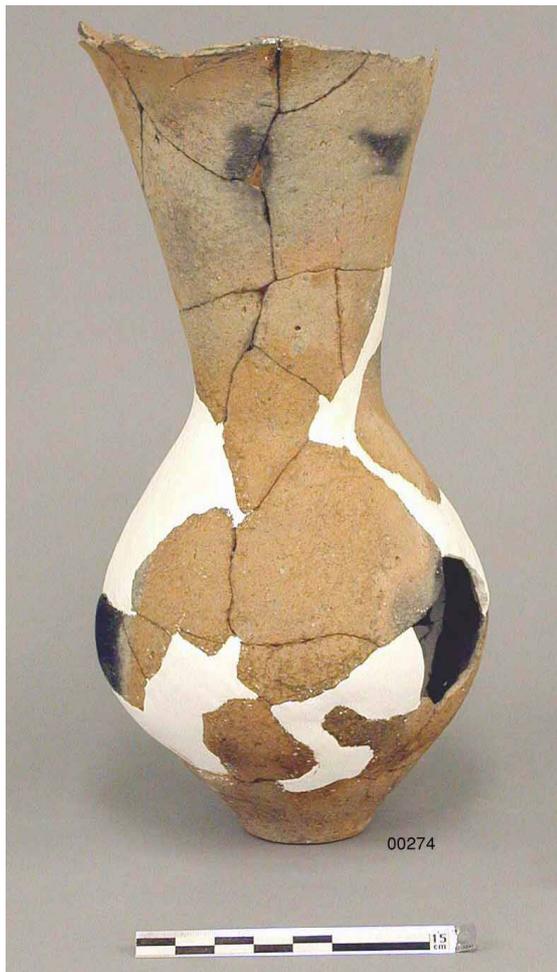


图 5.1.8 EP3 出土土器(6)



图 5.1.10 EP3 出土土器(8)

WL1出土土器には弥生時代中期の壺、甕、鉢、高杯、無頸壺などがみられる(図5.1.11～19, 26～28, 42, 59, 表5.1.2)。DC4掘削途中で、土器片が重なり合って柱状に密集する塊(DC4#9)を検出し、それらの土器が弥生時代中期に属し、DC4出土遺物とは時期が異なっていることがわかった。WL1はこの塊を除去したDC4下底で認知できたが、この塊は本来上位から掘削されたWL1の埋土に含まれていたもので、WL1は墳丘構築以前のものと判断した。土器は部分的に欠損したものや破片が多い。317, 319, 321, 322, 324, 325, 361, 362, 364は弥生時代中期畿内第IV様式期に併行し、他の土器はおおむね弥生時代中期畿内第III～IV様式の範疇に収まるものと考えられる。



図 5.1.11 WL 出土土器(1)



図 5.1.12 WL 出土土器(2)



図 5.1.13 WL 出土土器(3)



図 5.1.14 WL 出土土器(4)



図 5.1.15 WL 出土土器(5)



図 5.1.16 WL 出土土器(6)



図 5.1.17 WL 出土土器(7)



図 5.1.18 WL 出土土器(8)



図 5.1.19 WL 出土土器(9)

表 5.1.2 EP1, EP3, WL1 出土土器一覽(1)

ID	系 統	器 種	出土層準・遺構	時 期	含 炭石	燻入 品	器高(cm)	口径(cm)	備 考
304	弥生	甕	EP1	弥生時代前期			6.1 *	26 *	DC5からの混入
305	弥生	壺	EP1	弥生時代前期			5 *		DC5からの混入
306	弥生	壺	EP1	弥生時代前期			6.4 *	24.8 *	DC5からの混入
307	弥生	壺	EP1	弥生時代前期			3 *		DC5からの混入
308	弥生	壺	EP1	弥生時代前期			3.8 *		DC5からの混入
226	弥生	甕	EP3	弥生時代中期後半			26.3 *	22.2 *	
228	弥生	壺	EP3	弥生時代中期畿内第IV様式期			24.5	14.4	吉備系
236	弥生	甕	EP3	弥生時代中期後半			24.3	17	
260	弥生	壺	EP3	弥生時代前期			8.2 *	25.4 *	DC5からの混入
261	弥生	壺	EP3	弥生時代前期			10.5		DC5からの混入
262	弥生	壺	EP3	弥生時代前期			8.8		DC5からの混入
263	弥生	壺	EP3	弥生時代前期			13 *		DC5からの混入
264	弥生	壺	EP3	弥生時代前期			6 *	17 *	DC5からの混入
265	弥生	壺	EP3	弥生時代前期			9.5 *		DC5からの混入
266	弥生	壺	EP3	弥生時代前期			7.3 *		DC5からの混入
268	弥生	蓋	EP3	弥生時代中期			2.4	11.4 *	下位層準からの混入
270	弥生	甕	EP3	弥生時代前期			6.6 *	17.6 *	DC5からの混入
271	弥生	甕	EP3	弥生時代前期			9 *	26 *	DC5からの混入
273	弥生	甕	EP3	弥生時代前期			4.9 *	38.4 *	DC5からの混入
274	弥生	広口長頸壺	EP3	弥生時代中期畿内第IV様式期			46 *		
275	弥生	壺	EP3	弥生時代中期			8.5	21 *	
276	弥生	壺or甕	EP3	弥生時代中期			5.7 *		
277	弥生	甕	EP3	弥生時代中期			5.4 *		底部穿孔
278	弥生	甕	EP3	弥生時代中期			10.5 *		
279	弥生	甕	EP3	弥生時代中期			5 *		
280	弥生	甕	EP3	弥生時代中期			5.3 *		
281	弥生	甕or壺	EP3	弥生時代中期			5.3 *		
282	弥生	甕or壺	EP3	弥生時代中期			29 *	25 *	
283	弥生	甕	EP3	弥生時代中期後半			21.3	23.8 *	
284	弥生	甕	EP3	弥生時代中期後半			8.5 *	17.4	
285	弥生	甕	EP3	弥生時代中期後半				5.7	
286	弥生	壺	EP3	弥生時代中期後半			3.6 *	16.4 *	
287	弥生	細頸壺	EP3	弥生時代中期畿内第III様式期			10.8 *		
303	弥生	甕	EP3	弥生時代中期後半			34	24.6	
309	弥生	水差	EP3	弥生時代中期畿内第IV様式期					
310	弥生	甕	EP3	弥生時代前期			8 *		DC5からの混入
139	弥生	壺	WL1	弥生時代中期			8.3		
140	弥生	甕	WL1	弥生時代中期			6.5 *		
141	弥生	蓋	WL1	弥生時代中期			5.5 *		
142	弥生	壺	WL1	弥生時代中期			5.6 *		
143	弥生	甕	WL1	弥生時代中期			7.8 *		頸部絵画か？
144	弥生	甕	WL1	弥生時代中期			5 *		
145	弥生	壺	WL1	弥生時代中期後半			4 *		
317	弥生	無頸壺	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期畿内第IV様式期			14.5 *	17.6 *	
318	弥生	鉢	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期後半			19 *	42.6 *	
319	弥生	壺	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期畿内第IV様式期			14.6 *	32	
320	弥生	甕	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期後半			19.7 *		
321	弥生	高杯	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期畿内第IV様式期			16.3	20 *	
322	弥生	高杯	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期畿内第IV様式期			7.5 *		
323	弥生	壺	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期後半			9.7 *	23.2 *	
324	弥生	壺	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期畿内第IV様式期			7.3 *	11.2 *	
325	弥生	甕	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期畿内第IV様式期			8.3 *	34 *	
326	弥生	甕	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期後半			15.1 *	20 *	

表 5.1.2 EP1, EP3, WL1 出土土器一覽(2)

ID	系 統	器 種	出土層準・遺構	時 期	高 器	器高(cm)	口径(cm)	備 考
327	弥生	甕	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期後半		9 *	15.4 *	
328	弥生	甕	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期後半		9.7 *	15.2 *	
359	弥生	甕	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期後半		25 *	16.8	
360	弥生	甕	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期後半		25	16.2	
361	弥生	甕	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期畿内第IV様式期		19.1 *	27.6	
362	弥生	壺	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期畿内第IV様式期		17.5 *	14 *	
364	弥生	壺	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期畿内第IV様式期		21.3 *	20.2	
367	弥生	鉢	WL1(DC4,#9)	弥生時代中期		10.5	19.4	
370	弥生	甕	WL1(DC4,#9)	不明		15	8.6	

*付きの器高は残存値，口径は推定値．出土層準・遺構の項目で#番号は出土位置を示す（図4.49～51参照）．

5.1.3 DC2・DC2 黒色泥層出土土器

DC2および墳丘上を覆っているDC2黒色泥層出土土器には弥生時代前期および中期の壺、鉢、甕、高杯、器台、水差、蓋（図5.1.20～77,119,表5.1.3）縄文時代後期および晩期の深鉢、浅鉢などがみられる（図5.1.139,表5.1.8）。縄文時代の土器は下位の層準から、弥生時代前期の土器はDC4,6から混入したものと考えられるが、下位の層準には縄文時代後期の土器を含む層準は見あたらない。176, 182, 197, 198, 200, 213, 219, 216, 217, 227, 238, 337, 338, 346, 358, 363, 365, 366, 368, 369は弥生時代中期畿内第IV様式期に、339, 357は弥生時代中期畿内第III様式期に属する。他の中期の土器はおおむね弥生時代中期畿内第III～IV様式の範疇に収まるものと考えられる。また、DC2およびDC2黒色泥層出土土器の多くは墳丘墓への供献に伴うものと考えられ、部分的に打ち欠かれた土器（201, 202, 214）や穿孔をもつ土器（337）胎土の特徴から搬入品と考えられる土器（175, 180, 183, 189, 194, 195, 197, 199, 201, 213, 227, 331, 332, 334, 337, 338, 352, 354, 363, 369）がみられる。



図 5.1.20 DC2 出土土器(1)



図 5.1.21 DC2 出土土器(2)



図 5.1.22 DC2 出土土器(3)



図 5.1.23 DC2 出土土器(4)



図 5.1.24 DC2 出土土器(5)



图 5.1.25 DC2 出土土器(6)



图 5.1.26 DC2 出土土器(7)



图 5.1.27 DC2 出土土器(8)



图 5.1.30 DC2 出土土器(11)



图 5.1.28 DC2 出土土器(9)

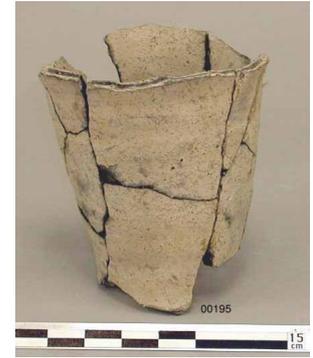


图 5.1.29 DC2 出土土器(10)



图 5.1.31 337 穿孔部扩大写真



图 5.1.32 DC2 出土土器(12)



图 5.1.33 DC2 出土土器(13)



图 5.1.34 DC2 出土土器(14)



图 5.1.35 DC2 出土土器(15)



图 5.1.36 DC2 出土土器(16)



图 5.1.37 DC2 出土土器(17)

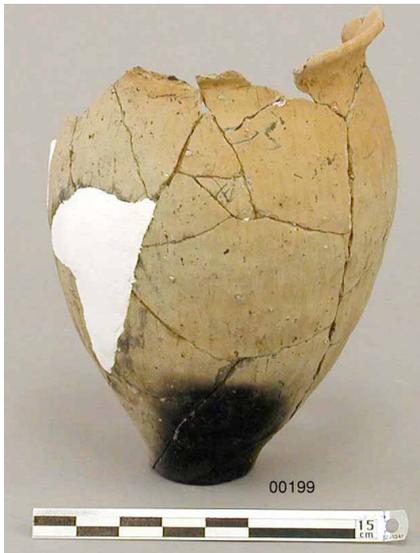


图 5.1.38 DC2 出土土器(18)

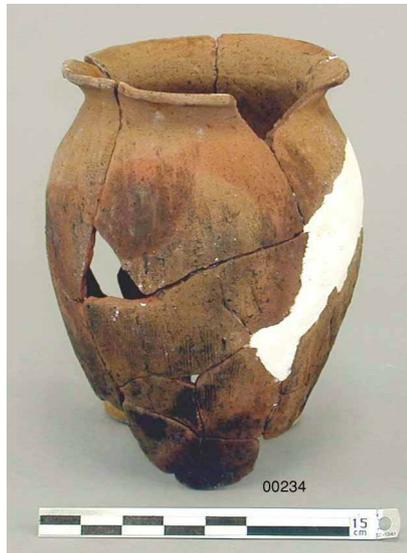


图 5.1.39 DC2 出土土器(19)



图 5.1.40 DC2 出土土器(20)



图 5.1.41 DC2 出土土器(21)



图 5.1.42 DC2 出土土器(22)



图 5.1.43 DC2 出土土器(23)



图 5.1.44 DC2 出土土器(24)

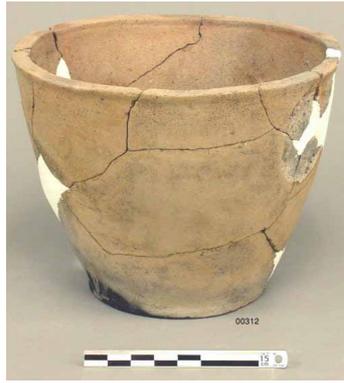


图 5.1.45 DC2 出土土器(25)



图 5.1.46 DC2 出土土器(26)



图 5.1.47 DC2 出土土器(27)



图 5.1.48 DC2 出土土器(28)



图 5.1.49 DC2 出土土器(29)



图 5.1.50 DC2 出土土器(30)



图 5.1.51 DC2 出土土器(31)



图 5.1.52 DC2 出土土器(32)



图 5.1.53 DC2 出土土器(33)



图 5.1.54 DC2 出土土器(34)



図 5.1.55 DC2 出土土器(35)



図 5.1.56 DC2 出土土器(36)



図 5.1.57 DC2 出土土器(37)



図 5.1.58 DC2 出土土器(38)



図 5.1.59 DC2 出土土器(39)



図 5.1.60 DC2 出土土器(40)



図 5.1.61 DC2 および WL1 出土土器(1)



図 5.1.62 DC2 出土土器(41)



図 5.1.63 DC2 および WL1 出土土器(2)



図 5.1.64 DC2 および WL1 出土土器(3)



図 5.1.65 DC2 および DC2 黒色泥層出土土器



図 5.1.66 DC2 および WL1 出土土器(4)



図 5.1.67 DC2 出土土器(42)



図 5.1.68 DC2 出土土器(43)



図 5.1.69 DC2 出土土器(44)



図 5.1.70 DC2 出土土器(45)



図 5.1.71 DC2 出土土器(46)



図 5.1.72 DC2 出土土器(47)



図 5.1.73 DC2 および WL1 出土土器(5)



図 5.1.76 DC2 黒色泥層出土土器(3)



図 5.1.74 DC2 黒色泥層出土土器(1)



図 5.1.75 DC2 黒色泥層出土土器(2)



図 5.1.77 DC2 黒色泥層および 8 層出土土器

表 5.1.3 DC2 および DC2 黒色泥層出土土器一覽(1)

ID	系 統	器 種	出土層準・遺構	時 期	含 炭 石	埋 入 品	器高(cm)	口径(cm)	備 考
105	弥生	鉢	DC2	弥生時代中期			3.9 *		
106	弥生	蓋	DC2	弥生時代中期			2.2	12 *	
150	弥生	壺	DC2	弥生時代前期			20.4 *		EP4と接合, DC4からの混入
152	弥生	甕	DC2	弥生時代中期?			14.3	12	成形調整粗い
175	弥生	壺	DC2	弥生時代中期後半			15.3 *	20 *	
176	弥生	広口壺	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期			5 *	15 *	
177	弥生	壺	DC2	弥生時代中期後半			5.7 *	11 *	
178	弥生	鉢	DC2	弥生時代中期			10.6 *	18.2 *	
179	弥生	鉢又は高杯	DC2	弥生時代中期			7.2 *	314 *	
180	弥生	壺	DC2	弥生時代中期後半			11.5 *		摂津系
181	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			13.4 *	31 *	
182	弥生	壺	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期			9.7 *	20.4 *	
189	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			13.9 *	17	
193	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			24 *	20.8 *	
194	弥生	壺	DC2	弥生時代中期後半			6.7 *	17.4	
195	弥生	長頸壺	DC2	弥生時代中期後半			9.3 *		
199	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			23.4	14.8	
200	弥生	水差	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期			20.8	8	
201	弥生	壺	DC2	弥生時代中期後半			13.4 *	13.8	口縁部打ち欠きか?
202	弥生	高杯	DC2	弥生時代中期後半			10.2		裾部打ち欠きか?
203	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			11.4 *	15	
204	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			17.8 *	28.8	
213	弥生	壺	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期			32.2	10.4	摂津系?
218	弥生	鉢	DC2	弥生時代中期後半			9.8	15 *	
219	弥生	壺	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期			8 *	13.8 *	
220	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			11.2	20.4 *	
221	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			11.6 *	17 *	
222	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			9.6 *		
223	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			4.8 *	29 *	
224	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			7.5		
225	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			8.1 *		
235	弥生	甕	DC2	弥生時代中期後半			16.6 *	15 *	
216	弥生	広口壺	DC2西壁	弥生時代中期畿内第IV様式期			11.2	15.8	
217	弥生	壺	DC2西壁	弥生時代中期畿内第IV様式期			31.5 *		
100	弥生	蓋	DC2西壁側溝	弥生時代中期			8 *		
101	弥生	蓋	DC2西壁側溝	弥生時代中期			2.3	11.2 *	
183	弥生	無頸壺	DC2北壁	弥生時代中期後半			8 *	16.8 *	EP3に同一個体あり
184	弥生	甕	DC2北壁	弥生時代中期後半			5.7 *		
186	弥生	甕	DC2北壁	弥生時代中期後半			10.3 *	18.2 *	
234	弥生	甕	DC2北壁	弥生時代中期後半			21.5 *	14.2	
104	弥生	甕	DC2北壁側溝	弥生時代中期			3.7 *		
196	弥生	壺	DC2,#3	弥生時代中期後半			8.3 *	23.8 *	
329	弥生	甕	DC2,#3	弥生時代中期後半			17.5	17.2 *	
330	弥生	高杯or蓋	DC2,#3	弥生時代中期後半			4.8		
331	弥生	壺	DC2,#3	弥生時代中期後半			5.3 *		摂津系
332	弥生	壺	DC2,#3	弥生時代中期後半			7.7 *		摂津系
337	弥生	壺	DC2,#4	弥生時代中期畿内第IV様式期			40	21.8	胴部下半に穿孔
356	弥生	壺	DC2,#4	弥生時代中期?			18.3 *		
357	弥生	鉢	DC2,#4	弥生時代中期畿内第III様式期			16.1	20	和泉系
363	弥生	器台	DC2,#4	弥生時代中期畿内第IV様式期			13.5 *		底径32.8cm,EP4と接合
338	弥生	壺	DC2,#6	弥生時代中期畿内第IV様式期			12.8 *	14.4	
339	弥生	壺	DC2,#6	弥生時代中期畿内第III様式期			11.2 *	21.6	
340	弥生	甕	DC2,#6	弥生時代中期後半			12.7 *		底径7.5cm

表 5.1.3 DC2 および DC2 黒色泥層出土土器一覽(2)

ID	系 統	器 種	出土層準・遺構	時 期	倉角 測定	器高(cm)	口径(cm)	備 考
358	弥生	無頸壺	DC2,#6	弥生時代中期畿内第IV様式期		17	12 *	
185	弥生	甗	DC2,#7	弥生時代中期後半		17.1 *	14.6 *	
237	弥生	甗	DC2,#7	弥生時代中期後半		6.1	37.6 *	
238	弥生	長頸壺	DC2,#7	弥生時代中期畿内第IV様式期		12 *		
239	弥生	壺	DC2,#7	弥生時代中期後半		5.5 *		
240	弥生	甗	DC2,#7	弥生時代中期後半		18.7 *		
333	弥生	壺	DC2,#8	弥生時代中期		11.8		
334	弥生	鉢	DC2,#8	弥生時代中期後半		7.3	14.6	
335	弥生	蓋	DC2,#8	弥生時代中期		6.1	14	
336	弥生	高杯	DC2,#8	弥生時代中期後半		17.8 *		
368	弥生	高杯	DC2,#8	弥生時代中期畿内第IV様式期		9.5 *	36.6 *	
365	弥生	高杯	DC2,#10	弥生時代中期畿内第IV様式期		19.8	22.4	
229	弥生	壺	DC2,#21	弥生時代中期?		21.3 *		熱による剥落
230	弥生	鉢	DC2,#21	弥生時代中期後半		19.3	28 *	
311	弥生	甗	DC2,#21	弥生時代中期後半		12 *	32.8 *	
312	弥生	鉢	DC2,#21	弥生時代中期後半		23.5	31	
313	弥生	甗	DC2,#21	弥生時代中期後半		33.3 *		
314	弥生	高杯	DC2,#21	弥生時代中期後半		11.7 *		
315	弥生	高杯	DC2,#21	弥生時代中期後半		12.2		
316	弥生	甗	DC2,#21	弥生時代中期後半		9.3 *	15.6 *	
369	弥生	壺	DC2,#21	弥生時代中期畿内第IV様式期		35.2	18.4	
371	弥生	壺	DC2,#21	弥生時代中期後半		29 *		
341	弥生	甗	DC2,#22	弥生時代中期後半		18.6 *	37.2 *	
342	弥生	壺	DC2,#22	弥生時代中期後半		28.5		
343	弥生	高杯	DC2,#22	弥生時代中期後半		11.5 *		
344	弥生	甗	DC2,#22	弥生時代中期後半		6.5 *		底部穿孔
345	弥生	高杯	DC2,#22	弥生時代中期後半		12 *		
346	弥生	無頸壺	DC2,#22	弥生時代中期畿内第IV様式期		13.5 *	18 *	
347	弥生	甗	DC2,#22	弥生時代中期後半		18.3 *	17.4	
348	弥生	甗or壺	DC2,#22	弥生時代中期後半		15.4 *		
349	弥生	壺	DC2,#22	弥生時代中期後半		14.9 *		
350	弥生	壺	DC2,#22	弥生時代中期後半		15.7 *		
351	弥生		DC2,#22	弥生時代中期後半		6.7 *		
352	弥生	壺	DC2,#22	弥生時代中期後半		10.8 *		摂津系
353	弥生	壺	DC2,#22	弥生時代中期後半		12.8 *		
354	弥生	壺	DC2,#22	弥生時代中期後半		12.4 *	13.4	
355	弥生	壺	DC2,#22	弥生時代中期後半		6.1 *		
366	弥生	高杯	DC2,#22	弥生時代中期畿内第IV様式期		20.8	34.4	
187	弥生	高杯	DC2黒色泥層	弥生時代中期後半		10.4 *		
188	弥生	甗	DC2黒色泥層	弥生時代中期後半		9.9 *	15	
190	弥生	鉢	DC2黒色泥層	弥生時代中期		10	13	
191	弥生	高杯	DC2黒色泥層	弥生時代中期後半		7.9 *		
192	弥生	甗	DC2黒色泥層	弥生時代中期		3.1 *		
197	弥生	高杯	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期		8 *	26.2 *	
198	弥生	鉢	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期		7 *		
214	弥生	高杯	DC2黒色泥層	弥生時代中期後半		13.7	15.6	裾部打ち欠きか?
227	弥生	器台	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期		11.7	13 *	EP3と接合

*付きの器高は残存値，口径は推定値．出土層準・遺構の項目で#番号は出土位置を示す（図4.49～51参照）．

5.1.4 II'面遺構出土土器

EP4出土土器には弥生時代前期および弥生時代中期の壺、甕、鉢、高杯、水差などがみられる(図5.1.78～82,表5.1.4)。前期の土器はDC5から混入したものである。中期の土器のうち298, 299, 300, 302は弥生時代中期畿内第IV様式期に属する。他の中期の土器はおおむね弥生時代中期畿内第III～IV様式の範疇に収まるものと考えられる。胎土に生駒山はんれい岩起源の角閃石を含むものが非常に多い。

落ち込み出土土器は破片が多く時期の特定が困難であるが、櫛描簾状文をもつ土器片がみられ、おおむね弥生時代中期畿内第III～IV様式の範疇に収まるものと考えられる。



図 5.1.78 EP4 出土土器(1)



図 5.1.79 EP4 出土土器(2)



図 5.1.80 EP4 出土土器(3)



図 5.1.81 EP4 出土土器(4)



図 5.1.82 EP4 出土土器(5)

表 5.1.4 EP4 出土土器一覧

ID	系統	器種	出土層準・遺構	時期	含角閃岩	混入	器高(cm)	口径(cm)	備考
231	弥生	甕	EP4北壁	弥生時代中期後半			27.8 *		
232	弥生	甕	EP4北壁	弥生時代中期後半			16.4	13.2 *	
233	弥生	壺	EP4北壁	弥生時代中期後半			4.3 *	9.2	
267	弥生	壺	EP4北壁	弥生時代中期後半			9.3 *		
288	弥生	壺	EP4北壁	弥生時代中期後半			7.9 *		
289	弥生	壺	EP4北壁	弥生時代中期後半			6.3 *		
290	弥生	壺	EP4北壁	弥生時代前期			8 *		DC5からの混入
291	弥生	甕	EP4北壁	弥生時代前期			7.6 *	26.2 *	DC5からの混入
292	弥生	甕	EP4北壁	弥生時代中期後半			7.5 *	21.4 *	
293	弥生	甕	EP4北壁	弥生時代中期後半			7 *	27.8 *	
294	弥生	甕or壺	EP4北壁	弥生時代中期			5 *		底部穿孔
295	弥生	甕	EP4北壁	弥生時代中期			5.5 *		底部穿孔
296	弥生	壺	EP4北壁	弥生時代中期			7 *		
297	弥生	壺	EP4北壁	弥生時代中期			8.8 *		
298	弥生	広口壺	EP4北壁	弥生時代中期畿内第IV様式期			12.4 *	15	
299	弥生	短頸壺	EP4北壁	弥生時代中期畿内第IV様式期			9.6 *	11.6	
300	弥生	台付鉢	EP4北壁	弥生時代中期畿内第IV様式期			8.2 *		
301	弥生	高杯	EP4北壁	弥生時代中期後半			10.5 *		
302	弥生	水差	EP4北壁	弥生時代中期畿内第IV様式期			8.3		
309	弥生	水差	EP4北壁	弥生時代中期後半			9.5 *		

5.1.5 DC4 出土土器

DC4およびDC4L出土土器には弥生時代前期の壺、甕、鉢、無頸壺、蓋(図5.1.83~129,表5.1.5)、DC4Lにはとくに縄文時代晩期の深鉢、浅鉢がみられる。縄文時代晩期の土器は下位の層準から混入したものである。弥生時代前期の土器の中には底部に刳圧痕がみられるもの(82)や、やや場所が離れるもののDC5出土土器片と接合できるものがみられた。胎土に生駒山はんれい岩起源の角閃石を含むものが非常に多い。



図 5.1.83 DC4 出土土器(1)



図 5.1.84 DC4 出土土器(2)



図 5.1.85 DC4 出土土器(3)



図 5.1.86 DC4 出土土器(4)



図 5.1.87 DC4 出土土器(5)



図 5.1.88 DC4 出土土器(6)



図 5.1.89 DC4 出土土器(7)



図 5.1.90 DC4 出土土器(8)



図 5.1.91 DC4 出土土器(9)



図 5.1.92 DC4 出土土器(10)



图 5.1.93 DC4 出土土器(11)

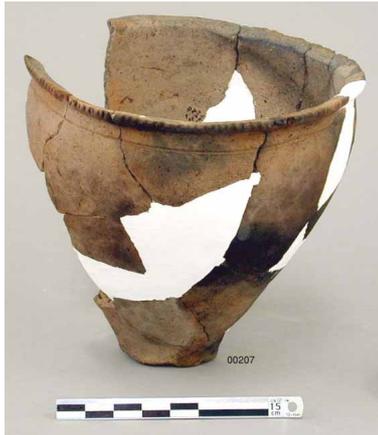


图 5.1.94 DC4 出土土器(12)



图 5.1.95 DC4 出土土器(13)



图 5.1.96 DC4 出土土器(14)



图 5.1.97 DC4 出土土器(15)



图 5.1.98 DC4 出土土器(16)



图 5.1.99 DC4 出土土器(17)



图 5.1.100 DC4 出土土器(18)



图 5.1.101 DC4 出土土器(19)



图 5.1.102 DC4 出土土器(20)



图 5.1.103 DC4 出土土器(21)



图 5.1.104 DC4 出土土器(22)



图 5.1.105 DC4 出土土器(23)



图 5.1.106 DC4 出土土器(24)



图 5.1.107 DC4 出土土器(25)



图 5.1.108 DC4 出土土器(26)



图 5.1.109 DC4 出土土器(27)



图 5.1.110 DC4 出土土器(28)



图 5.1.111 DC4L 出土土器(1)



图 5.1.112 DC4 出土土器(30)



图 5.1.113 DC4 出土土器(30)



图 5.1.114 DC4 出土土器(31)



图 5.1.115 DC4 出土土器(32)



图 5.1.116 DC4 出土土器(33)



图 5.1.117 DC4 出土土器(34)



图 5.1.118 DC4 出土土器(35)



图 5.1.119 DC4 出土土器(36)



图 5.1.120 DC4 出土土器(37)



图 5.1.121 DC4 出土土器(38)



图 5.1.122 DC4 出土土器(41)



图 5.1.123 DC4 出土土器(40)

图5.1.124 DC4出
土土器(41)



图 5.1.125 DC4
出土土器(42)



图 5.1.126 DC4
出土土器(43)



图 5.1.127 DC4 出土土器(44)



图 5.1.128 DC4 出土土器(45)



图 5.1.129 DC4L 出土土器(2)

表 5.1.5 DC4 および DC4L 出土土器一覽(1)

ID	系 統	器 種	出土層準・遺構	時 期	含角 閃石	摺入 品	器高(cm)	口径(cm)	備 考
65	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			18.2 *	17.4	
66	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			10.6 *	21.4	
67	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			12.8 *	23.6	
68	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			16.4 *	19	
69	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			16 *	21.8 *	
70	弥生	鉢	DC4	弥生時代前期			18.6 *	41.6 *	
87	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			14.4 *	20 *	
88	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			11.4 *	25.6 *	
89	弥生	鉢	DC4	弥生時代前期			7.3 *	22 *	
90	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			6.3 *	10.8 *	
91	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			5.5 *		00110と同一個体か？
92	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			4 *		
93	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			2.5	11.2	
94	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			1.8	11.6 *	
95	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			6.2 *		
96	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			7 *		
97	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			3.8 *	14 *	
98	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			9.6	26 *	
99	弥生	鉢	DC4	弥生時代前期			9.1	10.4	
102	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			1	11.4 *	
107	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			3.2	12	
108	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			3.1	11.4	線刻あり
109	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			5.2 *		
110	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			5 *		00091と同一個体か？
111	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			2.1 *	14.8 *	
112	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			1	10.8 *	
113	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			1.7 *		
114	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			11 *		
115	弥生	蓋	DC4	弥生時代前期			1	10.6 *	
116	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			6.5 *	19.2 *	赤色顔料塗布
117	弥生	鉢	DC4	弥生時代前期			24.7 *	40.4 *	
146	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			11.1	20.6	
153	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			7.9 *	14.6	
154	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			9.3 *		
155	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			17.3 *		
156	弥生	鉢	DC4	弥生時代前期			5.5 *		
157	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			22.6 *		
164	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			23.3	24.6 *	
173	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			9.2 *	16	
174	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			9.6 *		
205	弥生	壺	DC4	弥生時代前期			17.5 *		
207	弥生	甗	DC4	弥生時代前期			23 *	25	
103	弥生	無頸壺	DC4西壁	弥生時代前期			12.9	7 *	
172	弥生	甗	DC4北壁	弥生時代前期			16.1 *	25	
148	弥生	甗	DC4,#12	弥生時代前期			15.4 *	22.4	
169	弥生	甗	DC4,#12	弥生時代前期			25	23.8	
64	弥生	鉢	DC4,#13	弥生時代前期			17	28.8	
212	弥生	甗	DC4,#13	弥生時代前期			25.5	23 *	
62	弥生	壺	DC4,#14	弥生時代前期			18.7	15.2	
57	弥生	甗	DC4,#15	弥生時代前期			13.6 *	23.2 *	
170	弥生	甗	DC4,#15	弥生時代前期			29.8 *	30.2	
166	弥生	壺	DC4,#16	弥生時代前期			26 *	28.6	
208	弥生	甗	DC4,#16	弥生時代前期			35.3	31	

表 5.1.5 DC4 および DC4L 出土土器一覧(2)

ID	系 統	器 種	出土層準・遺構	時 期	含角石 高石	機入 品	器高(cm)	口径(cm)	備 考
206	弥生	壺	DC4,#17	弥生時代前期					
211	弥生	甕	DC4,#17	弥生時代前期			10.3	11.4	
53	弥生	甕	DC4,#18	弥生時代前期			15 *	22.6	DC5と接合
55	弥生	壺	DC4,#18	弥生時代前期			14.4 *	13.8	
56	弥生	甕	DC4,#18	弥生時代前期			13.3 *	25.2 *	
58	弥生	甕	DC4,#18	弥生時代前期			13.7 *	21	
59	弥生	鉢	DC4,#18	弥生時代前期			11.6	20	
61	弥生	壺	DC4,#18	弥生時代前期			12.2 *	13 *	
63	弥生	壺	DC4,#18	弥生時代前期			17.3 *	17.4	
71	弥生	壺	DC4,#18	弥生時代前期			17.4 *		
118	弥生	鉢	DC4,#18	弥生時代前期			13.5	26	
119	弥生	甕	DC4,#18	弥生時代前期			24	21.6 *	
120	弥生	甕	DC4,#18	弥生時代前期			23	25.4	
147	弥生	壺	DC4,#18	弥生時代前期			14 *	14.6	
159	弥生	壺	DC4,#18	弥生時代前期			8 *	21 *	
160	弥生	鉢	DC4,#18	弥生時代前期			14.3 *		
161	弥生	壺	DC4,#18	弥生時代前期			11 *		
162	弥生	壺	DC4,#18	弥生時代前期			18.3 *	15.4	DC1と接合
163	弥生	壺	DC4,#18	弥生時代前期			16.3 *	18.2	
165	弥生	甕	DC4,#18	弥生時代前期			26.3	21.6	
171	弥生	甕	DC4,#18	弥生時代前期			11.2 *	19.4	
54	弥生	甕	DC4,#19	弥生時代前期			15.7	14.2	
158	弥生	蓋	DC4,#19	弥生時代前期			1.1	11.1	
60	弥生	甕	DC4,#20	弥生時代前期			24.1	23.6 *	
72	弥生	甕	DC4L	弥生時代前期			10.2 *	40.8 *	底部もみ圧痕 底部穿孔 底部穿孔
73	弥生	壺	DC4L	弥生時代前期			6.9 *	16.8 *	
74	弥生	壺	DC4L	弥生時代前期			8.6 *	13 *	
75	弥生	壺	DC4L	弥生時代前期			8.1 *	13.4 *	
76	弥生	壺	DC4L	弥生時代前期			5.4 *	12.6 *	
77	弥生	甕	DC4L	弥生時代前期			5.1 *	22.8 *	
78	弥生	甕	DC4L	弥生時代前期			21.2 *	37 *	
82	弥生	甕or壺	DC4L	弥生時代前期			1.8 *		
83	弥生	甕	DC4L	弥生時代前期			10.3 *		
84	弥生	甕	DC4L	弥生時代前期			10.5 *		
85	弥生	壺	DC4L	弥生時代前期			11.5 *		
86	弥生	壺	DC4L	弥生時代前期			12.8 *	14 *	
167	弥生	甕	DC4L	弥生時代前期			9.9 *	23.4 *	
168	弥生	甕	DC4L	弥生時代前期			16 *	23	

*付きの器高は残存値，口径は推定値．出土層準・遺構の項目で#番号は出土位置を示す（図4.49～51参照）．

5.1.6 IV面遺構および5層出土土器

PT1～3からはわずかに土器片が出土しただけで、時期を特定できるものはなかった。

DC6および5層出土土器には弥生時代前期の壺、甗がみられた(図5.1.129～131,表5.1.6)。胎土に生駒山はんれい岩起源の角閃石を含むものが非常に多い。



図 5.1.129 DC6 出土土器



図 5.1.130 5層出土土器



図 5.1.131 5層出土土器

表 5.1.6 DC6 出土土器一覧

ID	系統	器種	出土層準・遺構	時期	含角閃石	挿入品	器高(cm)	口径(cm)	備考
135	弥生	甗	5層	弥生時代前期			11.7 *		
138	弥生	甗	5層	弥生時代前期			8 *		
149	弥生	甗	5層	弥生時代前期			23	25.6 *	DC4Lと接合
151	弥生	甗	5層	弥生時代前期			9.4 *	17.2	
209	弥生	壺	5層	弥生時代前期			21 *	13 *	DC4Lと接合
79	弥生	壺	DC6	弥生時代前期			5.6 *	14.2 *	
80	弥生	壺	DC6	弥生時代前期			8.3 *	12.4	
81	弥生	壺	DC6	弥生時代前期			20.2	14.2 *	
210	弥生	壺	DC6	弥生時代前期			16.6	8.4	DC4Lと接合

5.1.7 DC5 および8層出土土器

8層は弥生時代の遺物が出土する層準のなかで最下層になる。DC5および8層出土土器には弥生時代前期の壺、甗、鉢、蓋がみられた(図5.1.77, 132～136,表5.1.7)。胎土に生駒山はんれい岩起源の角閃石を含むものが非常に多い。

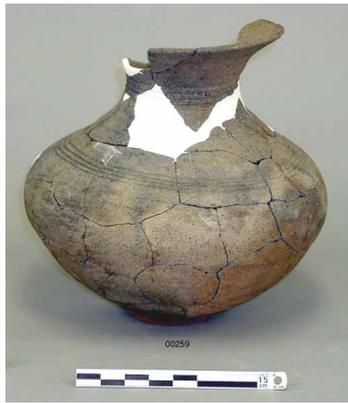


図 5.1.132 DC6 出土土器(1)



図 5.1.133 DC6 出土土器(2)



図 5.1.134 DC6 出土土器(3)

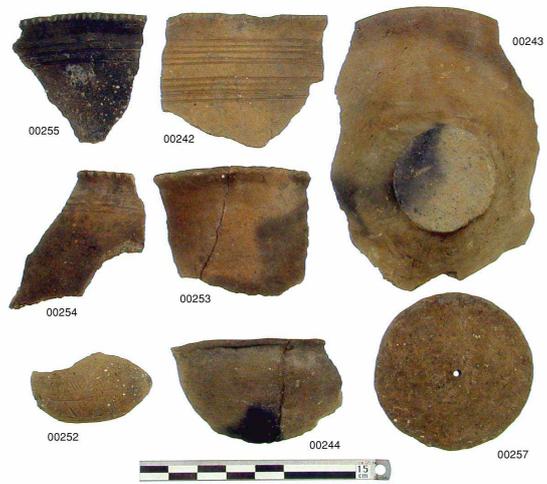


図 5.1.137 DC6 出土土器(6)



図 5.1.135 DC6 出土土器(4)



図 5.1.136 DC4 出土土器(5)

表 5.1.7 DC5 および 8 層出土土器一覧

ID	系 統	器 種	出土層準・遺構	時 期	倉角 器高	器高(cm)		口径(cm)	備 考
						器高	口径		
243	弥生	蓋	DC5	弥生時代前期		8.3	23.4 *		
244	弥生	鉢	DC5	弥生時代前期		7 *	13.6		
245	弥生	壺	DC5	弥生時代前期		7.6 *	16.8		
246	弥生	甕	DC5	弥生時代前期		12	13.8		
247	弥生	壺	DC5	弥生時代前期		13.5 *	28.2 *		
248	弥生	壺	DC5	弥生時代前期		8.5 *	17.8		
249	弥生	壺	DC5	弥生時代前期		9	21 *		
250	弥生	壺	DC5	弥生時代前期		10 *			
251	弥生	壺	DC5	弥生時代前期		8 *	15		
252	弥生	鉢	DC5	弥生時代前期		4.5			
253	弥生	甕	DC5	弥生時代前期		8.4	22.6		
254	弥生	甕	DC5	弥生時代前期		8.7 *			
255	弥生	甕	DC5	弥生時代前期		8 *	26.4 *		
257	弥生	蓋	DC5北壁	弥生時代前期		1.5	11		
258	弥生	壺	DC5北壁	弥生時代前期		6.5 *			
256	弥生	壺	DC5,#1	弥生時代前期		11.7 *	19.4		
259	弥生	壺	DC5,#1	弥生時代前期		27.6	18.6 *		
241	弥生	壺	DC5,#2	弥生時代前期		7.9 *	20.2 *		赤色顔料塗布か？
242	弥生	甕	DC5,#2	弥生時代前期		9.3 *			
136	弥生	甕	8層	弥生時代前期		5.6 *			
137	弥生	甕	8層	弥生時代前期		9 *			

*付きの器高は残存値，口径は推定値．出土層準・遺構の項目で#番号は出土位置を示す（図4.49～51参照）．

5.1.8 CN1 および 13 層出土土器、その他縄文土器

CN1 および 13 層出土土器には縄文時代晩期の深鉢、浅鉢がみられた（図 5.1.138 ~ 140, 表 5.1.8）。これらのうち 30,31 は縄文時代晩期滋賀里式 IV 期に、33,34 は縄文時代晩期滋賀里式 IIIb 期に属する。

これらの他、上位の層準や遺構から出土した縄文土器は表 5.1.8 のとおりで、CN1 や 13 層から混じったものと考えられる。いずれの土器も胎土に生駒山はんれい岩起源の角閃石を含むものが非常に多い。



図 5.1.138 DC4 出土縄文土器



図 5.1.139 CN1 出土縄文土器



図 5.1.140 DC2,DC6,13 層出土縄文土器

表 5.1.8 出土縄文土器一覧

ID	系統	器種	出土層準・遺構	時期	含角閃石	燻入品	器高(cm)	口径(cm)	備考
29	縄文	鉢	CN1	縄文時代晩期			3 *		
30	縄文	深鉢	CN1	縄文時代晩期滋賀里式IV期			10.3 *	17.6 *	
31	縄文	浅鉢	CN1	縄文時代晩期滋賀里式IV期			5.2 *		
32	縄文	深鉢	CN1	縄文時代晩期			6 *		
33	縄文	浅鉢	CN1	縄文時代晩期滋賀里式IIIb期			4 *		
34	縄文	深鉢	CN1	縄文時代晩期滋賀里式IIIb期			5 *	26 *	
35	縄文	浅鉢	CN1	縄文時代晩期			3.4 *		
36	縄文	深鉢	CN1	縄文時代晩期			4.5 *		
49	縄文	深鉢	13層	縄文時代晩期			5.5 *		
50	縄文	深鉢	13層	縄文時代晩期			9.2 *		
269	縄文	深鉢	EP3	縄文時代晩期長原式期			7.4 *		00052と接合
48	縄文	浅鉢	DC2,#21	縄文時代晩期滋賀里式IV期			3 *		
51	縄文	深鉢	DC2	縄文時代後期前半北白川上層式期			3.5 *	21 *	
52	縄文	深鉢	DC2	縄文時代晩期凸帯文期			7 *	16 *	00269 (EP3)と接合
37	縄文	深鉢	DC4L	縄文時代晩期滋賀里式IIIb期			8.7 *	24.4 *	
38	縄文	深鉢	DC4L	縄文時代晩期			2.8 *		
39	縄文	深鉢	DC4L	縄文時代晩期滋賀里式IIIb期			6.5 *		
40	縄文	深鉢	DC4L	縄文時代晩期			5.3 *		
41	縄文	深鉢	DC4L	縄文時代晩期			5 *		
42	縄文	深鉢	DC4L	縄文時代晩期			4.3 *	13.8 *	
43	縄文	深鉢	DC4L	縄文時代晩期長原式期			3.1 *	16 *	
44	縄文	浅鉢	DC4L	縄文時代晩期滋賀里式IV期			5 *		
45	縄文	浅鉢	DC4L	縄文時代晩期滋賀里式IV期			4.2		
46	縄文	深鉢	DC6	縄文時代晩期滋賀里式IIIb期			5.8 *	36 *	
47	縄文	深鉢	DC6	縄文時代晩期			9 *		

*付きの器高は残存値、口径は推定値。出土層準・遺構の項目で#番号は出土位置を示す（図4.49～51参照）。

第2節 土製品

銅鐸形土製品、絵画土器、ミニチュア土器、紡錘車、打ち欠かれた土器片などがあり、すべて弥生時代の遺構から出土した（表5.2.1）。

銅鐸形土製品は2点出土した。25は落ち込みから出土し、鐸身と鱗に文様があり、鐸身両面や舞には2孔一対の型持穴が穿たれている（図5.2.1,2）。26はEP4から出土し、鐸身はおそらく無文で鱗はない。一方の面には2孔一対の型持穴が穿たれ、舞には単孔がある（図5.2.3,4）。いずれも大きく欠損している。いずれも弥生時代中期畿内第IV様式期に併行する。なお、これらの銅鐸形土製品については8章で詳述する。



図5.2.1 銅鐸形土製品（25）

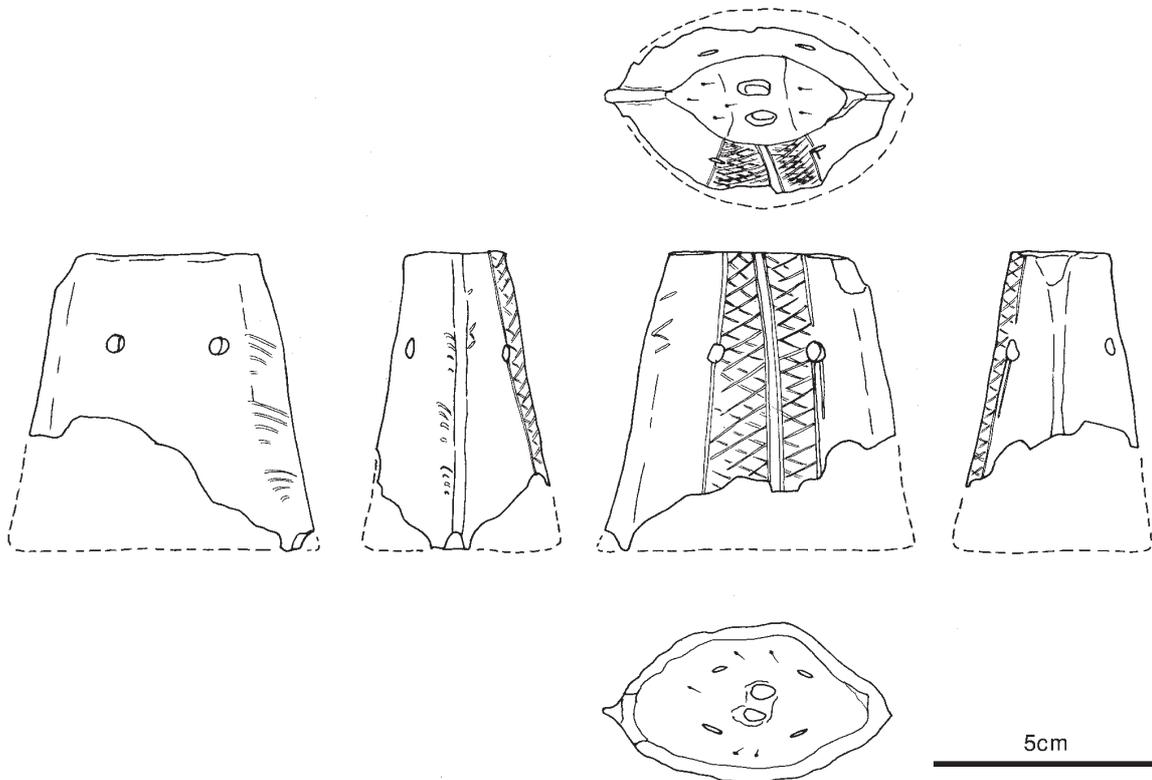


図5.2.2 銅鐸形土製品（25）実測図

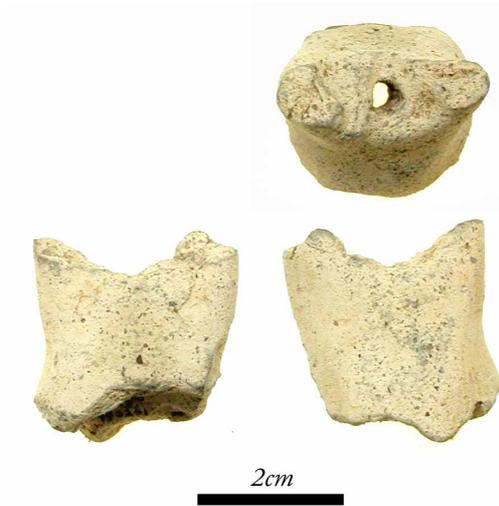


図 5.2.3 銅鐸形土製品 (26)

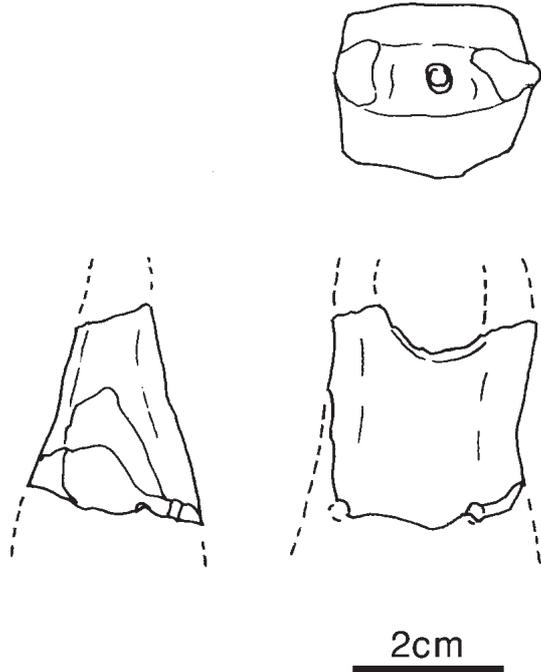


図 5.2.4 銅鐸形土製品 (26) 実測図



図 5.2.5 ミニチュア土器



図 5.2.6 絵画土器



図 5.2.7 円筒状土製品



図 5.2.8 円筒状土製品および動物形土製品

図 5.2.9 紡錘車および打ち欠かれた土器



絵画土器は3点出土した(図5.2.6)。22はDC2から出土し、広口壺の口縁内側に焼成前の線刻がある。鳥の足印に似ている。23は落ち込みから出土し、鉢の口縁端の外側下部に焼成後の線刻がある。22に酷似した線刻にさらに数本の線刻が施されている。24はDC2から出土し、器種は特定できない。綾杉形状に似た線刻が施されている。いずれも出土した遺構から判断し、弥生時代中期畿内第IV様式期に併行する。

ミニチュア土器は11点出土した(図5.2.5)。DC2,4,5、EP3から出土し、器種には壺、鉢、台付鉢、高杯、蓋、埴塼がある。壺形ミニチュア土器は形状が弥生時代前期の壺に酷似しており、弥生時代中期畿内第IV様式期に併行するDC2出土土器には、弥生時代前期に併行する土器が多数混じっていたことから考えると、DC2から出土したミニチュア土器も下位の遺構、とくにDC4からリワークした可能性が高い。

紡錘車は4点出土した(図5.2.9)。いずれも焼成後の穿孔で、DC4LやDC5から出土し、弥生時代前期に併行する。

打ち欠かれた土器は7点出土した(図5.2.9)。垂円～円形状で、破片の縁辺が丸みをもつことから破損した土器の破片とは容易に識別できる。DC2,4,5から出土した。

これらの他に円筒形状の土製品(27,340)や動物形?の土製品(28)が出土した(図5.2.7,8)。

表 5.2.1 土製品一覧

ID	系 統	器 種	出土層準・遺構	併行時期	高 右	器 入 器	器高(cm)	口径(cm)	備 考
25	弥生	銅鐸形土製品	落ち込み	弥生時代中期畿内第IV様式期			6.6		
26	弥生	銅鐸形土製品	EP3	弥生時代中期畿内第IV様式期			3.3 *		
22	弥生	絵画土器	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期					
23	弥生	絵画土器	落ち込み	弥生時代中期畿内第IV様式期					
24	弥生	絵画土器	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期					
1	弥生	ミニチュア 台付鉢	DC2	弥生時代畿内第IV様式期			5.6		
2	弥生	ミニチュア 壺	DC2	弥生時代畿内第IV様式期			6.5	3.2	
3	弥生	ミニチュア 鉢	DC2	弥生時代畿内第IV様式期			2.9	4 *	
4	弥生	ミニチュア 鉢	DC4	弥生時代前期			2.4	3.8	
5	弥生	ミニチュア 壺	DC4	弥生時代前期			4.6	3.7	
6	弥生	ミニチュア 壺	DC4	弥生時代前期			7.8 *		
7	弥生	ミニチュア 壺	DC2,#13	弥生時代畿内第IV様式期			6.5 *		
8	弥生	ミニチュア 壺	DC5,#1	弥生時代前期			3.2 *		
9	弥生	ミニチュア 高坏?	EP3	弥生時代畿内第IV様式期			1 *	5.2	
10	弥生	ミニチュア 蓋	DC2	弥生時代畿内第IV様式期			1	7.6	
11	弥生	ミニチュア 埴塼	DC2	弥生時代畿内第IV様式期			5.8	4.8	
19	弥生	紡錘車	DC4L	弥生時代前期					径3.2×3.1cm, 焼成前穿孔
20	弥生	紡錘車	DC4L	弥生時代前期					径6.1×6.1cm, 焼成前穿孔
21	弥生	紡錘車	DC4L	弥生時代前期					径4.8×4.7cm, 焼成前穿孔
121	弥生	紡錘車	DC5	弥生時代前期					底部転用, 未製品
12	弥生	打ち欠かれた土器片	DC2	弥生時代畿内第IV様式期					径4.8×4.6cm
13	弥生	打ち欠かれた土器片	DC2	弥生時代畿内第IV様式期					径4.5×3.8cm
14	弥生	打ち欠かれた土器片	DC2	弥生時代畿内第IV様式期					径3.5×3.4cm
15	弥生	打ち欠かれた土器片	DC4	弥生時代前期					径5.1×4.6cm
16	弥生	打ち欠かれた土器片	DC5	弥生時代前期					径4.9×4.6cm
17	弥生	打ち欠かれた土器片	DC2	弥生時代畿内第IV様式期					径5.5×4.8cm
18	弥生	打ち欠かれた土器片	DC2	弥生時代畿内第IV様式期					径5.0×5.0cm
27	弥生	不明	落ち込み	弥生時代中期畿内第IV様式期			3.3 *	2.7 *	
28	弥生	不明	落ち込み	弥生時代中期畿内第IV様式期					
340	弥生	不明					12.7 *		

*付きの器高は残存値, 口径は推定値. 出土層準・遺構の項目で#番号は出土位置を示す(図参照).

第3節 石器

5.3.1 打製石器

打製石器はおもに弥生時代中期畿内第IV様式に併行する遺構から出土した。材質はすべてサヌカイト製で二上山産のものと考えられるが、1点のみ石英粒子を多く含むものがあり淡路島金山産の可能性がある。以下の打製石器の分類にあたっては赤澤ほか(1980)、竹岡(1989)をもとにして松田(1996)によって階層的に設定された石器タイプおよびサブタイプに従った。

DC1からは敲打痕のある剥片(30)が(図5.3.5)、この他に剥片が1点出土した。これらの石器は下位の層準からのリワークしたものである。

EP3からは刃部両面調整曲刃削器(32)、片面調整尖頭削器(31)、石核Bから生産された剥片(34)、剥片(33)が(図5.3.5)、この他に剥片が出土した。

WL1からは石核A(34)のみが出土した(図5.3.5)。

DC2黒色泥層からは槍形両面調整尖頭器(1,2)、刃部両面調整直刃削器(3,4,9)、刃部片面調整曲刃削器(7,8)、敲打痕のある刃部片面調整直刃削器(6)、石錐(5)、剥片(10)が出土した(図5.3.1,2)。剥片10は石英粒子を多く含んだ淡路島金山産の可能性があるもの。この他、石核や剥片が多数出土した。

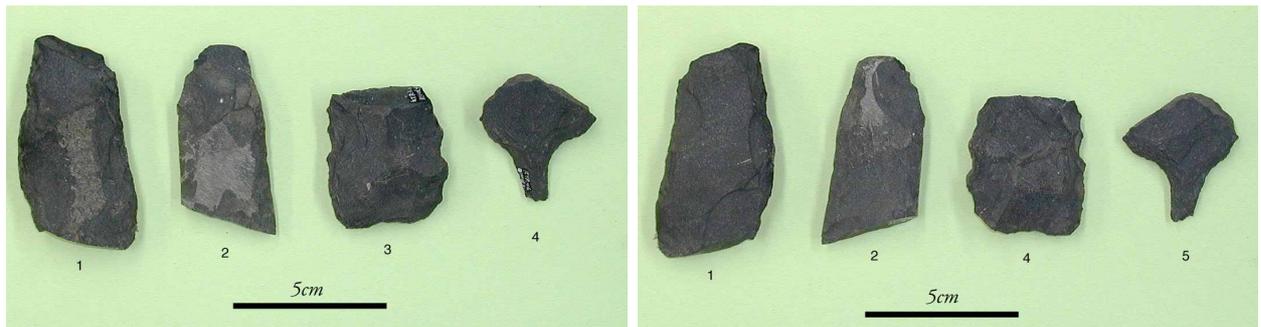


図 5.3.1 DC2 黒色泥層出土打製石器(1)



図 5.3.1 DC2 黒色泥層出土打製石器(2)



図 5.3.3 DC2 出土打製石器(1)



図 5.3.4 DC2 出土打製石器(2)



図 5.3.5 DC1, EP3, WL1, EP4 出土打製石器

DC2からは槍形両面調整尖頭器(11) 打製石鏃(16,20) 不完全両面調整尖頭器(14) 刃部両面調整曲刃削器(13,21,23) 刃部片面調整直刃削器(19,22) 刃部片面調整曲刃削器(24) 片面調整複刃削器(15) 石錐(18) 刃部片面調整細部調整剥片(12,27) 石核A(25,26,27,28)が出土した(図5.3.3,4,6)。この他、石核や剥片が多数出土した。

EP4からは打製石鏃(29)が(図5.3.5) この他に剥片が多数出土した。

打製石器の総重量は2829.8gで、各遺構・層準ごとの内訳は、DC1が52.5g、WL1が97.4g、EP3が277.8g、

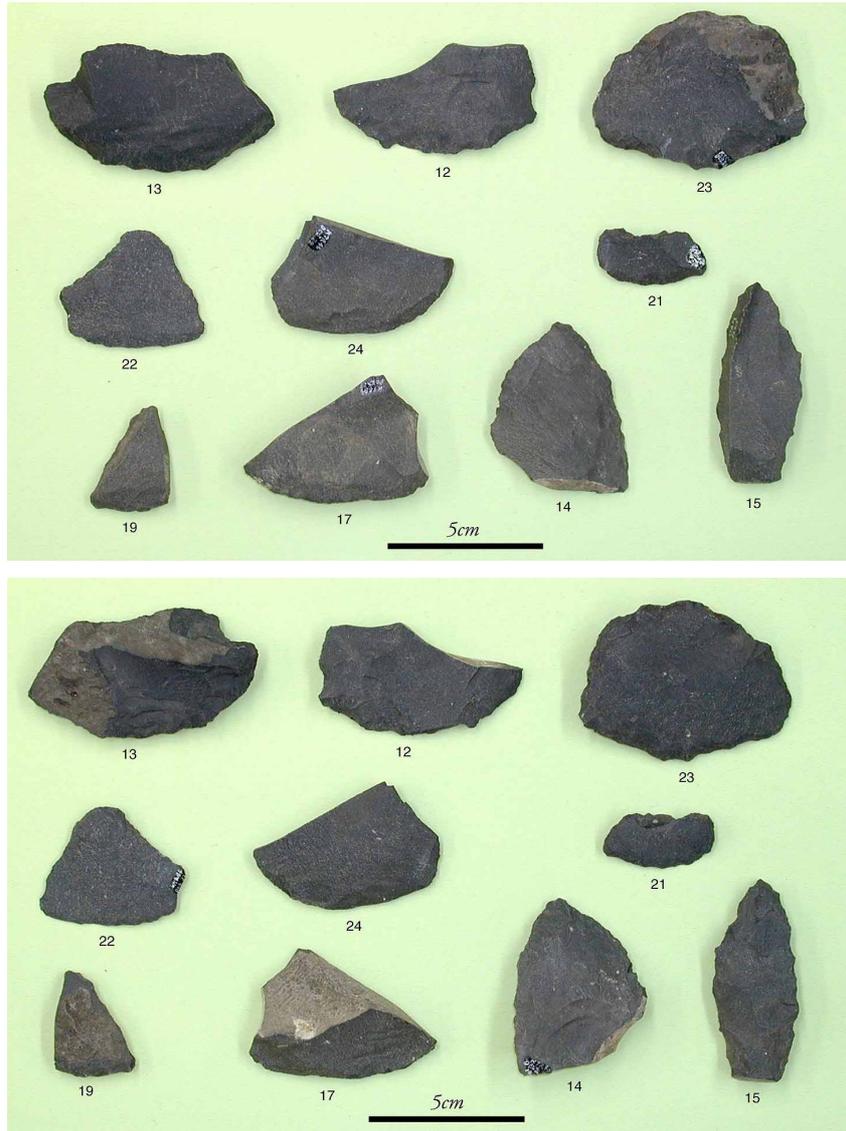


図 5.3.6 DC2 出土打製石器(3)

DC2 が 1364.9g、DC2 黒色泥層が 772.9g、EP4 が 187.3g、DC4 が 61.1g、12 層が 15.9g である。DC1 出土打製石器は下位の層準からのリワークしたものと考えられる。奇妙ではあるが土器片や動物遺体が多数出土した DC4 や他の弥生時代前期の遺構・層準から出土した打製石器はごく僅かで、総重量に占める割合は 2.7% にすぎない。いっぽう、墳丘の周溝内の埋土 (DC2) やそれを覆う DC2 黒色泥層から出土した打製石器の割合は 76% である。

打製石器の組成から墳丘墓のごく近傍で石器製作が行われていたとが推測できるが、墳丘墓の周溝やその周辺に石器製作の残滓が廃棄されていることについては、近傍で石器製作が行われはじめたころにはこの墳丘墓の維持・管理がすでに途絶えていたことを示唆してのではないだろうか。

5.3.2 磨製石器

石包丁や石斧、石剣、砥石、石錐がみられる。DC1 出土磨製石器は下位の層準からのリワークしたものと考えられ、弥生時代のものである。

石包丁には刃部が凸刃形のもの(1, 6, 9)、直刃形のもの(4, 8, 10, 11)、未製品(7)、不明(2, 5)があり、未製品を除いて大きく欠損している。石材は5が頁岩製、それ以外は紀ノ川流域で産出する結晶片岩製である(図5.3.7)。

石斧には丁寧な研磨が施されたいわゆる大陸系磨製石斧と、生駒山地で産出する花崗閃緑岩やはんれい岩を素材にして粗く研磨された斧形の石器がある(図5.3.8)。破片や一部欠損しているものが多い。大陸系磨製石斧のうち12, 13, 16は大型蛤刃石斧で、15, 24, 25, 26, 27, 30, 31はその破片と考えられる。粗製の斧形石器のうち、17, 18は柱状片刃石斧に形が似ている。21, 22, 23はやや丸みを帯びた形状をなす。20は扁平な亜円礫の両縁が研磨されたもので、縁辺には部分的に剥離痕がみられる。粗製の斧形石器は岩石を構成する鉱物どうしの結合が弱い花崗閃緑岩やはんれい岩を素材していることから、斧としての実用には耐えないように思われる。

石剣(19)は剣先と柄部を欠損する。サヌカイト製で、全体的に丁寧な研磨が施されている(図5.3.7)。

砥石(32)は角柱状で小型のもの。中央付近には使用痕があり、窪みがみられる(図5.3.7)。

石錘(3)は薄くやや長い川原石のおそらくは長軸両端を抉ったもので、半分が欠損している(図5.3.7)。

図5.3.1 磨製石器一覧

ID	器種	石材	出土層準・遺構	併行時期	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
10011	石包丁	結晶変岩	DC1	平安時代	(5.62)	(4.11)	(0.62)	26.5	下位の層準からの混入
10016	大型蛤刃石斧	結晶片岩	DC1	平安時代	(8.45)	(6.27)	(2.83)	142.1	下位の層準からの混入
10014	石斧破片	砂岩	EP3	弥生時代中期畿内第IV様式期	(5.18)	(6.34)	(1.21)	54.1	
10017	柱状片刃石斧	生駒山はんれい岩	EP3	弥生時代中期畿内第IV様式期	(13.52)	(6.25)	(4.59)	586.4	
10021	石斧	花崗閃緑岩	WL1	弥生時代中期畿内第IV様式期	(10.04)	(3.72)	(2.30)	533.0	
10005	石包丁	頁岩	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期	(9.75)	(5.45)	0.71	39.7	
10006	石包丁	結晶変岩	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期	(11.34)	(8.68)	0.74	107.8	
10007	石包丁(未製品)	結晶変岩	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期	(18.1)	(6.21)	(1.12)	134.1	
10028	石斧破片	—	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期	(4.23)	-	-	47.9	
10029	石斧破片	—	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期	(2.77)	-	-	8.8	
10013	大型蛤刃石斧	結晶変岩	DC2#3	弥生時代中期畿内第IV様式期	(12.69)	(6.22)	5.19	61.5	
10002	石包丁	結晶片岩	DC2#9	弥生時代中期畿内第IV様式期	(10.71)	(6.94)	0.73	59.2	
10008	石包丁	結晶変岩	DC2黒色泥層北壁	弥生時代中期畿内第IV様式期	(7.51)	(4.17)	0.55	25.8	
10012	大型蛤刃石斧	—	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期	(10.48)	6.28	(3.70)	388.6	
10015	大型蛤刃石斧	結晶片岩	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期	(4.11)	(6.03)	(2.75)	82.8	
10022	石斧	生駒山はんれい岩	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期	(11.93)	(6.16)	(2.05)	234.4	
10023	石斧	花崗閃緑岩	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期	(13.51)	(6.79)	(2.65)	374.4	
10030	石斧破片	—	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期	(4.57)	(7.09)	(4.02)	182.7	焼けた跡。
10031	石斧破片	砂岩	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期	(4.15)	(5.59)	(1.05)	32.6	
10009	石包丁	結晶変岩	DC2黒色泥層東壁	弥生時代中期畿内第IV様式期	(9.46)	4.47	0.72	54.5	両面に敲打した痕跡多数あり。
10032	砥石	泥岩	DC2北壁	弥生時代中期畿内第IV様式期	3.58	2.19	2.05	22.9	
10010	石包丁	結晶変岩	EP4	弥生時代中期畿内第IV様式期	(4.82)	(4.91)	0.73	25.8	
10019	石剣	サヌカイト	落ち込み	弥生時代中期畿内第IV様式期	(4.27)	(3.64)	0.86	21.3	
10027	石斧破片	—	落ち込み	弥生時代中期畿内第IV様式期	(7.88)	(5.15)	(1.54)	62.0	
10026	石斧?破片	砂岩	5層	弥生時代前期	(4.02)	(4.93)	(0.97)	22.6	
10001	石包丁	結晶片岩	DC4	弥生時代前期	(9.05)	4.75	0.56	31.4	
10018	柱状片刃石斧	花崗閃緑岩	DC4	弥生時代前期	(10.23)	(6.97)	(3.41)	425.0	
10003	石錘	—	DC4L	弥生時代前期	(4.51)	(4.86)	0.93	25.9	
10024	石斧破片	砂岩	DC4L	弥生時代前期	(4.89)	(7.26)	(1.02)	49.3	
10025	石斧破片	—	DC4L	弥生時代前期	(5.28)	-	-	14.4	
10033	礫器	変成を受けた花崗岩	DC4中央セクション	?	10.63	10.16	5.55	81.5	
10020	扁平石斧?	—	DC5	弥生時代前期	10.37	7.65	4.05	109.1	扁平な亜円礫の両面を磨いている。
10004	石包丁	結晶変岩	DC5#2	弥生時代前期	(11.26)	5.29	0.74	70.7	

長さ, 幅, 厚さの項目で括弧付きは残存値。



図 5.3.7 石包丁，石剣，砥石，石錘．

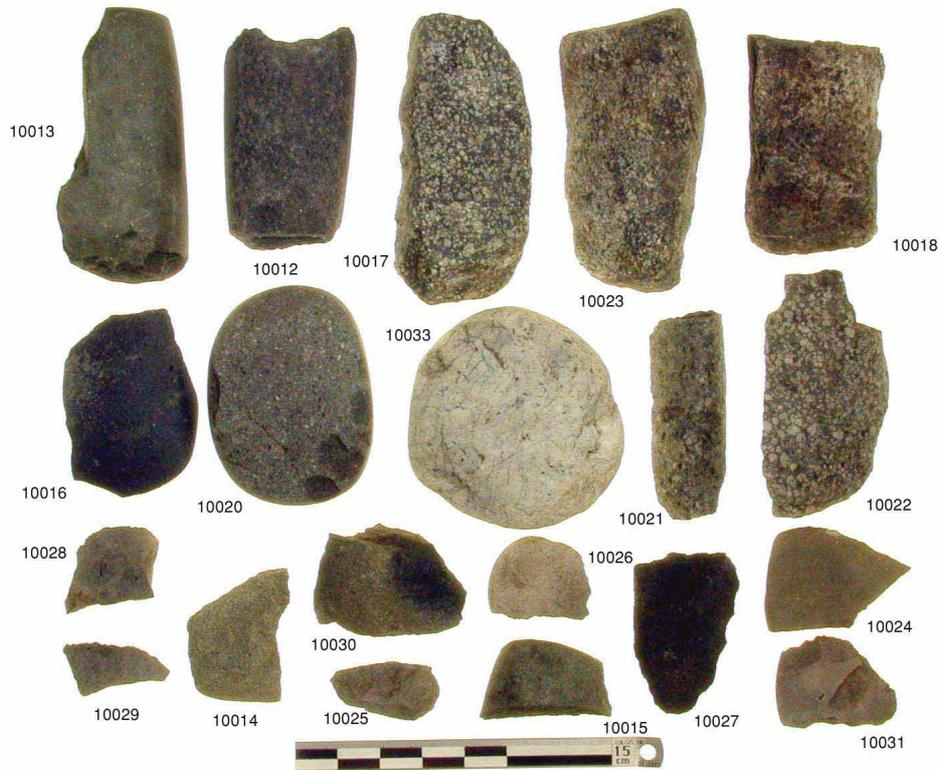


図 5.3.8 磨製石斧および礫器

第4節 木製品

WL1より柄杓の未製品が出土した。本調査で出土した木製品はこれのみである。

杓部は長軸18cm、短軸12cmの楕円形で、深さは約9cmである。柄は杓部の上端面に続いて削り出されたもので残存長が約11cmである。



図5.4.1. WL1出土柄杓未製品

第5節 動物遺体

本調査では依存状態のきわめて悪い多数の弥生時代の動物遺体を検出した。これらの動物遺体のうち、もともとの形を留めているものについては現地で土ごと取り上げて持ち帰った。持ち帰った試料は水洗およびアルコール洗浄の後、アセトンで稀釈したパラロイドB72を資料に含浸させて保存処理をおこなったうえで、現生骨格標本や他遺跡出土資料、Schmid(1972)を参考に同定を試みた。その結果、28点について種名および部位が同定できた(表5.5.1)。

同定し得た動物遺体の種名はイノシシ科イノシシ(*Sus scrofa*)(図5.5.1)とシカ科ニホンジカ(*Cervus nippon*)(図5.5.2)、イヌ科イヌ(*Canis familiaris*)、鳥網の一種(図5.5.3)で、イノシシとニホンジカがきわめて多い。また、現地で採取できなかったものとして、シジミガイ科セタシジミ(*Corbicula sandai*)があった(図4.33)。セタシジミは殻がペースト状になっており、DC4の埋土の中でかろうじてその形を留めていた。

これらの動物遺体が出土した遺構は弥生時代前期に併行するDC4からのものが卓越しており、DC2から出土したものはもともとDC4にあり、DC2掘削時に人為的に動かされた可能性が高い。

イノシシには大腿骨遠位端の化石化がすすんだ個体(9)や歯に摩耗が認められる個体(11)がみられ

成獣骨と判断されるものの、全体的には骨が小さく、小型の個体が多い。これに対してニホンジカは骨の大きさから判断して成獣骨のもの占められている。ニホンジカは骨のうち、中手骨あるいは中足骨の中位部、角はしばしば骨角器として利用されるが、中手骨もしくは中足骨の遠位部(21,24)や擦切痕を残す角(13,20)はその残骸と考えられる。

鬼虎川遺跡第47次調査で出土したイノシシやニホンジカの骨について出土した遺構の性格や出土した骨の部位から、47次調査地点は獲得した動物資源の一次解体場として利用され、肉付きの豊富な部位や骨角器として利用できる部位は別の場所へ運ばれ、二次解体や骨角器の製作がおこなわれたと推測した(別所2001b)。本例でも肋骨や脊椎など肉付きの豊富な部位や骨角器として利用できる部位はあまりみられないが、化石形成過程(タフォノミー)で相当数の骨が破壊されているため即断は避けたい。

図 5.5.1 動物遺体一覧

ID	種名	部位	出土層準・遺構	併行時期	雄	雌	左	右	備考
20001	イノシシ	肩甲骨	DC4	弥生時代前期					切創
20002	イノシシ	下顎骨	DC4	弥生時代前期					
20003	イノシシ	尺骨	DC4	弥生時代前期					
20004	イノシシ	下顎骨	DC4	弥生時代前期					穿孔あり
20005	イノシシ	距骨	DC4	弥生時代前期					
20006	イノシシ	上腕骨	DC4	弥生時代前期					遠位部
20007	イノシシ	寛骨	DC4	弥生時代前期					
20008	イノシシ	上腕骨	DC4	弥生時代前期					遠位部
20009	イノシシ	大腿骨	DC4	弥生時代前期					遠位部
20010	イノシシ	寛骨	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期					
20011	イノシシ	下顎骨	DC4	弥生時代前期					
20012	ニホンジカ	下顎骨	DC4	弥生時代前期					
20013	ニホンジカ	角	DC4	弥生時代前期					
20014	ニホンジカ	踵骨	DC4	弥生時代前期					近位部
20015	ニホンジカ	橈骨	DC4	弥生時代前期					
20016	ニホンジカ	中手骨or中足骨	DC4	弥生時代前期					
20017	ニホンジカ	第2頸椎	DC4	弥生時代前期					近位部
20018	ニホンジカ	橈骨	DC4	弥生時代前期					近位部
20019	ニホンジカ	顎骨	DC4	弥生時代前期					
20020	ニホンジカ	角	DC4	弥生時代前期					擦切痕
20021	ニホンジカ	中手骨or中足骨	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期					遠位部
20022	ニホンジカ	踵骨	DC2	弥生時代中期畿内第IV様式期					近位部
20023	ニホンジカ	橈骨	DC2黒色泥層	弥生時代中期畿内第IV様式期					近位部
20024	ニホンジカ	中手骨	DC4	弥生時代前期					近位部
20025	ニホンジカ	大腿骨	DC4	弥生時代前期					近位部
20026	ニホンジカ	大腿骨	DC4	弥生時代前期					遠位部
20027	イヌ	上顎骨	WL1	弥生時代中期畿内第IV様式期					
20028	鳥網	顎骨	DC6	弥生時代前期					近位部

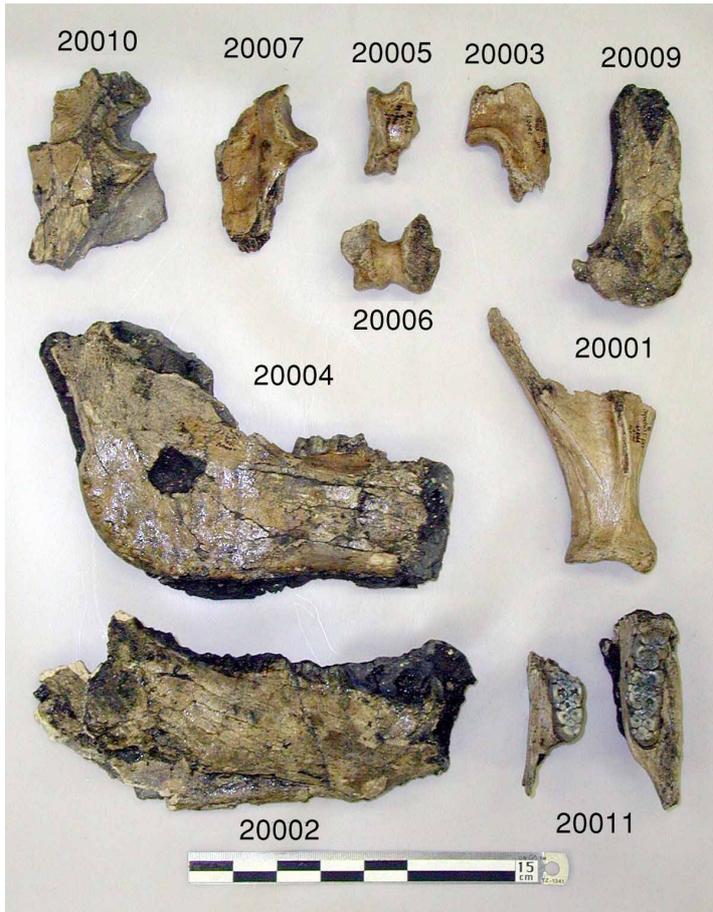


図 5.5.1 イノシシ



図 5.5.3 イヌおよび鳥網

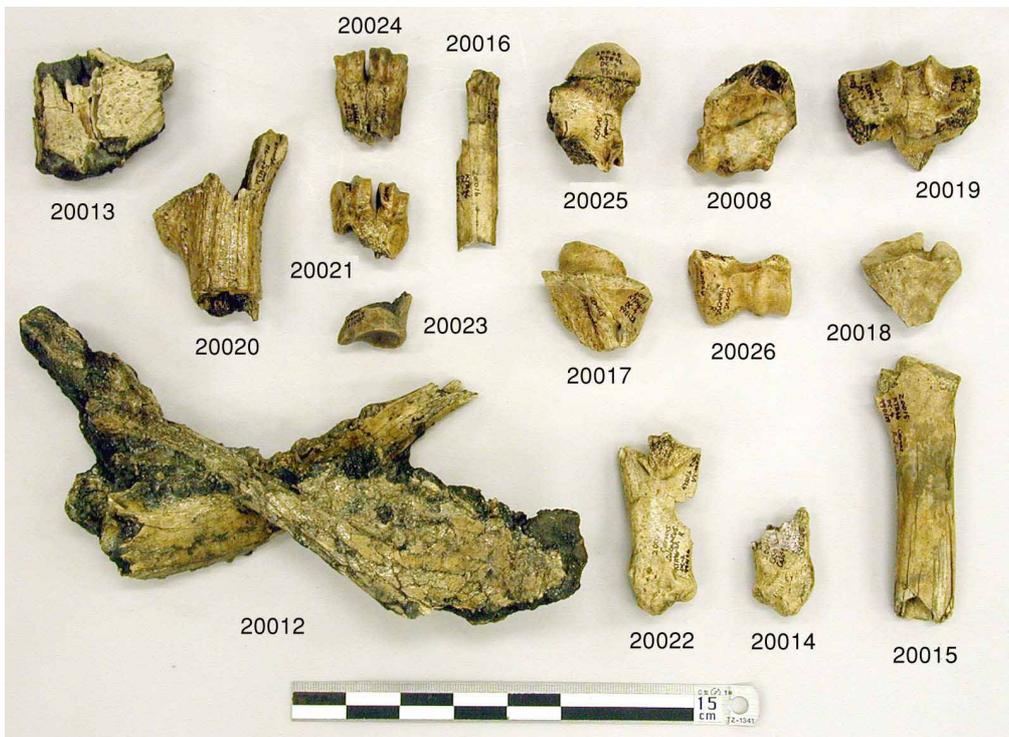


図 5.5.2 ニホンジカ

第6章 鬼虎川遺跡 46次調査地点の珪藻化石

辻本裕也・伊藤良永（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

鬼虎川遺跡は河内平野沖積低地の東辺にあり、生駒断層が走る東方の生駒山地西側斜面の基部、標高80～100mに谷口から低地に向かって発達した沖積扇状地扇端から完新統最上部低地面（松田1997）に位置する。今回発掘調査が行われた46次調査区は、沖積扇状地斜面下位面4（松田2000）を構成するロウブ上に位置する。このロウブの形成時期は縄文時代から古代と考えられている。今回の発掘調査ではロウブを構成するとみられる堆積物から、縄文時代晩期（滋賀里IV～長原式）の遺物、弥生時代前期（新）の遺構、弥生時代前期（中・新）～弥生時代中期IIの遺構が確認されている。

今回、鬼虎川遺跡 46次調査地点の堆積物の成因に関する情報を得ることを目的として珪藻分析を実施する。

1. 試料

調査地点である Loc.1 と Loc. 2 の堆積物の層序を図 6.1 に示す。

両地点の層位関係は、Loc.1の下部の砂礫がLoc.2上部の砂礫に対比される。両地点の標高 -0.2 ～ 3.0m の堆積物中には有機質に富んだ層準が6層準確認されている。

標高(T.P.)-0.2 ～ -0.05mは無層理の泥質堆積物からなる。標高-0.05 ～ 0.0mは未分解植物遺体を含み有機質に富む泥質堆積物からなる。標高0.0 ～ 0.1mは有機質に富んだ泥質堆積物からなり、その上面は変形している。標高0.1 ～ 0.6mは水平層理をなす砂質泥、トラフ型斜交層理をなす砂礫、砂質泥が累重し、上部は有機物に富む。標高0.6 ～ 0.8mは無層理の泥質堆積物からなり、上部で有機質に富む。標高0.8 ～ 1.0mは基質支持の泥質砂からなる。標高1.0 ～ 1.05mは砂礫からなり、基質支持である。標高1.05 ～ 1.35mは有機質に富む細粒砂～泥からなり、上方細粒化する。標高1.35 ～ 2.1mは基質支持の砂礫～砂質泥からなる。砂礫層準ではトラフ型斜交層理をなし、上部の標高1.05 ～ 2.1m層準で有機質に富む。本層からは縄文時代晩期（滋賀里IV～長原式）の遺物が出土し、上面で弥生時代前期の遺構が検出されている。標高2.1 ～ 2.55mは砂質泥～泥質砂からなり、上方粗粒化する。本層上面では弥生時代前期～弥生時代中期末の遺構が検出されている。標高2.55 ～ 2.7mは有機質に富んだ泥層、標高2.7 ～ 2.9mは泥層からなり、その上位をトラフ型斜交層理をなす砂礫が覆う。

試料は、Loc.1とLoc. 2の断面から連続する層位試料として採取された。分析試料採取層準および各分析層準は図 6.1 に示す通りである。

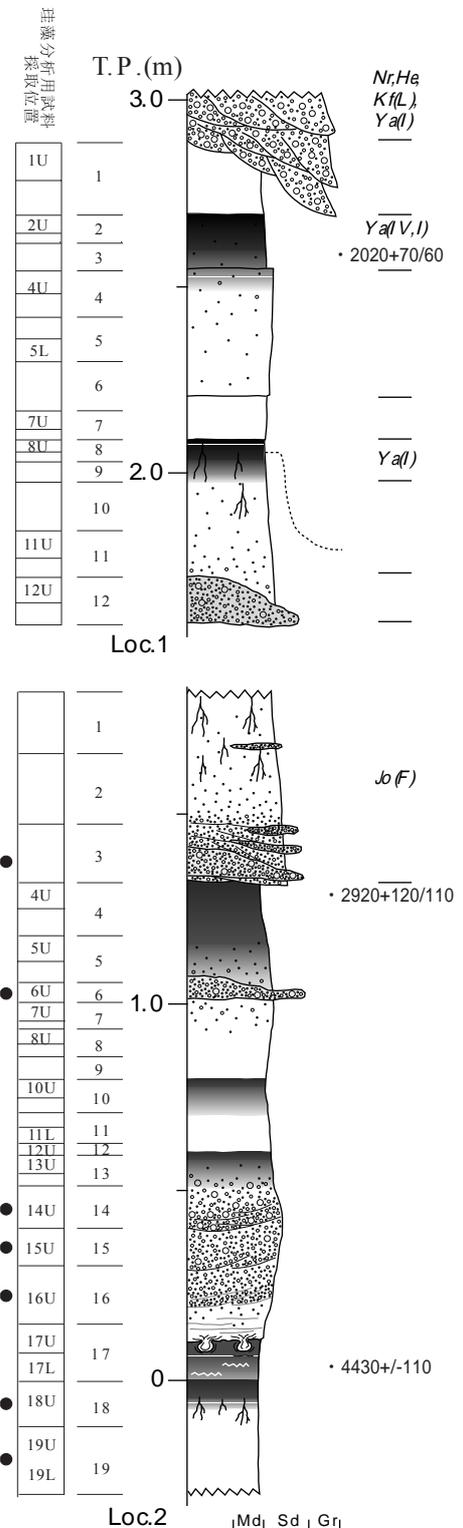


図 6.1 堆積柱状図と試料採取位置。はボーリング試料，それ以外は露頭から柱状で採取された試料。

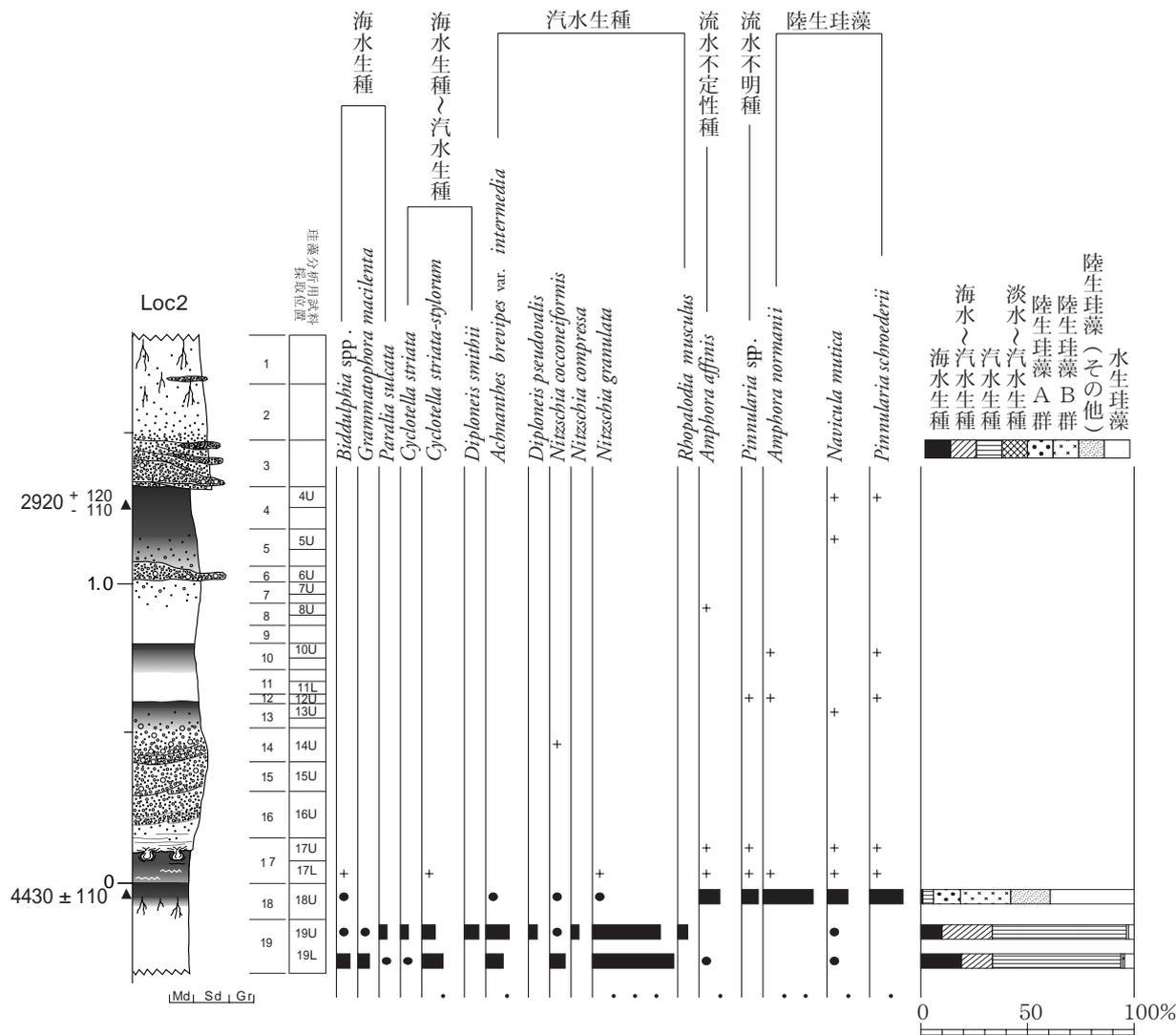


図 6.2 主要珪藻化石群集の層位分布

海水 - 汽水 - 淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、は3%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

2. 分析方法

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、Krammer, K & Lange-Bertalot, H. (1986, 1988, 1991a, 1991b), Krammer, K. (1992), Reichardt, E. (1995), Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. (1996), Lange-Bertalot, H. et al. (1996), Metzeltin, D. & Witkowski, A. (1996) などを用いる。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・

流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率3%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出した化石が現地性の化石か異地性の化石か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai, K. & Watanabe, T. (1995)の環境指標種を参考とする。

3. 結果

図6.2・表6.1に結果を示す。以下に各地点別に化石群集の特徴を述べる。

・ Loc.1

いずれの試料においても珪藻化石の産出数は0~9個体と少ない。僅かに産出した種類の多くは陸生珪藻の種群である。

・ Loc.2

試料番号18U・19U・19Lで100個体以上産出する。産出分類群数は32属78種である。

試料番号19U・19Lの群集組成は類似し、汽水生種が全体の約60%以上産出する。その他にも、海水生種・海水~汽水生種など高い塩分濃度に適応する種が産出する。中でも、*Nitzschia granulata*は約30%産出する。本種は海水泥質干潟指標種(小杉, 1988)とされている。海水泥質干潟指標種とは塩分濃度が12%以上の水域の泥底に付着生活する種群であり、閉塞性の高い塩性湿地などに生育するとされる。その他に、海水~汽水生種・内湾指標種(小杉, 1988)の*Cyclotella striata-stylorum*、汽水生種・海水砂質干潟指標種(小杉, 1988)の*Achnanthes brevipes var. intermedia*などが10%前後産出する。内湾指標種は、内湾水中を浮遊生活する種、海水砂質干潟指標種は、塩分濃度が26%以上の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種とされる。

試料番号18Uでは海水から汽水生種が5%以下に減少する。淡水生種の構成は全体の約55%を陸生珪藻が占める。中でも陸生珪藻B群の*Amphora normanii*が約20%産出する。その他に流水不定性種(流水域にも止水域にも生育する種)の*Amphora affinis*、陸生珪藻A群の*Navicula mutica*、陸生珪藻の*Pinnularia schroederii*が10%前後産出する。

試料番号17L・17U・16U・15U・14U・13U・12U・11L・10U・8U・7U・6U・5U・4Uは、珪藻化石の産出数が100個体以下と少ない。試料番号17Lで57個体、17Uで23個体、10Uで28個体と少ないながらも産出する。若干産出する種は、試料番号18と同様に陸生珪藻がほとんどである。その他の試料は産出数が0~9個体と極端に少ない。これらの試料でも陸生珪藻が認められる。

4. 考察

調査地点最下位の標高-0.05m以深の泥層の珪藻化石群集は、海水泥質干潟指標種の*Nitzschia granulata*などの汽水生種が多産することが特徴であった。本特徴から、本層準は沿岸部の干潟(潮間帯)の堆積環境が推定される。このような珪藻化石群集および推定される堆積環境は、本調査地点北西250mに位置する47次調査区の標高-1.4~1.05m層準(パリノサーヴェイ, 印刷中)、さらにその北西100mの35-2次調査区の標高-1.6~1.2m(パリノ・サーヴェイ, 1998)でも確認されている。これらの地点の層序対比は充分ではないが、標高や放射性炭素年代値を考慮すると、ほぼ同時期の連続する堆積物の可能性が

表 6.1 珪藻分析結果(1)

種類	生態性		Loc1																			Loc2																		
	集分	pH	1U	2U	4U	5U	6U	7U	8U	10U	11L	12U	13U	14U	15U	16U	17U	17L	18U	19U	19L																			
<i>Biddulphia</i> spp.	Euh																																							
<i>Chaetoceros</i> spp.	Euh																																							
<i>Coscinodiscus</i> spp.	Euh																																							
<i>Diploneis suborbicularis</i> (Greg.)Cleve	Euh	E1																																						
<i>Diploneis weissflogii</i> (A.Schmidt)Cleve	Euh																																							
<i>Grammatophora macleanii</i> W.Smith	Euh																																							
<i>Grammatophora</i> spp.	Euh																																							
<i>Nitzschia pandiformis</i> Gregory	Euh	E2																																						
<i>Paralia sulcata</i> (Ehr.)Cleve	Euh	B																																						
<i>Thalassionema nitzschoides</i> (Grun.) Grunow	Euh	A,B																																						
<i>Thalassiothrix frauenfeldii</i> Grunow	Euh																																							
<i>Trichophysphenia australis</i> var. <i>rosellata</i> Hustedt	Euh																																							
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	Euh-Meh	D1																																						
<i>Cyclotella striata</i> (Kuetz.)Grunow	Euh-Meh	C1																																						
<i>Cyclotella striata</i> - <i>C. stylorum</i>	Euh-Meh	B																																						
<i>Diploneis smithii</i> (Breb.)Cleve	Euh-Meh	B																																						
<i>Diploneis smithii</i> var. <i>pumila</i> (Grun.)Hustedt	Euh-Meh	E2																																						
<i>Diploneis</i> spp.	Euh-Meh	E2																																						
<i>Navicula alpha</i> Cleve	Euh-Meh	D2																																						
<i>Navicula marina</i> Ralfs	Euh-Meh	E2																																						
<i>Achnanthes brevipes</i> Agardh	Meh	D1																																						
<i>Achnanthes brevipes</i> var. <i>intermedia</i> (Kuetz.)Cleve	Meh	D1																																						
<i>Caloneis</i> spp.	Meh																																							
<i>Diploneis pseudovalis</i> Hustedt	Meh																																							
<i>Fragilaria fasciculata</i> (Agardh)Lange-B.	Meh																																							
<i>Nitzschia cocconeiformis</i> Grunow	Meh	E1																																						
<i>Nitzschia compressa</i> (Bailey)Boyer	Meh	E1																																						
<i>Nitzschia compressa</i> var. <i>elongata</i> (Grun.)Lange-Bertalot	Meh	E1																																						
<i>Nitzschia granulata</i> Grunow	Meh	E1																																						
<i>Pseudopodisma kosugii</i> Tanimura et Sato	Meh	E1																																						
<i>Rhopalodia musculus</i> (Kuetz.)O.Muller	Meh	E2																																						
<i>Terresionoe americana</i> (Bair.)Ralfs	Meh																																							
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind																																							
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	al-bi																																							
<i>Amphora normani</i> Rabenhorst	al-il																																							
<i>Amphora pediculus</i> (Kuetz.)Grunow	ind																																							
<i>Amphora</i> spp.	Ogh-ind																																							
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	unk																																							
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.)Simonsen	al-bi																																							
<i>Caloneis angustivalva</i> Pett	unk																																							
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve	al-il																																							
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	al-il																																							
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>minuta</i> (Grun.)Cleve	al-il																																							
<i>Caloneis</i> spp.	unk																																							
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.)Cleve	al-il																																							
<i>Critacula</i> spp.	unk																																							
<i>Cymbella aspera</i> (Ehr.)Cleve	unk																																							
<i>Cymbella tumida</i> (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	al-il																																							
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	al-il																																							
<i>Diploneis parva</i> Cleve	ind																																							
<i>Diploneis</i> spp.	ind																																							
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	unk																																							
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.)Hustedt	al-hob																																							
<i>Fragilaria construens</i> var. <i>triundulata</i> Reichelt	al-il																																							
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch)Lange-Bertalot	al-il																																							
<i>Fragilaria virescens</i> Ralfs	al-il																																							
<i>Fragilaria</i> spp.	unk																																							
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	unk																																							
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	al-ph																																							
<i>Gomphonema grovei</i> var. <i>lingulatum</i> (Hust.)Lange-Bertalot	al-il																																							
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	al-ph																																							
	ind																																							

表 6.1 珪藻分析結果(2)

種 類	生態性		Loc1																			環境指標種		Loc2																		
	塩分	pH	1U	2U	4U	5U	6U	7U	8U	11U	12U	4U	5U	6U	7U	8U	10U	11L	12U	13U	14U	15U	16U	17U	17L	18U	19U	19L														
Comphonema spp.	Ogh-unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-nd	al-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Melostira solida Eulenstein	Ogh-unk	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Melostira solida var. constrictum (Ralfs) V. Heurck	Ogh-nd	r-bi	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Navicula contenta Grunow	Ogh-nd	al-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Navicula contenta fo. biceps (Arnott) Hustedt	Ogh-nd	al-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-nd	al-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Navicula elginensis var. cuneata H. Kobayasi	Ogh-nd	al-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-nd	al-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-nd	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Neidium bisulcatum (Lagerst.) Cleve	Ogh-nd	ac-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Neidium iridis (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	l-bi	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-nd	al-bi	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Nitzschia terrestris (Pet.) Hustedt	Ogh-nd	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Orthoseira roseana (Rabh.) O'Meara	Ogh-nd	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-nd	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-nd	ac-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-nd	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Pinnularia schroederi (Hust.) Krammer	Ogh-nd	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-nd	ac-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-nd	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Rhiocosphenia abbreviata (Ag.) Lange-B.	Ogh-hil	al-il	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Sauroneis acuta W. Smith	Ogh-nd	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
Sauroneis spp.	Ogh-unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-														
海水生種合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0														
汽水生種合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0														
淡水～汽水生種合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0														
珪藻化石総数			0	9	2	3	0	1	3	0	6	6	2	0	2	28	3	9	6	1	2	0	23	52	96	7	7															

凡 例

- H.R.:塩分濃度に対する適応性
 Euh.:海水生種
 Euh-Meh.:海水生種 - 汽水生種
 Meh.:汽水生種
 Ogh-Meh.:淡水 - 汽水生種
 Ogh-hil.:真塩好塩性種
 Ogh-nd.:真塩好不定性種
 Ogh-unk.:真塩不明種
- pH.:水素イオン濃度に対する適応性
 al-bi.:真アルカリ性種
 al-il.:好アルカリ性種
 ind.:pH 不定性種
 ac-bi.:真酸性種
 unk.:pH 不明種
- C.R.:流水に対する適応性
 l-bi.:真止水性種
 l-ph.:好止水性種
 ind.:流水不定性種
 r-ph.:好流水性種
 r-bi.:真流水性種
 unk.:流水不明種
- 環境指標種群
 A.:外洋指標種, B.:内湾指標種, C1.:海水藻類指標種, D1.:海水砂礫干潟指標種, D2.:汽水砂礫干潟指標種, E1.:海水泥質干潟指標種, E2.:汽水泥質干潟指標種 (以上是小杉 1988)
 J.:上流性河川指標種, K.:中 - 下流性河川指標種, M.:湖沼浮遊性種, N.:湖沼沼澤地指標種, O.:沼澤地付着性種 (以上は安藤 1997)
 S.:好汚濁性種, U.:広域適応性種, T.:好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T. 1996)
 R.:陸生珪藻 (RA:A 群, RB:B 群, RI 群, 伊藤・堀内 1981)

ある。

本層の上位標高-0.05 ~ 0.0mまでの有機質に富んだ植物遺体を含む泥層では珪藻化石群集は大きく変化し、汽水生種が激減、淡水生種が卓越するようになる。淡水生種の大半が好氣的な環境に耐性のある陸生珪藻が占めていたことから、陸水域へ変化すると同時に比較的乾燥する場所になったことが推定される。この変化が起こった時期は放射性炭素年代測定値から 4,430yrBP と推定される。

標高 0m より上位の堆積物では珪藻化石は少なくなり、統計的に扱える化石数が得られなかった。そのため、堆積環境を推定することができない。ただし、汽水生種がほとんど検出されなくなることから、本層準より上位の堆積物が基本的には陸水成のものであることが窺える。また、有機質に富む層準を含めて、僅かに検出された種類の多くが陸生珪藻の種類であったことは、堆積物の好氣的環境下の堆積物に由来し、堆積後も比較的乾いた場所であったことを示している可能性がある。なお、珪藻化石が少なかった原因として、このような陸域環境のように珪藻化石の生育に適さない環境のほか、砂礫が卓越する層準などでは堆積速度や堆積物粒子と珪藻の挙動の違いなどから、取り込まれる珪藻化石数が少なかった可能性もある。さらに堆積後の経年変化の過程での分解消失の可能性もある。

以上のことから、調査地点の堆積環境の変化をまとめると、約 4400 年前頃に沿岸部の干潟の堆積環境から陸水域へと変化した。その後、弥生時代中期末の時期の頃まで陸水成の堆積をみるが、珪藻化石が繁茂するような安定した水域が形成されることはなかった可能性がある。

先述したように、今回の調査地点は沖積扇状地斜面下位面 L4 (松田, 2000) に位置している。本面を形成するロウブの堆積開始は、今回の結果からみて約 4400 年前以降と推定される。また、堆積物中に認められた有機質に富んだ泥質堆積物は湿地のような場所に堆積したのではなく、比較的乾燥した場所の土壌発達により形成されたものの可能性がある。ちなみに、ロウブ縁辺の完新統最上部低地面に位置する 47 次調査区では弥生時代 I ~ II 様式の層準では湿地性の珪藻化石群集が確認されているが、立木(ヤマグワ・ヤナギ)も確認されており、やや湿った場所へ変化したことが推定されている(パリノ・サーヴェイ株式会社 2001)。このように弥生時代 I ~ II 様式の頃には土地的に安定した状況が広がっていた可能性がある。これらのことについては今後の調査成果の蓄積をもって総合的に評価していきたい。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p.73-88 .
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa . Diatom , 10 , p.35-47 .
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌, 6 , p.23-45 .
- 梶山彦太郎・市原実 (1986) 大阪平野のおいたち。138p. 青木書店 .
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27 , p.1-20 .
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa . BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353. , BERLIN · STUTTGART .
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae . Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p. , Gustav Fischer Verlag .
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae . Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p. , Gustav Fischer Verlag .
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae . Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p. , Gustav Fischer Verlag .

- Krammer ,K. & Lange-Bertalot ,H.(1991b)Bacillariophyceae ,Teil 4 ,Achnantheaceae , Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae)und Gomphonema .Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa ,248p. ,Gustav Fischer Verlag .
- Lange-Bertalot , H. , Kuelbs , K. , Lauser , T. , Noerpel-Schempp , M . & Willmann , M. (1996) Dokumentation und Revision der von Georg Krasske beschriebenen Taxa . Iconographia Diatomologica 3 ,358p. , Koeltz Scientific Books.
- Lange-Bertalot , H . & Metzeltin , D. (1996) Oligotrophie-Indikatoren 800 Taxa repraesentativ fuer drei diverse Seen-Typen . Iconographia Diatomologica 2 , 390p. , Koeltz Scientific Books.
- Metzeltin, D & Witkowski, A. (1996) Diatomeen der Baeren-Insel , Suesswasser-und marine Arten . Iconographia Diatomologica 4 , 287p. , Koeltz Scientific Books.
- 松田順一郎 (2000) 1.2 鬼虎川遺跡の地形・地質条件 . 「鬼虎川遺跡北部の歴史時代耕作地跡と地震層序 - 国道 170 号線被服団地前交差点立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第 38 次発掘調査報告ム」, p.2-3 ,財団法人東大阪市文化財協会
- 松田順一郎 (2000) 1.2 神並遺跡の地形・地質条件 . 「神並遺跡発掘調査報告集 - 第 9・10・18・19・22 次調査 - 」, p.5-8 , 財団法人東大阪市文化財協会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1998) VII 鬼虎川遺跡の古環境復原 . 「鬼虎川遺跡第 35-2・3 次発掘調査報告」, p.56-80 , 財団法人東大阪市文化財協会 .
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (2001) 鬼虎川遺跡第 47 次調査地点の古環境解析 . 「石切生喜病院別館建設に伴う鬼虎川遺跡第 47 次発掘調査報告」, p.37-50 , 財団法人東大阪市文化財協会 .
- Reichardt, E. (1995) Die Diatomeen (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica (1843) . Iconographia Diatomologica 1 , 107p. , Koeltz Scientific Books.

第7章 鬼虎川遺跡第46次調査に伴う花粉分析

文化財調査コンサルタント株式会社（担当：渡辺正巳）

はじめに

鬼虎川遺跡は、大阪平野東部の東大阪市弥生町地内に所在する遺跡である。

本報告は、財団法人東大阪市文化財協会が遺跡周辺の古環境復元のために文化財調査コンサルタント（株）に委託して実施した、花粉分析業務の概報として、同社の渡辺がまとめ直したものである。

分析試料について

図7.1に示す2地点で採取された試料を対象として分析を行った。また、分析した試料はすべて財団法人東大阪市文化財協会により採取され、提供を受けたものである。

各地区での柱状図および試料採取層準を、図7.2,3の花粉ダイアグラム中に示す。柱状図右側の数字が試料番号で、採取深度に示した。また、柱状図左側に発掘地点の層序および推定堆積年代を示した。

分析方法および結果

花粉分析処理は、渡辺（1995）に従って行った。

顕微鏡観察は400倍、あるいは必要に応じ600倍、1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。しかし、一部の試料では花粉化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは珪藻化石総数で200を越えることができなかった。

花粉分析結果を図7.2,3の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また右端に各分類毎の相対量を示すグラフを付けた。

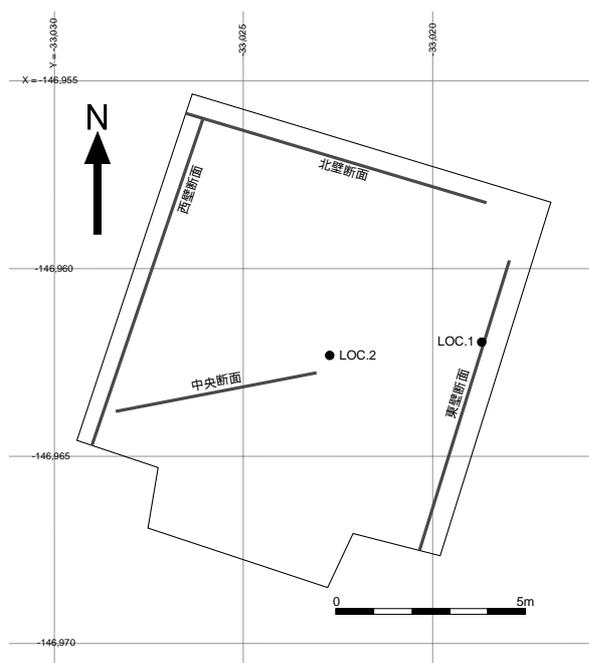


図7.1 試料採取地点

花粉分帯

花粉組成の特徴、および各層の対比から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料も下位から上位に向かって記した。

(1) 帯：Loc.2試料 19～10L

アカガシ亜属が卓越するほか、木本花粉で高率を示す種類はない。試料13～10Lでは草本花粉の割合が高い。このことから、草本花粉の割合が低いb亜帯（試料19～17）、草本花粉の割合が高いa亜帯（試料13～10L）に細分した。

(2) 帯：Loc.1試料 12～1L、Loc.2試料 2L

スギ属等の針葉樹種が木本花粉内で卓越する。草

兔虎川 Loc. 1

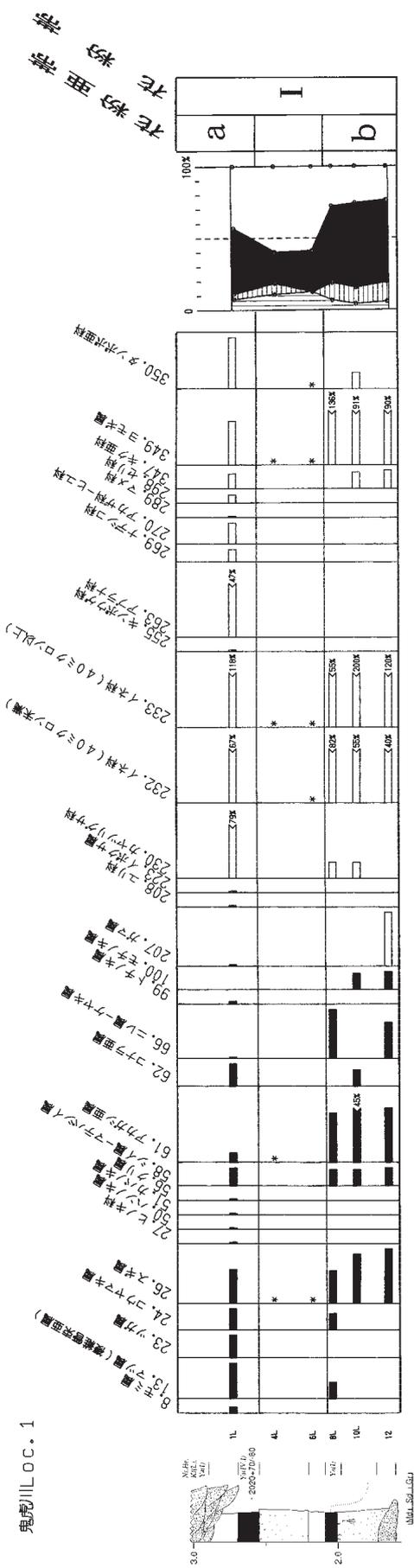


図 7.2 Loc.1の花粉ダイアグラム

兔虎川 Loc. 2

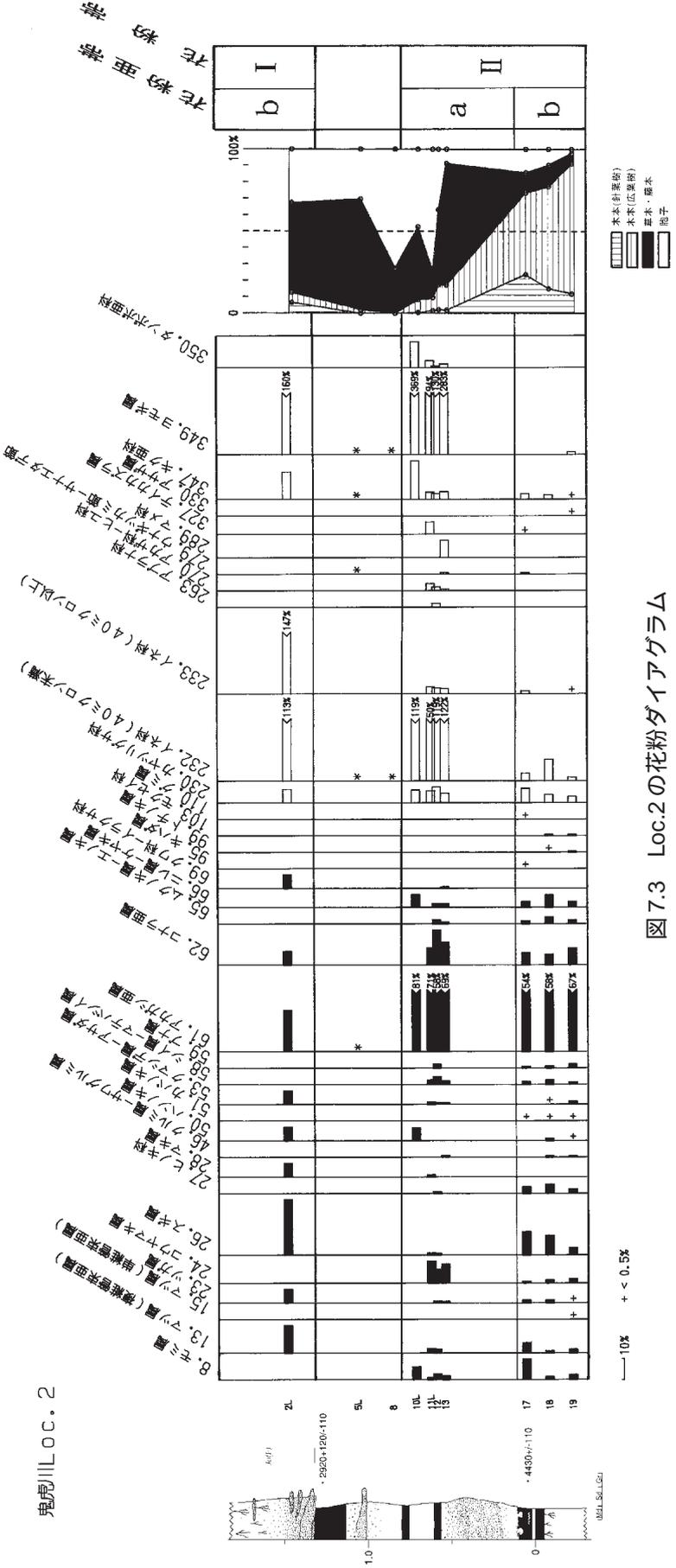


図 7.3 Loc.2の花粉ダイアグラム

本花粉の割合は全ての試料で高いが、Loc.1 試料 1L では高率を示す種類が特に多くなる。このことから、高率を示す草本花粉の種数が少ない b 亜帯 (Loc.1 試料 12 ~ 4L、Loc.2 試料 2L)、高率を示す草本花粉の種類が多い a 亜帯 (Loc.1 試料 1L) に細分した。

環境変遷

ここでは、花粉帯毎に遺跡周辺の古環境を推定する。

(1) 帯期

木本花粉の出現傾向から、遺跡東方に連なり遺跡の集水域でもある生駒山地にはカシ類を要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。一方、モミ、ツガ、スギで代表される温帯針葉樹も照葉樹林に混在して、あるいは中間温帯林として照葉樹林帯の上部に分布していたと考えられる。

草本花粉の出現傾向を基に a、b 亜帯に分けていたことから、近辺の古環境変化をそれぞれの亜帯期に分けて考察する。

1) b 亜帯期

花粉化石の含有量は多いが、草本花粉の割合が低い。また、珪藻分析から試料 19 層準は「沿岸部の干潟 (潮間帯)」での堆積、試料 18、17 層準は「陸水域で比較的乾燥する場所」での堆積という解析が成されている (第 6 章参照)。

試料 18、17 には (おそらく紫外線の影響により) 同定不能となった花粉化石が多く含まれた。しかし花粉化石の含有量が多く、草本花粉、胞子の割合が低いことから、乾燥した陸域で堆積したとは考えにくい。安定した環境で堆積した後陸化し、土壌化を受けたのではなからうか。また、陸化し土壌化を受けた時期には、遺跡近辺に草やシダが分布を広げていたと考えられる。

2) a 亜帯期

花粉化石の含有量が少なくなり、草本花粉、胞子の割合が高くなる。さらに (おそらく紫外線の影響により) 同定不能となった花粉化石が多く含まれた。以上のことから水成堆積の休止期での土壌生成作用により堆積したと考えられ、ヨモギやススキ、シダの生育する草原が広がっていたと考えられる。

(2) 帯期

全体として花粉化石の含有量が少ないものの、木本花粉、草本花粉ともに一定の出現傾向を示す。

スギをはじめとする温帯針葉樹種花粉が高率になり、気温低下および降雨量の増加が推定される。針葉樹の分布は拡大し、照葉樹林の分布は縮小したと考えられる。

帯の始まりは縄文時代晩期頃であり、「弥生の小海退」に相当する冷涼期の影響であると考えられる。

草本花粉の出現傾向を基に a、b 亜帯に分けていたことから、近辺の古環境変化をそれぞれの亜帯期に分けて考察する。

1) b 亜帯期

帯期に入るとイネ科 (40ミクロン以上) 花粉が出現を始め、急激に増加する。イネ科 (40ミクロン以上) は栽培種の「イネ」に由来する可能性が有り (中村, 1974)、帯期の時期とともに注目される。

堆積状況から、ここで検出された花粉化石は河川内外および近隣の水田の植生に由来すると考えられる。畦や河川などの微高地上の乾燥した地面にはキク科 (ヨモギ属) 雑草やススキなどが成育し、河川縁辺の湿地にはヨシなどが成育していたと考えられる。

2) a 亜帯期

b 亜帯期に比べ花粉化石の含有量が増え、検出される花粉化石の種類数も増加する。引き続きイネ科(40ミクロン以上)、イネ科(40ミクロン未満)、ヨモギ属は高率であるが、加えてカヤツリグサ科、アブラナ科なども高率を示すようになる。

b 亜帯期同様に、堆積状況から、ここで検出された花粉化石は河川内外および近隣の水田の植生に由来すると考えられる。畦や河川などの微高地上の乾燥した地面にはキク科(ヨモギ属)、アブラナ科雑草やススキなどが成育し、河川縁辺の湿地にはカヤツリグサ科雑草やヨシなどが成育していたと考えられる。

まとめ

鬼虎川遺跡で花粉分析を行い、以下のことを考察した。

- (1) 花粉分析結果から、
、
帯の2花粉帯を設定した。このほか、それぞれの花粉帯をa、b亜帯に細分した。
- (2) 縄文時代中期頃以降の遺跡近辺、および周辺の山地の古植生を主として、古気候や堆積環境についても推定した。これらの内、特筆すべき事項は以下の事柄である。
 - 1) 縄文時代晩期頃には、遺跡近辺で稲作が行われていた。
 - 2) 縄文時代晩期には温帯針葉樹の拡大傾向があったことが明らかになり、「弥生の小海退」として表される小氷期の開始時期に関する資料が得られた。

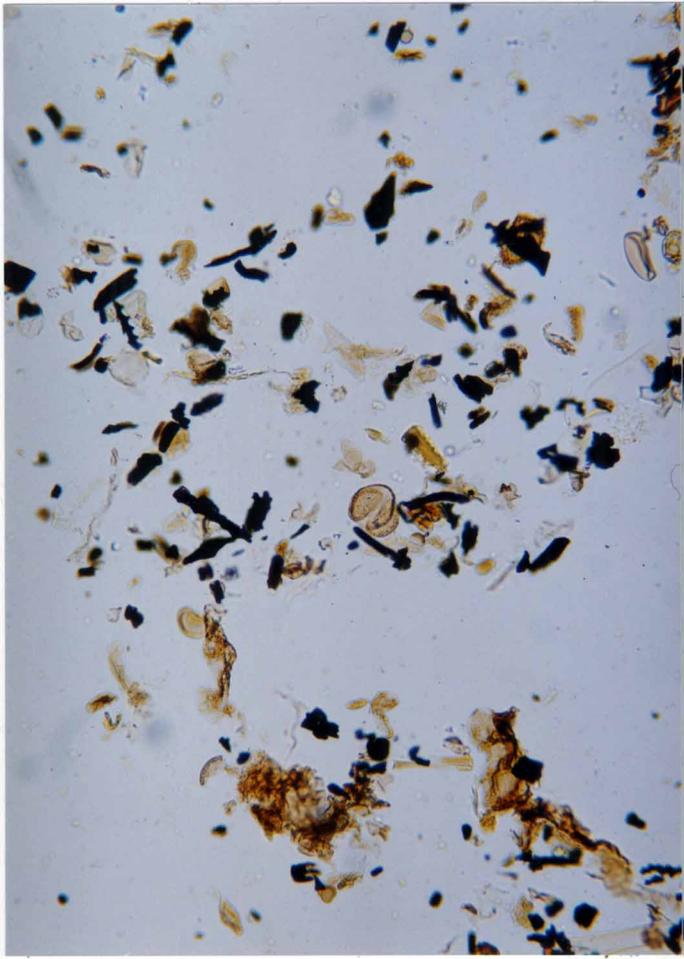
引用文献

中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネを中心として。第四紀研究, 13, p. 187-197.

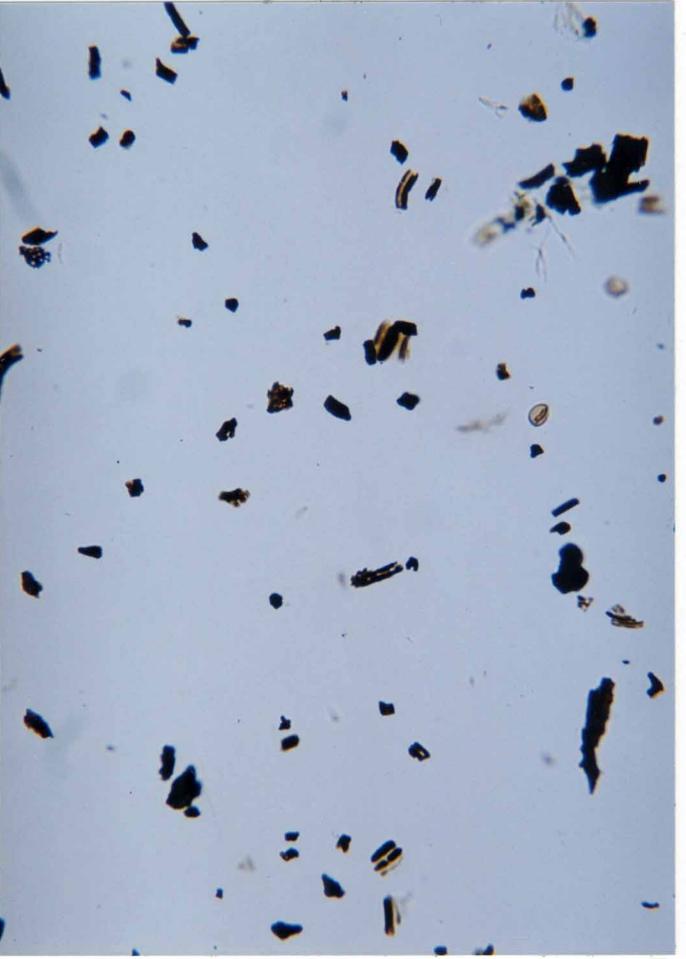
渡辺正巳(1995a)花粉分析法。考古学ライブラリー65, 考古資料分析法, 84-85., ニュー・サイエンス社, 東京.

花粉化石顕微鏡写真説明

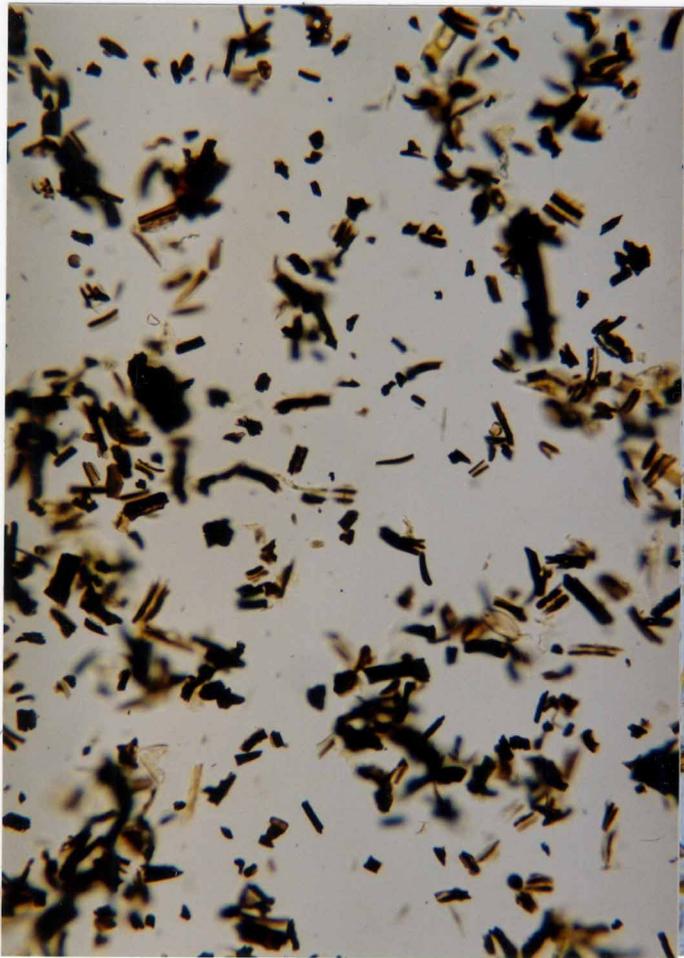
No.	学名	和名	倍率
1	状況写真	(Loc.1 試料 1)	約 100 倍
2	状況写真	(Loc.1 試料 12)	約 100 倍
3	状況写真	(Loc.2 試料 10)	約 100 倍
4	状況写真	(Loc.2 試料 19)	約 100 倍
5	<i>Abies</i>	(モミ属)	約 820 倍
6	<i>Pinus(Haploxyton)</i>	(マツ属:単維管束亜属)	約 820 倍
7	<i>Pinus(Diploxyton)</i>	(マツ属:複維管束亜属)	約 1230 倍
8	<i>Tsuga</i>	(ツガ属)	約 820 倍
9	<i>Cryptomeria</i>	(スギ属)	約 1230 倍
10	<i>Alnus</i>	(ハンノキ属)	約 1230 倍
11	<i>Carpinus-Ostrya</i>	(クマシデ属 - アサダ属)	約 1230 倍
12	<i>Fagus</i>	(ブナ属)	約 1230 倍
13	<i>Cyclobalanopsis</i>	(アカガシ亜属)	約 1230 倍
14	<i>Quercus</i>	(コナラ亜属)	約 1230 倍
15	<i>Aphananthe-Celtis</i>	(ムクノキ属 - エノキ属)	約 1230 倍
16	<i>Ulmus-Zelkova</i>	(ニレ属 - ケヤキ属)	約 1230 倍
17	<i>Cyperaceae</i>	(カヤツリグサ科)	約 1230 倍



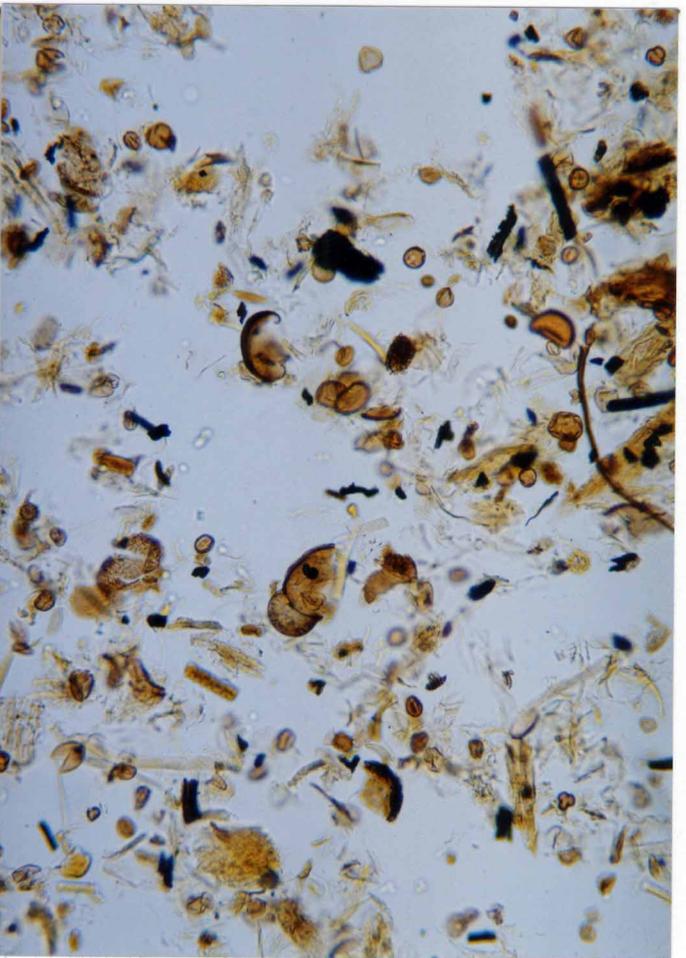
1



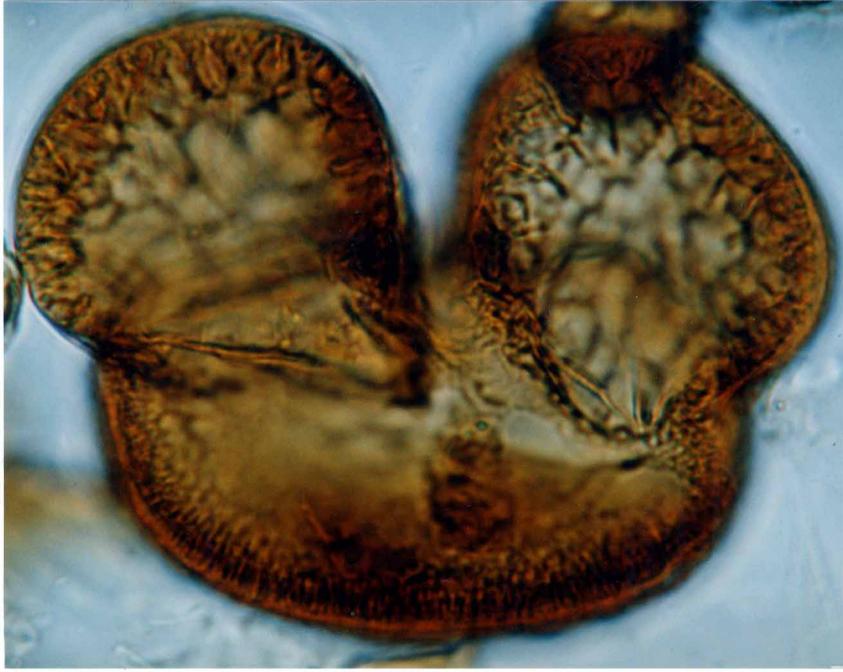
2



3



4



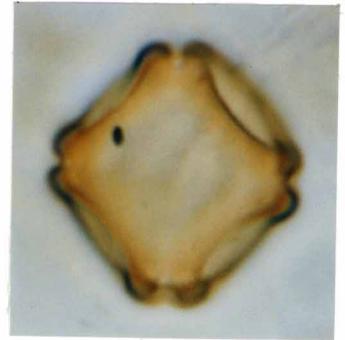
5



9



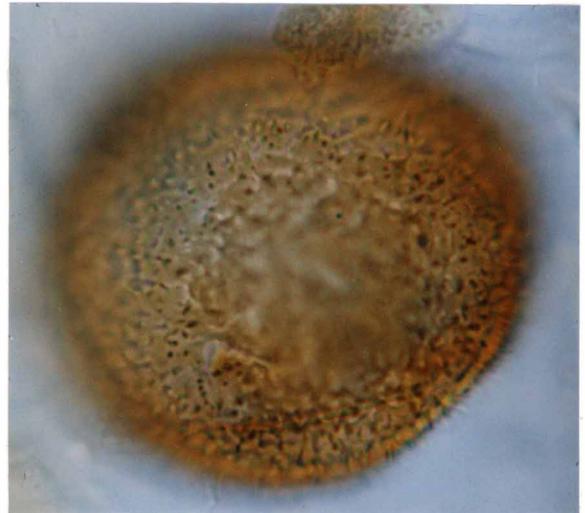
6



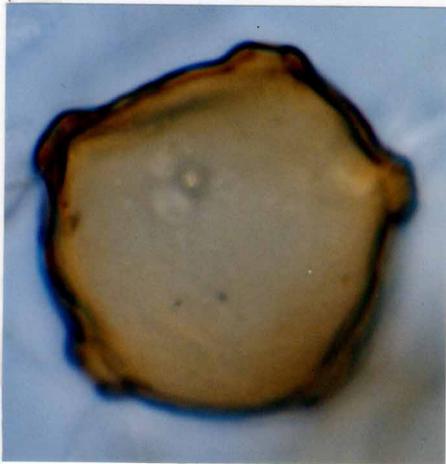
10



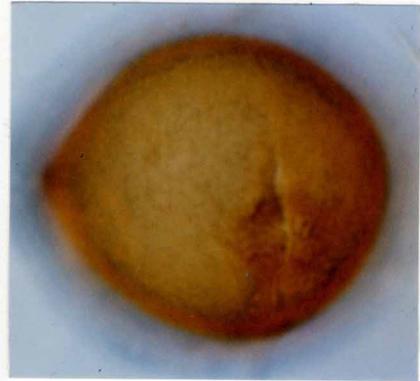
7



8



11



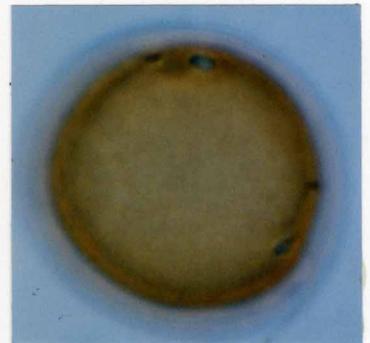
12



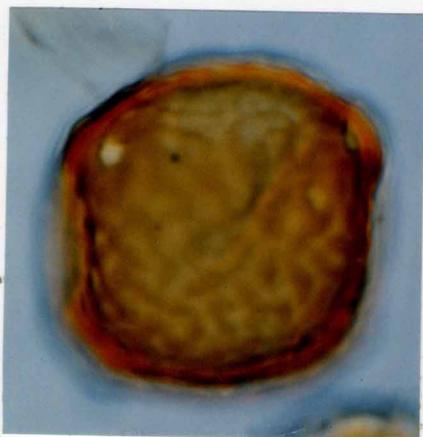
13



14



15



16



17

第8章 弥生時代中期末の銅鐸形土製品について

本調査では弥生時代中期末の銅鐸形土製品が2点出土した(図5.2.1~4)。25は弥生時代中期IV様式期の土器細片や絵画土器片(23)、用途が明らかでない土製品(27,28)にともなう西壁の落ち込みから出土した。26は弥生時代前期やとくに同中期後半の土器、ミニチュア土器(9)にともなうEP3から出土した。いずれの遺構ももっとも新しい型式の土器から、弥生時代中期IV様式期に埋まったものと判断される。

25は残存高6.51cm、鐸身上面の幅約3.5cm、奥行約2cm、同底の幅推定6cm、奥行4.5cmである。鈕は完全に鐸身から剥離し、鐸身および鱗の一部は破損している。鐸身の横断面形状は楕円形を呈し、鐸身の厚さは4~5mm。胎土はにぶい黄褐色で、1~2mm大で角礫~亜角礫形状の長石や石英、花崗岩片、0.5~1mm以下の雲母や角閃石が含まれる。同時期の鬼虎川遺跡の弥生土器の胎土に特徴的な角閃石や輝石など生駒山はんれい岩(生駒山地領家帯研究グループ1986)起源の鉱物が含まれないことから、土器づくりに用いた素地とは別のものを用いられている。

鐸身の片面の中央部には2~2.5cmの斜格子文帯が縦方向に施され、中央の2本の直線によって斜格子文帯は2帯に区画されている。さらに斜格子文帯の両端にも1本ないしは2本の直線が施され、一部ナデ消されている。もう一方の面は丁寧な縦方向のナデが施されているだけで文様はない。鐸身側面には鱗が付されており、一方の鱗部にはやや稚拙な扇形文がみられ、外向きに凸の鋸歯文を意識して施されたと考えられる。鐸身両面や舞には2孔一対の型持穴が穿たれている。鐸身内面は指ナデおよび指オサエで仕上げられている。

かつて本調査地点の北西200mの地点で行われた鬼虎川遺跡第7次調査では、砥石に転用された銅鐸鑄型破片や銅鐸鑄型の可能性のある砥石片が出土した(東大阪市遺跡保護調査会1981)。このうち銅鐸鑄型として確実視できるものには、斜格子文帯によって袈裟襷状に区画された鐸身部の線刻と鱗部には内面に凸の鋸歯文の線刻がある(図9.1)。この銅鐸鑄型と比較すると、銅鐸型土製品25は袈裟襷状区画が捨像されているものの、鐸身に斜格子文帯が、鱗に鋸歯文を意識した稚拙な扇形文が表現されている。このことからおそらく7次調査で出土した銅鐸鑄型で造られた銅鐸を間近かで見ることができた人物が、その銅鐸の文様や形を抽象化して土で作ったものと考えられる。

26は残存高3.3cm、最大幅2.8cm、最大奥行2.8cmである。鈕は根元の部分だけが残存し、鐸身の下半は欠損している。胎土は灰白色で、1mm以下の亜角~亜円形状の長石や石英が含まれる。やはり日常土器づくりに用いられる素地とは異なる。鐸身はおそらく無文で鱗はない。全体的に表面は丁寧なナデが施されている。鐸身下半が欠損していることから鐸身両面にあったとは限らないが、一方の面には2孔一対の型持穴が穿たれている。また、舞には単孔がある。

これまでに鬼虎川遺跡では4次調査(図9.2)と7次調査(図9.3)で銅鐸形土製品が各1点出土しており(才原1981・芋本1982)、本調査での出土例は3例目、4例目となる。同じ河内平野の亀井遺跡でも銅鐸形土製品4例の出土例がある(寺川1980)。今日に至っては全国で百例を優に越えるものと想像される。しかしながら銅鐸形土製品の性格をめぐっては、具体的な祭祀活動の内容が復原されず、あるいはモデルとなるような祭祀活動を引き合いに出さず短絡的に祭祀活動と結びつけられことが多い。

4次調査出土銅鐸形土製品については報告書が未刊行のためその出土状況を知ることはできない。7次調査で出土した銅鐸形土製品については、芋本(1982)は「個人ないしは家族単位で用いられる護符と

しての性格を備えたものであろう。」と半ばカタストロフィックな解釈を示しているが、「個人ないしは家族単位」で銅鐸形土製品を使っていたのならば膨大な数の出土例があってもよい。ただ、第7次調査出土銅鐸形土製品については出土した層準や供伴している遺物からみて、破損して使用できなくなった製品とともに水溜まりの中に廃棄されていたと考えられ、仮に銅鐸形土製品が祭祀活動に使用されていたとしても廃棄場では脈絡を異にする遺物が圧倒的に支配しているため、供伴遺物との組み合わせから具体的に祭祀活動を復原することは困難である。本調査で出土したいずれの銅鐸形土製品においても、祭祀活動とかがわったするにはあまりもその証拠がなさ過ぎる。

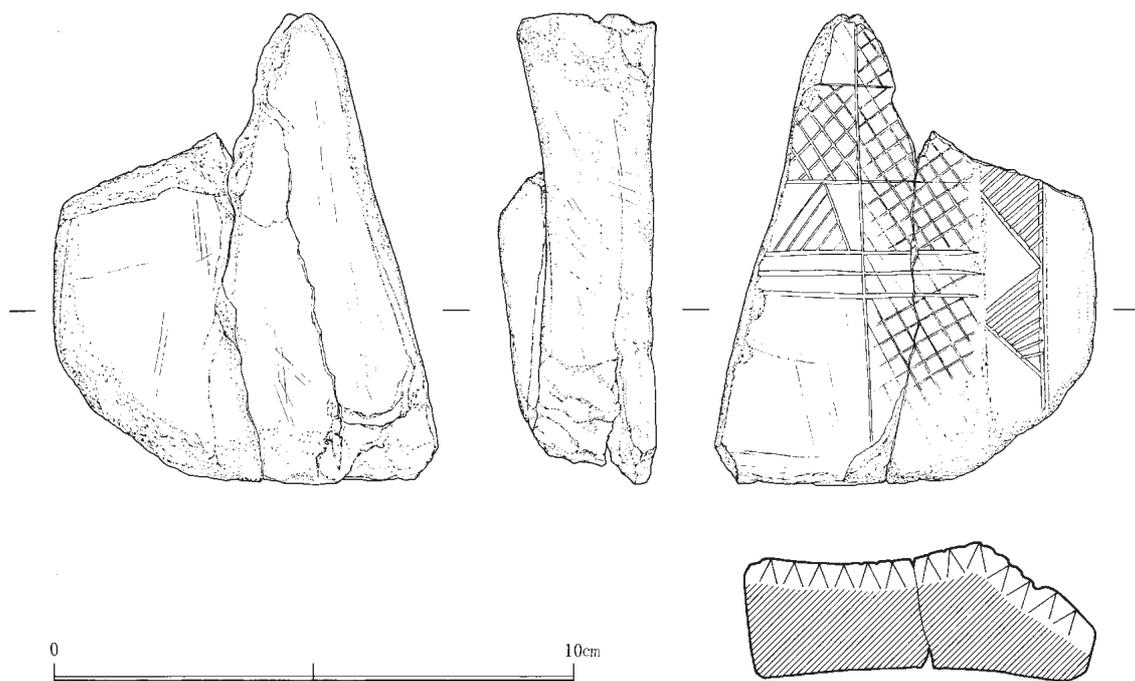


図9.1 鬼虎川遺跡第7次調査出土銅鐸鑄型実測図．東大阪市遺跡保護調査会（1981）より．

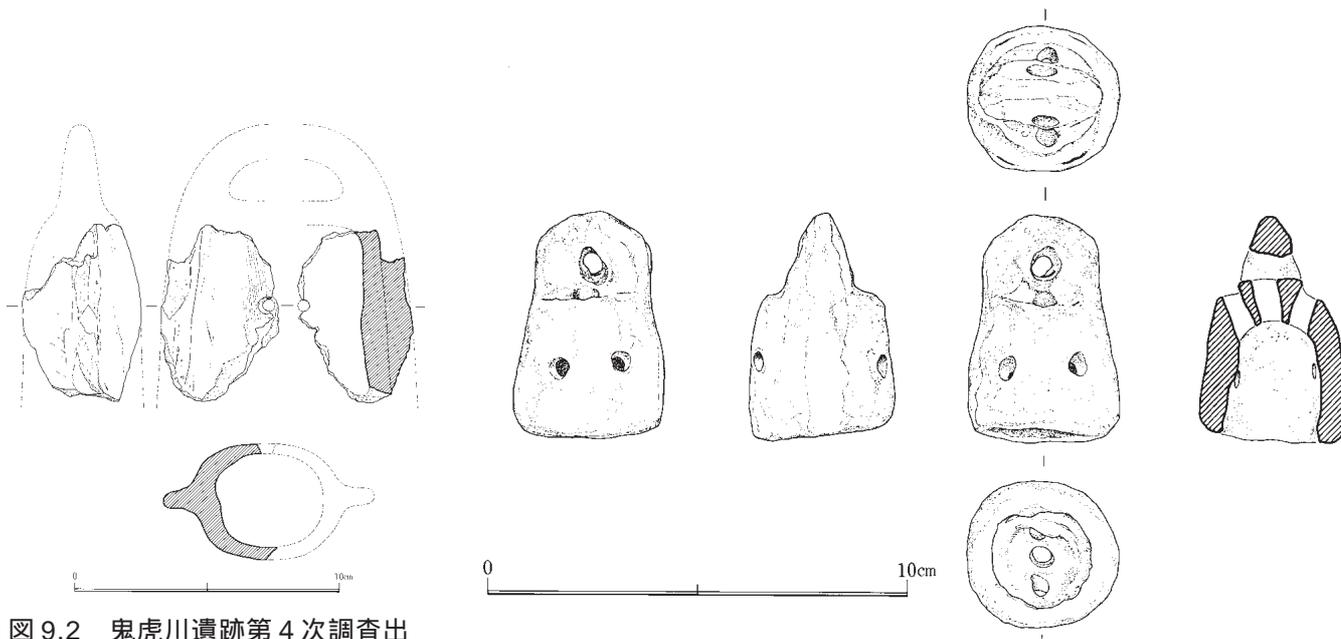


図9.2 鬼虎川遺跡第4次調査出土銅鐸形土製品実測図．東大阪市遺跡保護調査会（1981）より．

図9.3 鬼虎川遺跡第7次調査出土銅鐸形土製品実測図．財団法人東大阪市文化財協会（1982）より．

第9章 墳丘墓出土1号人骨について

1号人骨は依存状態がきわめて悪く、骨の取り上げとともに大部分が崩壊すると予想されたため、現地で観察・計測を行った。また、人骨は数ブロックに分割し、土ごと取り上げて持ち帰った。室内ではアルコール洗浄とともに不必要な土を極力除去するよう心掛け、試料を風乾した後、アセトンに溶かしたパラロイドB72(5~10%)を含浸させる方法で保存処理を行った。

1号人骨は調査地の南端、墳丘上の西端付近で検出した。人骨は仰向け状態で、胸で両手を合わせ、手には赤く塗られた花崗岩の玉石を握っていたと考えられる。また、右大腿骨のすぐ横には右脛骨および腓骨が遠位を頭のほうに向けた状態で並び、明らかに大腿骨遠位との位置関係が不自然であることがわかる。この状況から判断すると、1号人骨は膝を立てた仰臥屈で木棺に納められて埋葬された。その後、木棺が腐食して天板が落ち、立っていた膝に重みが加わったことで関節がはずれて大腿骨と右脛骨・腓骨が横並びになったと考えられる。

1号人骨は骨盤の形態が横に長い楕円形状をなすことから、女性のもとと推定される(図10.2)。全体的に風化が著しく、骨盤に残る妊娠線の履歴は確認できなかった。また、大腿骨の粗線の発達が著しく、生前はかなり運動していたことを示している(図10.4,5)。大腿骨端は完全に癒着していることから成人骨と考えられる(以上、大阪市立大学医学部第二解剖学教室・安部みき子氏のコメント)。

右大腿骨の長さから見積もって、1号人骨の身長40cm程度であったと考えられる。



図10.1 肋骨と尺骨・橈骨



図10.2 寛骨および腰椎

図10.3 右脛骨



図10.5 左大腿骨拡大写真

図10.4 右大腿骨(写真左・中)と左大腿骨(同右)

第10章 まとめ

- (1) 本調査では縄文時代後期、同晩期、弥生時代前期、同中期（畿内第III～IV様式）、古墳時代後期、奈良時代、平安時代の遺物が出土した。これらのうち遺構面あるいは流路の時期を示すのは、縄文時代晩期、弥生時代前期、同中期（畿内第IV様式）、平安時代である。
- (2) 縄文時代晩期の遺構や生活面はみられず、流路のみが確認できた。
- (3) 弥生時代前期の遺構には南南東～北北東方向にのび、互いに平行な3本の溝が確認できたが、層序学的にそれぞれ独立した加工面を有し、共存した可能性はない。3本の溝のうちDC4からは多数の土器や動物遺体が出土した。
- (4) 墳丘墓は弥生時代中期（畿内第IV様式期）に併行する。墳丘の周溝から出土した土器には搬入品がめだち、畿内第III様式期に併行すると考えられる土器も稀にみられる。墳丘で検出した人骨は女性人骨で1体のみである。
- (5) 弥生時代中期（畿内第IV様式期）の銅鐸形土製品が2点出土した。このうち1点は7次調査で出土した銅鐸鋳型で造られた銅鐸の文様や形を抽象化して作られたものである。また、いずれの銅鐸形土製品も祭祀に利用されたという積極的な証拠はない。
- (6) 平安時代の遺構には地下水を低所へ排水するための溝が認められた。この溝には洗掘の痕跡があった。
- (7) 扇央付近から低地部にかけて舌状に張り出す微高地は、おもに5000～2400年前に堆積した洪水氾濫堆積物や土石流性の堆積物からなり、鬼虎川遺跡の弥生時代の居住域はこの微高地上にあったと推定される。

文 献

- 赤澤 威・小田静夫・山中一郎 1980 日本の旧石器，立風書房．
- 生駒山地領家帯研究グループ 1986 生駒山はんれい岩体について．地球科学，40，102-114．
- 芋本隆裕 1982 銅鐸形土製品．鬼虎川遺跡の金属器関係遺物 第7次発掘調査報告2，財団法人東大阪市文化財協会，26-29．
- 大阪府教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 1995 鬼虎川遺跡26次・西ノ辻遺跡18～20次調査概要報告．
- 梶山彦太郎・市原 実 1972 大阪平野の発達史 ¹⁴C年代データからみた．地質学論集，7，101-112．
- 才原金弘 1981 第4次調査出土の銅鐸形土製品．鬼虎川遺跡の銅鐸鑄型 第7次発掘調査報告1，東大阪市遺跡保護調査会，14．
- 寒川 旭・宮地良典 2001 VI. 段丘及び段丘堆積物．大阪東北部地域の地質．地域地質研究報告(5万分の1地形図幅)，地質調査所，64-72．
- 下川浩一・苅屋愛彦・宮地良典・寒川 旭 1997 生駒断層系の活断性調査．地質調査所研究資料集N0.303(平成8年度活断層研究調査概要報告書)，105-113．
- 竹岡俊樹 1989 石器研究法，言叢社，121-140．
- 地学団体研究会大阪支部編著 1999 大地のおいたち 神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類．築地書館．224p．
- 寺川史郎 1980 銅鐸形土製品．亀井・城山 寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書，財団法人大阪文化財センター，367-370．
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会編 1987 日本の地質6：近畿地方．共立出版，297p．
- 東大阪市遺跡保護調査会 1981 鬼虎川遺跡の銅鐸鑄型 第7次発掘調査報告1．
- 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 1988 鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告．
- 財団法人東大阪市文化財協会 1994 鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書．
- 財団法人東大阪市文化財協会 1996 鬼虎川遺跡第33次発掘調査報告．
- 財団法人東大阪市文化財協会 1982 鬼虎川の金属器関係遺物 第7次発掘調査報告2．
- 藤井直正・都出比呂志 1967 原始・古代の枚岡，第1部各説．東大阪考古学研究会．207pp
- 別所秀高 2001a 弥生時代の鬼虎川・西ノ辻遺跡周辺の地形形成．第12回大阪の弥生遺跡検討会資料，
- 別所秀高 2001b 鬼虎川遺跡第47次調査出土動物遺体．石切生喜病院別館建設に伴う鬼虎川遺跡第47次発掘調査報告，財団法人東大阪市文化財協会，p.33-36，
- 前田 昇 1966 生駒山地の地形と断層線との関係について．大阪学芸大学報，14，211-219．
- 松田順一郎 1996 打製石器．宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書第2分冊，財団法人東大阪市文化財協会，57-122．
- 若松博恵・井上伸一 1999 鬼虎川遺跡第40次発掘調査報告．東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 1998年度，財団法人東大阪市文化財協会，1-76．
- Schmid, E. 1972 Atlas of Animal Bones for Prehistorian, Archaeologist and Quaternary Geologist. Amsterdam, London, New York, Elsevier.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. 1998 INTCAL'98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, 1041-1083.
- (以上第1～5章，第9～10章分)

報告書抄録

ふりがな そうでんせんてつとうたてかえこうじにともなうきとらがわいせきだいよんじゅうろく
じはくつちょうさほうこくしょ

書名 送電線鉄塔建替工事に伴う鬼虎川遺跡第46次発掘調査報告書

副書名

シリーズ名

シリーズ番号

編著者名 別所秀高 / 辻本裕也 / 伊藤良永 / 株式会社文化財調査コンサルタント

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行年月日 2001.12.31

作成法人ID 42170

郵便番号 577-0843

電話番号 06-6736-0346

住所 東大阪市荒川3-28-21

ふりがな きとらがわいせき

遺跡名 鬼虎川遺跡

ふりがな ひがしおおさかしにちょうめせんごひゃくごのに

遺跡所在地 東大阪市弥生町2丁目1505-2

市町村コード 27227

遺跡番号 35

北緯 34.40.28

東経 135.38.23

調査期間 1999.01.12-1999.02.17

調査面積 108.32

調査原因 送電線鉄塔建替工事

種別 流路 / 集落跡 / 墓域

主な時代 縄文 / 弥生 / 平安

遺跡概要 縄文後期 - 土器 / 縄文晩期 - 流路 - 土器 / 弥生前期 - 溝 + ピット - 土器 + 石器 + 動物遺体 / 弥生中期 (IV) - 墳丘墓 + 土坑 + 井戸 + ピット - 土器 + 石器 + 木製品 + 銅鐸形土製品 / 古墳後期 - 須恵器 / 奈良 - 瓦 / 平安 - 溝 - 土器

特記事項 弥生時代中期(畿内第IV様式期)の土坑から銅鐸形土製品が出土した。扇央付近から低地部にかけて舌状に張り出す微高地は、おもに5000～2400年前に堆積した洪水氾濫堆積物や土石流性の堆積物からなることが判った。

送電線鉄塔建替工事に伴う
鬼虎川遺跡第46次発掘調査報告書

発行年月日 2001年12月31日
発行 財団法人東大阪市文化財協会
〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21
印刷 株式会社ミラテック
〒534-0025 大阪市都島区片町2丁目9-9
